

【御言】

緒論

・復帰摂理とは、墮落した人間に創造目的を完成せしめるために、彼らを創造本然の人間に復帰していく神様の摂理をいいます。

【感想】

今の展開されている摂理ですが、摂理の根本は復帰にあります。すべての摂理は墮落した人間に創造目的を完成させるように導くことを目的としています。その摂理の一環で私たちも導かれているというのです。

ですので、私たちの個人的目的の第一義は間違いなく創造目的の完成だということです。つまり、三大祝福を完成することが私たちが復帰された目的でもあるのです。

全世界の出来事がこの摂理の一環として行われているのです。ですので、摂理を知らなければ世界情勢は読めませんし、時代の流れも見ることができません。私たちの人生も創造目的を完成する方向に流れているのであって、その流れに逆らうと不幸が襲ってくるということもあるのです。

したがって、人類が伝道されることは神様の摂理なのです。これは時代の流れであって、何かの力によるものではありません。私たちは先駆けて復帰されたにすぎません。皆様も復帰される運命にあるというのです。そのような復帰摂理が今も展開されているのです。

私たちが創造目的の完成に近づくことは摂理を進めることになります。逆に創造目的から遠ざかると摂理を妨げることになります。ですので、家庭において夫婦が円満に愛情の伴う授受作用を行い、一体化すれば摂理は進むのであり、逆に夫婦が喧嘩をして争ってばかりいれば摂理を妨げることになるのです。

これが日本の全体主義との決定的な違いなのです。全体主義は全体の目的を達成するためには個人的な幸福は犠牲にしなければならない、個人的な幸福は達成してはいけないという考え方です。ですが、私たちの道は、双方が補完的に実現されるべきと説明します。個体が幸せになってこそ、全体が発展し、全体が発展してこそ、個体の幸せもあるという理論なのです。

ですので、私たちは所属する教会の公的な摂理を優先しつつも、家庭における摂理も疎かにできないという立場なのです。

【御言】

墮落人間の復帰と完成

・人間が長成期の完成級において墮落し、サタンの主管下におかれるようになりました。このような人間を復帰するためには、まず、サタンを分立する摂理をなさなくてはなりません。

・墮落人間がサタンを分立して、原罪を取り除くには、真の父母として来られるメシヤによって重生されなければなりません。

・それゆえに、墮落した人間は

①サタン分立の路程を通して、アダムとエバが成長した基準、すなわち、長成期の完成級まで復帰した型を備えた基台の上で、②メシヤを迎え、重生することによって、原罪を脱いで、墮落以前の立場に復帰したのち、③メシヤに従って更に成長し、④創造目的を完成することができます。

【感想】

私たちの信仰路程において一番のポイントは主管してくるサタンの分立です。サタンは様々なものを通して人間を主管しています。それは時にお金であったり、非原理の人間を使ったり、また国家権力であったりもします。そのようなサタンの主管から私たちは脱しなければならないのであり、そのためにサタンを分立するのです。

働くにおいてもお金のために働くのではなく、神様の御旨のために働くようにするのが本筋であって、お金は後から付いてくるようになっていました。これも一つのサタン分立なのです。

また、国家権力は様々な意味で宗教に介入してきた歴史を持っています。現状の日本においては政教分離のスタンスを取っていますので、政治が宗教に介入するということは、公共の福祉に反することがない限り、ないでしょう。ですが、真のお父様が日本に入国できなかったのも国家権力ゆえだったのです。その意味において、私たちは国家権力に主管されないように、つまり国家権力を用いて侵入してくるサタンを防備するために、神様を主権とする国家を立てようとしていると思います。

そのような様々なサタンを分立して私たちは長成期の完成級まで復帰されなければならないのです。その上で祝福を受けて原罪を清算し、それから完成期を歩まなければならないのです。

ここでも明確に語られているように、祝福を受けてすべて終わるのではないのです。創造目的を完成してはじめて終わるのです。ですので、祝福を受けた後にも完成期の歩みが残っているために、祝福だけ受けても完全に救われることは無いというのが、この説明でご理解頂けるとと思います。

復帰摂理の完結は創造目的の完成をもって成されます。ですので、祝福がゴールではないのです。これは二世においても同じです。ですので、私たちの救われる基準というのは創造目的の完成度によるのです。そのためには責任分担を果たさなければなりません。

皆様はいかがですか。祝福を受けただけで救われたと思っているようなことはありませんか。本当の救いとは創造目的を完成して初めて完結するのです。

【御言】

復帰摂理

・復帰摂理は、創造目的を再び成就するための再創造の摂理であるので、原理によって摂理されなければなりません。それゆえに、これを復帰原理といいます。

【感想】

人類を救済する復帰摂理は墮落した人間を再創造する摂理でもあるので、ここでは原理と紹介されていますが、創造原理が同じように適用されるということです。

そして、何よりもポイントなのは原理でと紹介されているように、規則正しい法則性に則って摂理は進められるということなのです。

ですので、復帰摂理は人間的な気まぐれ的な行動で成就されるというようにはなっていません。きちんと、数理性、法則性をもって成就されていくために、ある基準を達成するときには、目標死守ということも言われるのだと思います。

復帰摂理の目的は前回の紹介しましたが、人間が創造目的を成就することです。これは、個人においても、国家、世界においても変わりません。ですので、私たちの家庭においても、個人的に個性完成をして、家庭において家庭完成をして、万物をしっかりと愛情で主管して天国的な環境を準備できれば、家庭レベルでの三大祝福は全うされ、創造目的は完成されたと思われるかもしれません。

ですが、全体目的と個体目的の関係において、全体目的を離れた個体目的は存在しないのであって、家庭が完成に近づくと同時に、社会、国家、世界復帰のために私たちの精誠を投入する摂理は続くと思います。

今、韓半島の南北統一が叫ばれていますが、それがゴールではありません。韓国だけではなく、世界人類が創造目的を完成してこそ復帰摂理の目的が成就されたということになります。

私たちは個体目的と全体目的を成就するために歩んでいます。それは原理という厳密な法則性の中において成されるのです。人間の意思で自由に決まるというものではありません。その意味において、復帰原理を学ぶ前に創造原理を今一度ひもといっておくのも必要なのではと思います。

【御言】

蕩滅復帰原理

- ・ここではまず、人間がその墮落によって、神様とサタンとの間において、どのような立場におかれるようになったかということを知らなければなりません。
- ・人間始祖が完成していたならば、彼らは神様のみに対して生活する立場におかれるはずでした。
- ・しかし、墮落してサタンとの血縁関係を結んだので、墮落直後、アダムとエバは、神様とも、サタンとも対応することができる中間位置におかれるようになったのです。

【感想】

墮落論においても学ばれたことだと思いますが、人間は墮落することによって、神様とサタンとの中間位置に置かれるようになったのです。そして、神様と相対して善なる条件を立てれば私たちは神側に分立され、サタンと相対して悪なる条件を立てればサタン側に分立されることになります。

では、神様と相対するにはどのようにすればいいのか。サタンと相対するとどのような感情が誘発されるのかということは復帰原理でこれから紹介されると思います。

神様は真の愛を持って人間に愛情を注がれています。ですので、私たちが人間や万物に愛情を注ぐような立場に立てば神様と相対するようになります。真の御父母様もそのような指導をされていると思います。ですが、サタンは天使長なので愛されることも求めてしまいます。愛の減少感もっと愛されたいという心情の発露ではないでしょうか。したがって、愛されたいという感情に包まれるとサタンが相対してきます。

真の御父母様の勝利圏は地獄のような環境においても神様のように人々を愛された歴史にあると思います。そのような神様とサタンとの綱引きの位置に私たちは置かれているということです。

ですので、信仰者の基本は御父母様のように愛することを実践することであって、御父母様に愛されるのは小さな子供の時のことなのです。

ですので、サタン側から神側に復帰されてくるということは、心情面において、愛されることを求める自分から愛することを実践する自分への変化として現れると思います。

このように愛することも実践するが、愛されることも求めてしまう。そのような中間位置にいるのが墮落した人間なのです。皆様はいかがでしょう。愛することを実践されていますか、それとも愛されることを求めていますか。

【御言】

墮落人間の分立

- ・このような墮落人間を、神様はどのようにしたらサタンから分立させることができるのかというと、彼自身が善なる条件を立てたときには天の側に、悪なる条件を立てたときにはサタンの側に分立されるのです。

【感想】

復帰されるべき私たちは中間位置にいます。それであるがゆえに、皆、善なる条件を立てるのに必死になるのです。何が善なのかという判断は天の摂理を進めること、神様の摂理を進めること、つまりは創造目的を完成する方向に進む内容を実践することが条件となり、これが善の条件となります。

他人に親切にする。これも人を愛することを通じて、自らの人格が成長し、神様の理想とされる人格が磨かれるということになれば善だと思います。ですが、何かしらの見返りを求め、自分の利益のために人に親切にするのであれば、その行いは自己中心的な欲望を満たす行いとなり、悪なる条件になることもあります。

ですが、すべての実践が自分に結実するのです。善なることを行えば、何ら見返りがなかったとしても、自分は神側に分立されるのです。逆にどんなに多額の報酬を受けたとしても摂理を妨害

するなど悪なる条件を立てれば、自分がサタン側に分立されることになります。つまりは自分にサタンが侵入するということなのです。

ですので、良く献金においてその使い道を心配する人も大勢いますが、その心配はほとんど必要のないことなのです。献金をした行いが善であれば、献金をした段階で自分は神側に分立されるのです。それが献金をした恩恵なのです。逆に献金を私的に使うと公金問題にひっかかり、これが悪なる条件となって、結局は自分に返ってくるのです。

ですので、私たちは日々、善を実践することのみに集中すべきであって、まさに結果は神様に委ねるべきなのです。伝道も献金も善の実践なのです。ですが、日々の生活において御旨と関係のない生活をしていると、知らない間に悪なる条件を立ててサタン側に分立されていることもあるのです。

皆様は大丈夫ですか。善の実践をすれば、神側に分立されます。つまり、自分に返ってくるのです。この恩恵を皆様はご存じですか。

【御言】

蕩滅復帰とは

- ・「蕩滅復帰」とはどのような意味なのでしょう。どのようなものであっても、本来の位置と状態を失ったとき、それらを復帰しようとするれば、そこに必要な何らかの条件を立てなければなりません。
- ・このような条件を立てることを「蕩滅」といい、
- ・墮落人間がこのような条件を立てて、創造本然の位置と状態へと再び戻っていくことを「蕩滅復帰」といい、
- ・この蕩滅復帰のために立てる条件のことを「蕩滅条件」といいます。
- ・このように蕩滅条件を立て、創造本然の人間に復帰していく摂理を「蕩滅復帰摂理」といいます。

【感想】

蕩滅がなぜ必要なのでしょう。それは本来の位置や状態を失ってしまったためなのです。ですので、蕩滅が重いというのは、代々の家系において失ったものがたくさんあるということなのです。また蕩滅が軽いというのは、悪なる条件を立てることが少なかったために、失ったものが少なかったということです。

ですが、過去において、失ったものも蕩滅することで元の状態に戻すことができるのです。これは素晴らしい福音だと私は思います。元の状態に戻れることが保証されているのですから。

ですから私たちが蕩滅をする度に私たちは創造本然の人間へと近づいてゆくのです。そして、失ったものを取り戻すことができるようになるのです。ですから、蕩滅を嫌うと言うことは、医者が治療するために打つ注射をいやがる子供と同じだといえます。注射を打てば健康になれるのに、ただ少し痛いから嫌だということです。蕩滅も同じだと思います。蕩滅も条件が成立すれば、本然の位置に私たちは戻れるのです。

ですので、表面的な苦痛や苦労だけを見て、蕩滅を避けるということは原理が分かっていないことになります。むしろ、蕩滅条件を立てることに希望と喜びを見いだすべきなのが本来の条件だと思います。ただ、その条件の立て方はキチンと教会の指導を受けるべきであると思います。自分勝手にこの苦痛は蕩滅だから感謝すれば自分はもっと高い位置に行けると思い込むのは、信仰上の落とし穴に落ちることになります。蕩滅条件とは創造本然の位置に再び戻すことのできる条件でなければなりません。そのためには、しっかりと神側の責任者に報連相をしておく必要があります。

決して、自分勝手に断食などをして、信仰者だと傲慢になるようなことはしないようにしてください。精誠祈禱においても、断食するにおいても中心者の判断で行うべきなのです。自分勝手に蕩滅条件だと思って苦痛を求めても、我欲を満たすだけで本然の位置に戻るところか遠ざかることもありますので、中心者によく授受作用をしておくべきだと私は思います。

そのような意味で、キチンと教会の指導を受けて蕩滅条件を立てられることをお勧めします。

【御言】

蕩減条件の程度

- ・蕩減条件はどの程度立てなければならないのでしょうか。
- ・第一は、同一なる価値の蕩減条件、第二は、より小さい価値の蕩減条件、第三には、より大きな価値の蕩減条件を立てる場合をいいます。
- ・蕩減条件を立てる方法は、墮落するようになった経路と反対の経路をたどることによって蕩減条件を立てなければなりません。
- ・蕩減条件はだれが立てなければならないのかというと、人間の責任分担として人間自身が立てなければなりません。

【感想】

ここでも紹介されますが私たちは非常に恵まれています。それは、蕩減条件において、より小さな条件で蕩減することができるためなのです。予定論でも紹介しましたように、摂理においては神様が95%を担われます。私たちは5%で十分なのです。そのようなわずかな条件で大きく蕩減できる道を私たちは歩んでいます。

ですが、いくらこのような恩恵のある道であったとしても私たちが蕩減条件を立てることができなければ蕩減をすることはできません。この蕩減条件を立てるのはどこまでも私たちの責任分担なのです。ですから、本来、代理蕩減という言葉は存在しないはずなのです。

ただ、個人の背負っている蕩減があまりにも大きすぎて、この道を歩めないという場合には、協作者として教会の方々が様々に手伝ってくださり、清平摂理も活用しながら蕩減を軽くするということはあると思います。

そして、蕩減条件の立て方なのですが、墮落するようになった経路と反対の経路をたどらなければならないのです。つまり、他の人と比べて同じことをすれば良いということではありません。それぞれの家系、氏族において失ったものが異なるために、私たち個々人の蕩減条件の立て方も異なってくるのです。

そのために、先祖がどのような罪を犯し、何を失ってきたのかを明確にしないと適切な蕩減条件は立てられません。それは、お腹が痛いのに頭痛薬を飲むのと同じなのです。そのような意味で、是非、教会で家系図を作られることを私はお勧めします。氏族、ご先祖様においてどのような罪を犯してきたのかを明確にして、その反対の経路で蕩減条件を立てるのです。

もちろん、国家的、世界的な摂理もありますが、これは墮落論でもあったように連帯罪に関連します。先祖や遺伝的な罪にはどうしても先祖の犯した罪状を明確にして、それと反対の経路でというのが基本です。

皆様には蕩減条件の立て方が明確に見えていますか。周りの人を見てただ真似をしているというようなことはありませんか。

【御言】

メシヤのための基台

- ・メシヤは人類の真の父母として来られなければなりません。その理由は、墮落した父母から生まれた人類を重生させ、その原罪を贖ってくださらなければならないからです。
- ・墮落人間が「メシヤのための基台」を造成するためには、アダムが、どのような経路によって創造目的を成就し得なくなったのであるかということ、まず知らなければなりません。
- ・なぜなら蕩減条件は、墮落の経路と反対の経路をたどって立てなければならないからです。
- ・したがって、墮落人間が創造本然の人間に復帰するためには、「メシヤのための基台」を完成した基台の上でメシヤを迎え、原罪を取り除かなければなりません。

【感想】

私たちは何故にメシヤを真の父母と呼ぶのでしょうか。それは、私たちが真の御父母様から再び生まれるからなのです。重生の理論が明確になれば、私たちを生んでくださった方を父母と呼ぶのは自然なことだと思います。

そして、私たちが御父母様をお迎えするまでに用意しておかなければならなかったのが、メシヤのための基台なのです。ですが、私たちはそのような基台が十分に準備できずに、時が満ちたので、祝福を受けたということもあると思います。それであるがゆえに、いずれはメシヤのための基台も準備するということを御父母様にお約束して受けた祝福なので、条件的な祝福であるとも呼ばれるのではないのでしょうか。

それであるがゆえに、私たちは祝福を受けてからでも何としてもメシヤのための基台を準備すべきなのであって、そのための責任分担があるということです。

ですが、メシヤの基台を造成する方法を知らなければ、どうしてメシヤのための基台を造成することができるのでしょうか。原理はその方法も明確に提示しています。蕩滅原則によって、アダムがどのような経路で創造目的を成就し得なくなったのかということを知ること、その反対の経路をたどることで、メシヤのための基台を造成できるということです。

これから、様々な家庭におけるメシヤのための基台を造成した歴史を学びます。これが他人事ではないことを私たちは知っておくべきなのです。聖書に登場する家庭は、私たちの家庭に共通する内容をふんだんに含んでいるということを忘れてはならないと思います。

【御言】

アダムが創造目的を完成するためには

- ・元来、アダムが創造目的を完成するためには、二つの条件を立てなければなりませんでした。
- ・第一は「信仰基台」を造成することでした。アダムが神様のみ言を守りながら、成長期間を経なければならなかったのです。
- ・第二は、「実体基台」を造成することでした。「信仰基台」の上で神様と一体となり、み言の「完成実体」となったとき、個性完成者となることができました。
- ・しかし、アダムが墮落して、「信仰基台」をつくることができず、み言の「完成実体」となることができなかったのも、創造目的を達成することができなかったのです。

【感想】

蕩滅条件を立てるときに、よく信仰基台と実体基台ということを述べられると思いますけど、それぞれの意味をよく理解しておく必要があります。これも他の人の真似をするというのではなく、理論的にも整理しておいたほうが良いのではないのでしょうか。

信仰基台とは神様の御言を守り実践することなのです。よく断食をしたり、祈禱をすることを条件とすることがありますが、その基本は神様から賜った御言を実践するためなのです。ですので、ただ食べるのを我慢するだけでは我慢大会と同じなのです。そうではなく、聖書の御言、御父母様の御言をしっかりと訓読して、その一言でも実際に実行に移すことを通して、ある一定期間、御言を実践することが信仰基台の基本なのです。

ですので、御言と関係のない信仰基台というのは、御言を受けることができない時代における万物条件のように、非常に幼いときだけのことなのです。成長するにつれて、私たちは真の御父母様の御言や指示を受けるようになります。それをある一定期間、守り実践することが信仰基台なのです。

実体基台とは、御言を一定期間実践し、御言が体恤されることなのです。よく実体基台は墮落性を脱ぐことだとイコールで考えることもあるかもしれませんが、墮落性を脱ぐだけでは御言を体恤したとは言えません。御言を実践して体恤できたが故に、墮落性が消えたというのが本来の実体基台なのです。決して、自分の墮落性を無理矢理力でねじ伏せることではないと思います。実体基台の基本は御言が自分において実体化することを意味します。真の御父母様の御言を意識しなく

でも体に習慣的に染みついたというのであれば、実体基台は自然と立てられます。なぜなら、創造本性が表面化して、墮落性が消えるからなのです。

皆様は大丈夫ですか。無理矢理墮落性を脱ぐんだと力づくで実体基台を立てているようなことはありませんか。

【御言】

墮落人間の創造目的成就

- ・墮落人間が創造目的を成就し得る基準を復帰するためには、まず初めに、人間始祖が立てることのできなかった、「信仰基台」を蕩滅復帰しなければなりません。
- ・その基台の上で、「実体基台」を立てることによって成就される「メシヤのための基台」の上でメシヤを迎えて原罪を取り除かなければ、「完成実体」となることができません。

【感想】

私たちは墮落人間として創造目的を成就できない存在でした。その私たちが創造目的を成就するためには、まず初めに信仰基台として、神様の御言を受けて、それを一定期間実践しなければなりません。

これが私たちの精誠条件としてしっかりと私たちの生活や体に定着できれば、実体基台が造成されます。御言が実体化できれば、その御言は私たちに神性を復帰させてくれますので、自然と墮落性は消えて行くことになります。ですが、実体基台ばかりを強調するあまり、御言を実践することが疎かになっているとしたら、私たちは神性を復帰することもできませんし、どんなに墮落性を脱ごうしても自分の墮落性から意識を外すことができないジレンマに陥ります。

私たちは信仰基台を造成するのが先なのです。それも外的な数字や行動のみとらわれることなく、御言に込められた心情を追体験しながら御言を実践することで、その御言を語られた心情までも体験できれば、それは私たちに大きな感化をもたらします。そして、体験するだけでは不十分なのです。その体験が習慣化され、体に体恤されたとき、その御言は神様の神性として私たちに備わるのです。

そうなれば、自然と墮落性は消えて行きます。御言を知らない、御言を実践しないという範囲にとどまる限り、私たちはアベルにはなれません。カインは御言を知りません。これが自然屈服のゆえんだと思います。実体基台は権力や財力などによって強制的に屈服させることではありません。御言によって自分が変わることによって、自然と周りが変わってくるということではないでしょうか。

どうでしょう。そのような意味で、皆様は御父母様の前にメシヤのための基台を準備できていると言えますか。原罪は取り除かれました。ですが、御言を実践しなければ御言は体恤されません。体恤できなければ神性を復帰できないのが復帰原理なのです。

【御言】

- ・「信仰基台」を復帰するためには、第一には、「中心人物」がいなければならず、第二は、「条件物」を立てなければならず、第三は、「数理的な蕩滅期間」を立てなければなりません。
- ・「実体基台」を立てるためには、「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」を立てなければなりません。
- ・したがって、墮落人間も、「メシヤのための基台」を造成するためには、「信仰基台」を立てた基台の上で、「実体基台」を立てなければなりません。

【感想】

皆様も蕩滅条件を立てられたことがある方は分かるかもしれませんが、信仰基台には必ず中心人物と条件物と蕩滅期間というものがあつたことを覚えておられると思います。条件物というのは、御言を受ける前には万物を先に立てなければならぬという理由から物としてあげられています。御言を受けた段階では御言を実践することになります。中心人物はもちろん条件を立てるあなた

です。そして、1回立てれば良いというものではなく、ある一定期間継続して立てなければなりません。例えば原理講論を訓読するという条件を立てたとします。そうすると立てる中心人物は条件を立てるあなたです。そして、1週間という期間を続けたとします。そうすると、あなたは原理講論を訓読することで本心の喜びというのを体験するようになります。良心が何を求めているのかということを知ることができた喜びを感じたとします。この恩恵ゆえに今後、条件と言われなくても自然と原理講論を読むようになるすると、これが御言が実体化したことになります。

これまで漫画や娯楽小説しか読んでいなかったあなたが原理講論という御言を読むようになり、考え方や行動にその変化が生じれば、自然と周りの人はあなたが変わったねという目で見えるようになります。そして、あなたが非原理の人を愛するようになれば、自然と墮落性は脱げるのです。そうして、実体基台が準備できると、あなたにメシヤを送っても、メシヤを守ることができる基盤が準備されていますので、神様はメシヤを送ることができるということです。これが、メシヤのために基台が準備されたということではないでしょうか。

信仰基台のポイントは一定の期間、継続しなければならないということと、御言を実践したという経験から心情を体験することが必要なことだと思います。外的に活動するばかりではなく、御言の伝えたい心情を感じ取ることができれば、あなたは間違いなく創造目的を完成する一步を踏み出すことになります。

ですから、御言と関係のない生活習慣で過ごすと難しくなるのです。せっかく復帰した心情も、逆の経路で失ってしまうということもあるのです。御言と関係のない生活を一定期間継続して実践すると、今度は讒訴条件として神様から遠くなるのです。ですので、私たちも幼いときには絶えず御言を意識して実践することを心掛けるべきなのです。そうして、信仰基台が準備できた上に、それが実体化するというのです。

【御言】

第1章 復帰基台摂理時代

第1節 アダムの家庭を中心とする復帰摂理

・アダムの家庭が「信仰基台」と「実体基台」とを復帰する蕩滅条件を立てて、それによって成される「メシヤのための基台」の上でメシヤを迎えるのでなければ、復帰摂理は成就できません。

【感想】

これからアダム家庭から様々な家庭の摂理を見て行きます。その中でのポイントは、家庭においていかに信仰基台と実体基台を立てるのかということです。

アダム家庭のことを過去の他人の家庭のことと見ては、私たちは何らの教訓も得られないでしょう。そうではなく、私たちもアダムの血統を受け継いでいるということなのですから、アダム家庭と同じ過ちを犯しやすいことを肝に銘じておくべきなのです。

これから復帰摂理を見て行きますが、その摂理の成就是信仰基台と実体基台を整えて、メシヤのための基台を準備してメシヤを迎えなければ復帰摂理は成就できません。その摂理の歴史をこれから見て行きます。

私たちはメシヤであられる真の御父母様に出会っています。ですので、すでにメシヤは迎えているので、そのようなメシヤを迎えるための基台は整っているという誤解はしないようにしてください。

私たちの救いは創造目的を成就することにあります。ただ、メシヤに出会えば良いというものではありません。信仰基台の基本は御父母様の御言を実践することにあります。実体基台の基本は御父母様の御言を体恤することにあります。

私たちが完全に救われるということは、意識しなくても自然と御父母様の御言を守り原理的に生活できるようになることです。ただ、御父母様に出会えば良いとは解釈されませんように。

ただ、アダム家庭からアブラハム家庭までメシヤを迎えるための準備がいかに大変だったのかということを、よくよく確認しておきたいと思います。

【御言】

信仰基台

- ・「信仰基台」を復帰するためには、第一に、み言の代わりの条件物がなければならず、それが供え物でした。
- ・第二に、その基台を復帰できる中心人物がいなければなりません。聖書の記録を見ると、アダムが供え物をささげたとは書かれておらず、カインとアベルのときから供え物をささげたとなっています。
- ・その理由は善悪二つの性稟の母体となったアダムの代わりに、彼の二人の子を、各々、カインは悪の表示体として、アベルは善の表示体として、分立されたのち、神様かサタンかのどちらか一方だけを各々対応することのできる立場に立ててから、供え物をささげるように仕向けられたのです。
- ・アベルが神様のみ意にかなうように供え物をささげたので、「信仰基台」がつくられました。

【感想】

アダム家庭の信仰基台において、アベルとカインは御言を受けることも実践することもできなかったのも、神様はその御言の代わりに供え物を捧げることを条件物とされたのです。

私たちも復帰された初期において、真の御父母様の御言を読んだとしても難しすぎて理解できないで、何を実践すれば良いのか見当も付かないというような時期がありました。そのような時には御言の代わりに供え物を捧げるということで、献金をしてそれを条件物として、霊界が晴れてくるといったようなことがありました。

ですから、私たちは献金するだけではいつまでも幼いままなのです。献金したとしたらそれを条件として御言をしっかりと訓読して、御言を理解し、実践する準備をしなければならないと思います。

今も経済の摂理がありますか、その摂理においては御父母様の願いを成就するという創造目的を達成するという意味合いがあります。

ですので、献金のしっぱなしや受け取りっぱなしがないことを私も祈っています。献金すれば、御言がより深く分かるようになります。なぜかという子供が条件物となるからなのです。

それからアベルは善の表示体、カインは悪の表示体と表現されていますが、では自分は教会でアベルでなければカインなので、教会の悪人なのかというと、そうではありません。

カインとはアベルに比べて神様から遠いということなのです。つまり、創造目的の達成度がアベルの方より低いので、相対的に悪と表現しているに過ぎません。

ですので、私たちが御言を聞いて、それを実践し、御父母様との距離が近くなれば、御言を知らない人の前においてはアベルになるのです。アベルとは私たちより神様に近い人のことなのです。逆にカインとは私たちより神様から遠い人のことなのです。ですので、伝道対象者は、私たちよりも御父母様との心情的な距離が遠いため、カインなのです。

ですので、日本において、いかに善なることをした人がいたとしても、御父母様を知らなければ、私たちの前にカインなのです。と同時に、私たちは、この日本において御父母様に近いという意味でアベルになるのです。

【御言】

実体基台

- ・アダムの家庭において「実体基台」がつけられるためには、カインが「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」を立てることにより、神様がその献祭を喜んで受け得るような条件を立てるべきでした。
- ・墮落人間が墮落性を脱ぐためには、墮落性をもつようになった経路と反対の経路をたどることによって、蕩滅条件を立てなければなりませんでした。

【感想】

アダム家庭の実体基台において、カインの責任分担が強調されていますが、アベルは何もしなく

て良いというわけではありません。何もしなければアダム家庭におけるアベルのようにカインに殺されはしないかもしれませんが、嫌われたり、憎まれたりすることになって、一体化することができなくなり、カインも実体基台を築けなくなることが往々にしてあります。

実体基台においてカインが墮落性を脱ぐためには、アベルも自然屈服できるようにカインを愛さなければなりません。信仰基台を通して、アベルはカインより神様の側に近い位置に立っているとすれば、その神性を発揮して、カインを神様に代わって愛すべきだったのです。

ですので、組織的にアベルとカインの位置に分けられ、カインだけが一方的に責任分担として墮落性を脱ぐようにと強調されても、無理があります。そこにはアベルとしての責任分担もあるということ忘れてはなりません。

ですので、皆様も伝道対象者を前にして、やはりアベルとしての道理を果たさなければならないのです。

カインが墮落性を脱ぐためにはどのようにしなければならないのかということは次回になると思います。ただ、カインの責任分担のみが強調されるようになると誰もがアベルになることを望み、アベルは自由に振る舞えるのである種の特権階級だと思うことは大きな間違いです。

アベルもカインも神様の前にあっては子女なのです。ただ、神様との距離が遠いか近いかの違いなのです。神様の近くにいると言うことはそれだけで使命と責任があります。それを見ることなく、ただ、自由に振る舞えることにのみ魅力を感じて、アベルになりたいというのは、ある意味、非原理的な動機とも言えます。

ですので、皆様も伝道対象者の前にあって、アベルとして伝道してあげるという責任があります。その責任を忘れてアベルとは言えないのです。

ですので、実体基台を造成するにおいてアベルは何もしなくても良いという誤解は決してしないでください。

【御言】

墮落性本性をもつようになった経緯

- ① 第一に、天使長が、神様の愛をより多く受けていたアダムを愛することができなかったことによって墮落したので、「神様と同じ立場をとれない墮落性」が生じました。
- ② 第二に、天使長がアダムを通じて神様の愛を受けようとはせず、アダムの位置を奪おうとして墮落してしまったので、「自己の位置を離れる墮落性」が生じました。
- ③ 第三に、天使長はアダムを逆に主管したので、「主管性を転倒する墮落性」が生じました。
- ④ 最後に、天使長はアダムとエバに不義の言葉を伝えたので、「罪を繁殖する墮落性」が生じました。

【感想】

ここでは私たちの墮落性が簡単に紹介されています。なぜそのような墮落性を持つようになってしまったのかということを理解できると、反対の経路で墮落性を脱ぐことができるようになるということです。

まず、第一に、神様に近い人を愛することができないという墮落性なのです。自分より多くの愛情を受けている人に対して私たちは自然と嫉妬心を抱きます。そして、愛情をより多く受けている人を自分も愛するのではなく、嫌ったり憎んだりするようになるのです。あの人さえいなければ自分はあの人の受けている愛情も自分のものできるのにと。これが、私たちの墮落性の第一なのです。ですので、嫉妬心をいかに克服するのかということも、重要なポイントなのです。

第二に、自己の位置を離れるという墮落性ですが、よく自分の位置を忘れて行動することが私たちにはあります。神様の愛を自分よりもたくさん受けている人に対して、単なる外的な比較だけで自分よりあの人は優遇されていると思い込み、その人の位置を奪おうとすることです。自分より愛情を受けている人を蹴落として、自分が後釜に座れば、その人の受けていた愛情は自分のものに

なっていることはありませんか。これが墮落性なのです。そのようなことをして墮落性を発露して得た結果には幸福とは無縁の不幸が待っているものです。

第三に、主管性の転倒がありますが、自分よりも神様に近い人だと分かっているながら、自分のものにしてしまおうという心情です。教会で婦人が神様のみに邁進し、神様の愛情をふんだんに受けるようになると、非原理の男性はその女性を自分のものにしたいと誘惑するようになります。男性も同じです。この誘惑の動機がまさに主管してくれる人を主管しようとする墮落性なのです。ですが、結果は自分で主管できないことを悟るに至り、ひどいときには得たものを捨ててしまうという悲劇も起こるのです。

最後に罪の繁殖ですが、これは日本では様々な噂話を聞いていれば明確だと思います。他人の噂をするときに他人の不幸や欠点、トラブルを話の種にするのであって、幸福な家庭や愛情のおのろけが話題になることはほとんどありません。そのような言葉が、いずれ自分の身にも降りかかることを知らず、悪霊と相対していることがどんどんと広がり、風評というもののまでも作り上げてしまうのです。また、何か悪いことをしてしまったとき、同じことを他の人に勧めて共犯者を作ろうとする衝動もこれに似ています。

このような墮落性をしっかりと直視した上で、実際にこれを蕩滅するにはどうすれば良いのかということとは次回で説明します。

皆様はいかがでしょう。自分を振り返って、思い当たる節はありませんか。

【御言】

墮落性本性を脱ぐための蕩滅条件

・墮落性を脱ぐためには、

- ① 第一に、天使長の立場にいるカインがアダムの立場にいるアベルを愛して、神様と同じ立場をとるべきでした。
- ② 第二に、カインがアベルを仲保として、神様の愛を受けるべきでした。
- ③ 第三に、カインがアベルに従順に屈伏して、彼の主管を受けるべきでした。
- ④ 最後に、カインが、アベルから善のみ言を伝え受けて、善を繁殖するべきでした。

【感想】

先日は数々の墮落性を紹介し、私たちの信仰生活における課題も見えてきたのではないのでしょうか。今日は、その墮落性を脱ぐためにはどうすれば良いのかということを紹介します。

まず第一に、神様により近いアベルを愛することができなかった墮落性を蕩滅するには、愛せないの反対ですから、愛することなのです。ですので、嫉妬心や愛の減少感を感じたとしたら、その対象を心から祝福してあげることなのです。それができると、授受作用が円滑に始まりますので、アベルの受けている恩恵が自分にも流れてくるというのです。逆に嫉妬に身を委ねると、悪霊が相対してきますので、どんどんと不幸を引き寄せてしまうというのも現実なのです。

第二に、私たちはアベルを通して神様の愛を受けるのです。私たちは御父母様を愛するために精誠を捧げますが、肉体を持たれている御父母様はすべての人類に愛情を示すことは空間的にも時間的にも不可能でしょう。それであるがゆえに、より御父母様に近いアベルが御父母様から受けた愛情を仲保として私たちに流してくれるのです。ですが、私たちは御父母様に直接愛されたいと思ってしまうものです。もちろん、御父母様との心情因縁は重要ですが、肉体をもって私たちが愛して下さるのは教会のアベルなのです。もちろん、アベルという位置に立てば、カインの精誠をよりアベルに、さらには御父母様に連結しなければなりません。それができなければ、実体基台は立てられないでしょう。カインの精誠を自分の精誠だと報告することはアベルとしての位置を失います。

第三に、私たちは従順にとありますが、普通にいうと素直にです。アベルが私たちが愛そうと懸命の努力をしてくれているのですから、その好意を素直に受け止めるべきなのではないのでしょうか。

これをアベルの命令には逆らってはならないというような解釈になるとアベルは何を持ってカインを主管しようとしているのかということが問われます。真実のアベルの主管は神様の真の愛による主管です。愛の前にはカインは頭を下げますが、力の前にはカインは屈服しないことが往々にしてあります。

第四に、アベルの神性を相続して自分のものにすることなのです。ここにアベルを真似るということが出てくるのです。ですが、気をつけないといけないのは、アベルの神性を真似ることなのです。アベルの墮落性を真似たとしたら、それは墮落性の繁殖であり、悪の繁殖に他なりません。アベルがしたから自分もするんだとよく言い訳をすることがあるとは思いますが、では、それはアベルの神性なのか。自分よりも神様に近い美徳なのかという判断があるのかというのです。アベルも完成しているわけではありません。当然、墮落性も残っているかもしれません。その墮落性に相対して噂話や行為を真似ることは決して実体基台にはなりません。むしろ、摂理を妨げる悪となりやすいのです。

このようなことを通じて、皆様がアベルの神性を相続できるようになると、皆様は今よりも神様に近くなることができます。これは創造目的を達成するゴールに近づいたということなので、摂理も進み、私たちも幸福に近づいたということではないでしょうか。

教会でアベルカインだと言われたら、何をすべきなのか。皆様の簡単な参考になれば幸いです。

【御言】

実体基台の結果

・しかるに、カインがアベルを殺害することによって、天使長が人間を墮落せしめた墮落性本性を反復するようになり、アダムの家庭の「実体基台」は立てられませんでした。

【感想】

アダム家庭ではカインがアベルを殺してしまうことによって実体基台は立てられませんでした。もちろん、殺人を犯すというのは重大な罪なのですが、それ以上に大きいのが実体基台が立てられなかったということなのです。

つまり、カインが墮落性を誘発したことが、実体基台を造成することを不可能にしてしまったということなのです。殺人を犯す前に、カインは墮落性を再現してしまったというのが問題なのです。

ですので、私たちのアベルカイン問題においても、自分はアベルを嫌ったり、アベルをおとしめるようなことはしていないので大丈夫と思っていると、意外と墮落性を誘発していることが多々あるのです。

実体基台で墮落性とはどのようなものかというのが分かれば、常にアベルに対してはそれと反対の経路を歩むのが道理なのです。

当然、教会の出会いには蕩滅がかかってきますので、愛しにくいアベルと出会うこともあるかもしれません。ですが、そのような中で御言のごとく愛して一体化してこそ、実体基台は造成されます。逆にアベルを嫌っているとしたら、それは墮落性を再現しているのと同じなのです。ヤコブの勝利はエサウと愛をもって一体となったことではなかったでしょうか。

アベルがカインを憎んだとしたらアベルは自己の位置を失うのです。なぜなら、神様の仲保者なので、神様の愛の通過体としての使命を果たせないことになるからです。

創造原理は愛の授受作用で一体化することが基本です。アベルとカインもそうあるべきなのです。では、あなたは教会の中心者と呼ばれているアベルを愛していますか。どこかで、噂話をしているようでしたら気をつけて下さい。罪が門口で待ちうけています。

【御言】

アダムの家庭を中心とする復帰摂理

・アベルがみ意にかなう献祭をささげることによって、「信仰基台」を蕩滅復帰する条件と、「実体献

祭」をささげる中心人物としてのアベルの立場が立てられました。

- ・しかし、カインがアベルを殺したので「実体献祭」に失敗し、「実体基台」をつくることができず、「メシヤのための基台」も造成することができませんでした。
- ・したがって、アダムを家庭を中心とする復帰摂理は成し遂げられませんでした。

【感想】

アダム家庭においては、アベルが信仰基台をしっかりと造成できたことが記録されています。皆様も信仰の道に来て、様々な苦労を経て、蕩滅条件として訓読や祈祷をして、精誠を捧げたとします。これで信仰基台は復帰できます。問題は信仰基台の期間の満ちた後なのです。

信仰基台を立てる上で体験した心情を心の糧として、自分より神様に遠いカインを愛さなければならぬのです。自分は信仰基台を立てたのでこれで立派な信仰者だと傲慢になると、アダム家庭のようにカインから讒訴されるようなことが起こりえるということだと思います。

皆さんも経験しませんか。いっぱい献金したから、もう自分の責任分担は果たした。私は立派な信仰者だと思っているようなことはありませんか。これがアベルの犯した過ちなのです。摂理ということで、神様の前に精誠を捧げて、様々な神様の心情を通過して、嬉しいという気持ちになったというだけでは、蕩滅条件としては不十分なのです。その土台の上に、まだ勝利していない兄弟姉妹、責任を果たすのに四苦八苦している兄弟姉妹を見たらどうするのかということです。

実体基台はそのような兄弟姉妹に関心を持ち、自分の勝利した経験を証したりして、困っている兄弟姉妹が勝利できるように一緒に努力することなのです。神様の心情を体験したのであれば、その心情を持って神様を代身して、カインを愛するのが実体基台の基本です。その愛に感化され、カインがアベルの指導の下で勝利できたとしたら、その感謝の気持ちはアベルカインの一体化につながります。

アベルとカインが兄弟愛によって一体化すれば、実体基台が造成されますので、そのような組織やグループには神様がメシヤを送られます。そのメシヤというのが御父母様とは限りません。自分たちよりもはるかに神様に近い人、御父母様に近い人を送られるということです。

他の兄弟姉妹が神様の愛情を自分よりも多く受けていると思うと、嫉妬心というのは自然と生じることかもしれません。ですが、その嫉妬心を克服するのは、アベルがカインを愛し、カインが自分も愛されていると喜べることからではと思います。

皆様も伝道対象者から讒訴されることのないように、愛情を注がれて、メシヤを迎える基盤を整えられることを祈っています。

【御言】

第2節 ノアの家庭を中心とする復帰摂理

- ・神様のみ旨は変更することができず、絶対的なものとして予定し摂理なされます。
- ・神様はアベルが忠誠を尽くした、その心情の基台の上に、その身代わりとしてセツを立てられ、その子孫からノアの家庭を選んで、新たな復帰摂理をなさったのです。
- ・ノアの家庭も、「信仰基台」と「実体基台」を復帰する蕩滅条件を立てることによって、アダムの家庭が復帰できなかった「メシヤのための基台」を蕩滅復帰しなければなりませんでした。

【感想】

まず予定論でも紹介したとおり、神様は一度予定されたことは必ず成就されます。そして、決して諦めるということはありません。ですので、アベルの身代わりとしてセツを立てられ、その子孫からノアを召命されます。

この摂理が可能になったのにはアベルの忠誠を尽くした心情の基台があったからこそなのです。これはとても大切なことで、私たちが摂理に取り組むにおいても、目標が成就できなかったとしても、その目標を達成するためにどれだけの忠誠を捧げたのかというのが、次の摂理の基台になるとい

うのです。ですので、目標が達成されなかったのですべてが無駄になるということは決してありません。

そのアベルの忠誠の基台の上にノアが立ちます。ノアもアダムの使命を継承していますので、立てるべき蕩滅条件も信仰基台と実体基台があります。

私たちもちろん、摂理の使命を継承するようになりますので、御父母様というメシヤを迎えるためにはメシヤのための基台を準備しなければなりません。そのためには信仰基台と実体基台が必要なのです。

教会の組織においては実体基台ばかりが強調され、カインの従順性が摂理には必要であるという理由から命令に服従することを強調されるかもしれません。ですが、実体基台だけではメシヤのための基台にはなりません。信仰基台を立てるのはアベルなのです。アベルが御言の実践を通じて、カイン圏を愛するときに自然とカインも屈服するのであって、ここには力づくで従わせるという世界はありません。それであるがゆえに摂理は難しいのです。

どうでしょう。皆様は忠誠を尽くした基台を残しておられるでしょうか。目標を達成したかしないのかの結果も大切ですが、同時に忠誠を尽くしたのか尽くしていないのかということは、摂理を延長する上でとても重要になります。皆様の精誠は決して無駄になることはありません。

【御言】

信仰基台

- ・「信仰基台」を復帰すべき中心人物はノアでした。
- ・ノアが「信仰基台」を復帰するための条件物は、箱舟でした。その箱舟は、アダムの墮落によってサタンの側に奪われた天宙を、蕩滅復帰するための条件として、新天宙を象徴しました。
- ・箱舟が完成されたのちに、神様は40日間の洪水審判をなさったのですが、その目的は、神様だけが対応して摂理することのできる対象を立てるために、サタンの相対となっている全人類を滅ぼすためでした。
- ・ノアの家庭は、審判40日で、箱舟を神様のみ意にかなうようにささげ、「信仰基台」を蕩滅復帰しました。

【感想】

まずノア家庭の信仰基台について説明されています。ノアの家庭においては信仰基台は箱舟を造ることでした。その信仰は大変なものがあると思います。山の頂上に舟を造るということですから。それも120年かけてです。そのような中心人物と条件物と期間が備わった上で、神様は洪水審判を行われたのです。

洪水審判の目的はサタンの相対となっている人類を滅ぼしてしまうことだったのです。ですので、洪水審判の後、サタンの相対する人間は一旦この地上からは消えてしまったのです。地上にサタンの相対できる人間がいなくなったのですから、サタンは地上を主管することができなくなりました。まさしく、持っていたものを奪われたサタンはなんとしても奪われた地上を取り戻そうとしたのでしょう。そのことが、聖書にも記録されています。

このノアの家庭においても信仰基台は無事に勝利します。復帰摂理においても真の御父母様は懸命の精誠を捧げられて数々の条件を勝利されてきたことは私たちも良く知っています。そして、御父母様は勝利されました。御父母様によって信仰基台は復帰されました。その後がどうだったのかということです。その勝利圏を相続すべき私たちにおいてノア家庭と同じ過ちが何度も繰り返されたということです。

ノア家庭の重要なポイントは勝利圏の相続にあります。教会の中心者が懸命の精誠で信仰基台を復帰したとします。次に求められるのは何でしょうか。その勝利圏を私たちはいかに相続するのかということなのです。ノア家庭の教訓は立派な中心者を迎えている教会であればあるほど深刻です。

皆様は大丈夫ですか。教会の中心者はいつも懸命に精誠を尽くして信仰基台を復帰して下さっています。それをメシヤのための基台につなげていると言えますでしょうか。教会の発展と問題点も原理を通してみればきわめてシンプルになることもあります。ぜひ、覚えておかれることをお勧めします。

【御言】

実体基台

- ・ノアの子セムとハムとが、各々カインとアベルの立場から、「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」と立て、「実体献祭」に成功すれば、「実体基台」が成就されるようになっていました。
- ・「実体献祭」をするためには、まず、「実体献祭」の中心となるべき次子ハムが、アベルの立場を、復帰しなければなりませんでした。
- ・ノアのときにはハムではなく、ノア自身が「象徴献祭」をささげたので、ハムが「象徴献祭」に成功したアベルの立場に立つためには、「象徴献祭」に成功したノアと、心情的に一体不可分の立場に立たなければなりませんでした。

【感想】

ノア家庭の実体基台はノアがアベルになるのではありませんでした。ノアの子女であるハムがアベルになるべきだったのです。ですが、箱舟を造ったのはノアです。したがって、ノアが勝利した信仰基台の勝利圏をハムが相続するということが必要になるのです。

そこで問題になるのが心情的一体化なのです。前回の内容でも紹介しましたように、立派な中心者が精誠を捧げて象徴献祭に勝利して私たちの前に来て下さったとします。その中心者の前において、私たちがその勝利圏を相続する際に、心情的一体化の確認をされるというのです。ここで、もし中心者を批判したり、中心者に不満を持って不平を言っていたりすると、そこには心情的な一体化の条件が成立していないということで、私たちは中心者の勝利圏を相続できなくなるのです。当然、私たちはアベルの位置にも立てなくなるというのです。

このようなことから日本の組織ではしきりに中心性と一体化が叫ばれるのです。一体化とはノア家庭における教訓のように心情的に一体不可分の関係を築くことを意味します。そのことを通じて、私たちは中心者の勝利圏を相続できるのです。

これは御父母様に対しても同じです。御父母様が様々な勝利を確定され、その勝利の恩恵を私たちに相続されようとする時においても、この心情的に一体不可分なのかということが問われるのです。ですので、御父母様の指示に不平や不満を抱き、御父母様を批判するようになると、この一体不可分の関係が崩れているということで、御父母様の勝利圏とは関係がなくなってしまうのです。

真のご家庭においても、御子女様が御父母様の勝利圏を引き継ぐというのは、単に血統がつながっているというだけではできないのです。このノア家庭のように心情的に一体不可分の関係を築いてこそ、御父母様を代身できるという立場なのです。

このように、中心者の勝利圏を相続するというとき、そこには必ず心情的一体化の確認がなされます。その確認においてパスした者のみが勝利圏を相続してアベルとして立つことができるのです。ですので、教会の中心者の方々は深刻だということです。どうでしょう。なぜ中心性と一体化が必要なのか、その原理的な理由がここでも紹介されていると私は思います。

【御言】

ノアとハムの心情一体の為の摂理

- ・神様はこのためにいかなる摂理をなさったのでしょうか。
- ・創世記9章20節～26節に、ハムはノアが天幕の中で裸になって寝ているのを発見し、恥ずかしく思って、彼の兄弟セムとヤペテを扇動しました。
- ・アダムとエバが、墮落したのち、下部を覆って、隠れた行動のように、ハムがその父親の裸体を

恥ずかしがった行動は、サタンが侵入できる条件が成立し、その行動は犯罪となりました。

- ・このような事情から、ハムは「実体献祭」をするためのアベルの立場を蕩滅復帰できませんでした。
- ・したがって、「実体基台」をつくることができなかったため、ノアの家庭を中心とする復帰摂理も無為に帰しました。

【感想】

ノアとハムの心情一体化を確認する摂理があったということです。それが皆様もよくご存じのノアが天幕の中で裸になって寝ている摂理です。ハムはそれを恥ずかしがったのが問題だったということです。

人間であれば誰でも裸で寝ているのを恥ずかしいと思われるかもしれません。問題はその恥ずかしがり方だったと思います。ハムは自分はそんな人間ではないと、ノアを批判して、一時の外見だけでノアをだらしのない人間だのように思ってしまったということではないでしょうか。そして、自分のわき上がったノアを批判する感情を兄弟に広めてしまい、兄弟の誰もノアとは心情的に一体的になれないように罪を繁殖してしまったことにあると思います。

これは私たちの信仰生活においても往々にして起こりえることなのです。中心者が裸になっているというのは、中心者がこの世的な常識からすると何か変なことをしている、または墮落性を誘発しているようなことをしていると見えたとしても、それを批判し讒訴して、その批判の心を噂として兄弟姉妹に広めてしまうというようなことはありませんか。そのような兄弟姉妹を眺めながら真のお父様は「信じて滅びよ」ということを指導されたこともあるといえます。

これはノア家庭の失敗を本当に私たちが理解しているのかということなのです。裸を恥ずかしいと思うのは自然なことではないか。ちょっとこの意味が分かりにくいというのであれば、話を中心者の欠点を見つけたときにたとえれば理解しやすいのではないかと思います。

個性的に少し変わった中心者がいても、中心者は見えない所で御父母様の前に精誠条件を捧げ、信仰基台を復帰しているケースがほとんどです。そのような摂理的な内容を見ることなく、この世的な価値観で中心者を批判し、一体化していないとサタンの前に提示すれば、それを条件にサタンが侵入するというのです。

私たちは人間というものを自分なりの価値観で見えてしまい易いものです。ややもすると自分を投影することが多々あります。それは人間を正しく見ていないということにもつながるのです。人間をあるがままに見つめるということはとても大切なことだと思います。ノアにおいては天に対する精誠をハムは見てきたのです。隠れていたのではありません。それでも批判したのですから、私たちはもっと気をつける必要があります。

批判をするのは簡単なことかも知れません。それは自分はやりません、自分はできませんと自分を言い訳するには必要になるかも知れません。ですが、それでは責任分担は果たせません。摂理のポイントは中心者を信頼し、心情的に一体化することにあります。そのことをノア家庭の教訓は教えていると思います。

【御言】

第3節 アブラハムの家庭を中心とする復帰摂理

- ・神様の創造目的を完成なさろうとするみ旨は絶対的なものなので、ノアの代わりにアブラハムを召命なされました。

- ・アブラハムも、メシヤを迎えるためには、「信仰基台」と「実体基台」を造成した基台の上で、「メシヤのための基台」を復帰しなければなりません。

- ・アブラハムは、ノアの身代わりであり、アダムの子代わりであるので、復帰したアダム型の人物でありました。

【感想】

神様の予定が絶対的なのは予定論でも紹介したとおりです。神様は何としてもメシヤのための基台を準備させようと、ノアの次にアブラハムを召命されます。ですので、使命の面から見て、アブラハムはノアの身代わりであると同時にアダムの子孫の身代わりでもあるのです。

これは皆様にも当てはまると思います。皆様もメシヤと出会うために先祖からの使命を継承してきているということです。その意味で、皆様も10代前の先祖の身代わりであり、20代前の先祖の身代わりでもあると思います。そのようなバトンを受け継いで私たちは御父母様と同じ時代に誕生し、御父母様と直接出会っているということです。

私たちもメシヤを迎えるためにはメシヤのための基台を準備しなければなりません。そのような意味で、私たちは日々、御父母様の御言を実践するために精誠を捧げているのであり、その信仰基台の上にカイン圏を愛するためにも伝道を進めているということなのです。ですので、御言を聞いて、自分が救われただけではメシヤのための基台としては不十分なのです。カイン圏を抱えて、実体基台を準備しなければ、メシヤを迎えることはできないということです。

皆様はいかがでしょう。信仰基台と実体基台の区別はついておられますか。ただ、盲目的に中心者の指示に従うという時代ではないと思います。原理は棚に上げておく理論ではありません。しっかりと問題を解決できる解決案を提示してくれる真理なのです。

御父母様の御言を実践するためには御父母様の御言を知らなければなりません。そのための訓読会ではないでしょうか。ですから、訓読会で御言を読むだけでは初歩なのです。次には、その理解した御言を実践して、体恤するという路程が待っています。皆様の先祖の期待を背負って生まれた先祖の生まれ変わりなのです。

【御言】

アブラハムの象徴献祭

- ・神様は、アブラハムに鳩と羊と雌牛(三つの供え物)とを供え物としてささげるように命じられました。
- ・この三つの象徴的な供え物は、三段階の成長過程を通じて完成する宇宙を象徴するのです。
- ・すなわち、鳩は蘇生を、羊は長成を、雌牛は完成を象徴しました。
- ・これらを、一つの祭壇に載せて献祭したのは、アダムの立場であるアブラハムを中心として蘇生のアダム、長成のノア、完成のアブラハムというように、み旨から見て三代にわたって蕩滅復帰しようとした縦的な摂理を、一時に、横的に完成するためでした。

【感想】

アブラハムの時においても神様の御言を直接受けることができませんでしたので、神様は供え物を捧げるように指示されます。ノアの時もそうでしたが、供え物を捧げるときには、その供え物が宇宙を象徴するというのです。宇宙とは、この有形世界の宇宙だけではなく、霊界を含めた被造世界全体を指します。ですので、献金するにおいても、それは単なるお金ではないのです。蕩滅条件の供え物をして捧げるお金は宇宙を象徴しているということを、覚えておきたいと思います。

そして、ここでもう一つのポイントとして、御旨から見て三代にわたって蕩滅復帰しようとした縦的な摂理を横的に蕩滅復帰するということです。私たちのご先祖様たちはさまざまな罪を犯し、その罪を贖罪するためには、犯した先祖一人一人が償いとして蕩滅をしなければならぬのが普通です。ですが、それを私たち一代で横的に蕩滅することになるために、通常では考えられない苦難の連続ということも起こりえるのです。

この道に来なければ蕩滅とは関係のない生活をするようになりますので、比較すると苦痛の少ない生活になるかもしれません。ですが、蕩滅がされないということは、先祖の罪も自分の犯した罪も償うことができませんので、霊界に行った後に本当に苦しみの方が待っているということです。

今の時代は幸いにして清平摂理がありますので、私たちの一代で多くの代のご先祖様を救って

あげられる立場に私たちは立っています。これも横的な蕩滅の復帰の例でもあります。

ですので、教会の摂理においても、一時に横的に蕩滅することが多々ありますので、摂理となると本当に大変な苦勞をすることがありますが、そこで摂理が勝利するということは、何十代にもわたって蕩滅すべき膨大な量の罪というものが一気に清算されることもあると思います。

御旨を歩む人生において横的に一気に蕩滅するために普通の人生よりは苦勞が多いかも知れませんが、この蕩滅をした人生をもって霊界に行けば、私たちは先祖の皆様にとどれだけ感謝されるか分からないということです。皆様も多くのことを短い期間で成し遂げていると覚えておかれると良いと思います。

【御言】

アブラハムの象徴献祭とその結果

- ・アブラハムは、鳩だけは、裂かずにそのまま置いたので、荒い鳥がその死体の上に降り、アブラハムは、これを追い払ったと記されています。
- ・その供え物は、善悪が分立されなかったので、サタンの所有物であることを、再び、確認してやったと同様の結果をもたらしてしまったのです。
- ・このような象徴献祭の失敗によって、蕩滅復帰しようとしたすべてのものは失敗してしまいました。
- ・その結果、アブラハムの子孫が、エジプトで、400年間苦役するようになり、アブラハムを中心とする摂理は、イサクからヤコブまで、三代にわたって延長されました。
- ・「象徴献祭」に失敗したのち、再び神様はアブラハムにイサクを燔祭としてささげよと命令されました。

【感想】

神様の願われた象徴献祭は、鳩、羊、雌牛をすべて裂いて供えることでした。なぜかという、献祭を裂くことで、しっかりと善悪を分立できるからなのです。ですが、アブラハムは大きい燔祭は裂くことができたのですが、鳩を裂くことはできませんでした。鳩は蘇生期を象徴します。つまり、最初の段階を失敗してしまったので、すべての献祭が失敗に終わってしまったということです。

この教訓は私たちにも生きてくることだと思います。誰かから頼まれごとをしたときに、大きな仕事は全力で取り組めるかも知れませんが、一見簡単に思える小さな仕事に全力を投入することは難しいものです。ですが、神様の摂理を見れば、予定論でも明らかなように人間の責任分担は100%を投入しなければ成就できないようになっています。私たちに任される摂理において、一見簡単に思えるものほど、難しいことが往々にしてあるのです。

ですので、小さなことに精誠を捧げる人に神様は大きなことを任せるようになるという理由も、このアブラハムの教訓があるからなのです。

世界摂理で100万円を献金しなければならないとなるとやはり皆様も深刻になって、何とか工面しようと必死になると思います。ですが、礼拝における100円の感謝献金はいかがでしょう。必死になって100円を捧げたという受け取る方がバカにされたような気持ちになりやすいというのです。ですが、生活費がもう底をついて、お昼ご飯を抜いてやっと工面した100円だったとしたらどうでしょう。その価値は違ってきます。この100円には必死なる精誠が込められていると言えませんか。

ですから、礼拝における感謝献金の100円に精誠を込めて捧げるというのが、難しいというのがこのアブラハム家庭の教訓なのです。そして、100円だからたいしたことないと、捧げるのを忘れたとすると、それはとんでもない失敗となってしまうのです。

皆様はいかがですか。摂理は簡単な方が良く、楽な方が良く思っているようなことはありませんか。ですが、難しさは、簡単な方、楽な方がはるかに難しいのです。その簡単なことに精誠を込めるといのは簡単なことではないのです。

ですから、全力を投入しないと達成できないような摂理を与えられることはある意味、守られてい

ると私は思います。皆様はいかがでしょう。予定論で示されているように摂理に全力を投入していますか。片手間にしようと思ってしまうと、アブラハムと同じ過ちを犯してしまうということをここでは警告していると思います。

【御言】

神様がアブラハムを再び立てられた理由

アブラハム、イサクの二代にわたる摂理

・どうして神様は、アブラハムを再び立てることができたのでしょうか。

① 第一に、アブラハムの家庭を中心とした摂理が第三次であり、三数は完成数なので、アブラハムのときは、この摂理を完成すべき原理的な条件がありました。

② 第二には、サタンは、アダムとその子カインに侵入して、二代にわたって彼らを奪っていったので、蕩滅復帰原則により、天の側でも、アブラハムとその子の二代にわたって、取り返してくる摂理をすることができました。

③ 第三に、アブラハムは失敗したけれども、アベルやノアが、「象徴献祭」に成功した歴史的な心情の基台を条件として、もう一度献祭をせしめることができました。

【感想】

なぜ、神様はアブラハムの失敗に対して、イサクに摂理を継承することができたのかという理由が簡単に紹介されています。

まず、神様の摂理が三段階で完成するようになっているという原理的な根拠があるということです。教会の摂理、特に御父母様の指示される摂理は間違いなく三段階で完成するようになっています。そして、アダム、イエス様、再臨主としての御父母様で摂理は完結するようになっています。なら、安心して自分は見物していようなどとは思わないで下さい。予定論にあるように私たちの精誠がなければ摂理は成就されないのです。そのことを知らされ、摂理に精誠を捧げる民が登場しているので、その民を中心民族として摂理は今の時代に完結されるということです。

次に、サタンがアダムとカインという二代にわたって侵入したので、神様もアブラハムとイサクという二代にわたってサタンから取り返すことができたということです。このような神様とサタンとの駆け引きが摂理では往々にしてあるということです。そのような摂理を知らない人間は、現実の出来事に右往左往するのですが、中間位置にいる私たちは背後で神様側とサタン側、善霊と悪霊が条件をもって奪い合いをしていることを忘れてはならないと思います。

そして、三つ目にアベルやノアが象徴献祭に込めた精誠の心情的な基台があったということです。私たちが摂理に同参するにおいても精誠を捧げることは決して無駄にはならないということです。摂理が完遂されなかったとしても、私たちの精誠が基台となって、摂理を継承することができるようになっているということなのです。

かくして、アブラハムの摂理は再度、イサクを献祭するという摂理になります。鳩を裂かなかったことがイサクを献祭するというとてつもない大きな条件になって再びやってきたのですが、それができたのもこのような背景があったということです。皆様はいかがですか。

【御言】

アブラハムのイサク献祭

・アブラハムは絶対的な信仰で、神様のみ言に従い、イサクを殺そうとしました。

・そのとき、神様は殺すなと命令されて「あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」(創世記 22:12)と言われました。

【感想】

アブラハムは神様の啓示に従いイサクを殺そうとします。この世的に見れば親子間の殺人未遂

事件です。教会において同じような真似をする人はいないでしょう。では、この勝利は私たちとは関係がないのかというとそうではないのです。

イサクはアブラハム夫妻の愛するとても可愛がっていた子供です。決してイサクが憎いなどという感情はなかったと思います。そのような愛するものを神様のために犠牲にできるのかというのは、予定論でもあったように、自分のすべてを投入したのか、自分のすべてを捧げて、人間の責任分担としての100%を全うしたのかということが問われていると思います。

ですので、日頃から教会の摂理に精誠を捧げ、自分の100%の精誠を捧げている人にはイサク献祭のような試練は訪れないと思います。ですが、鳩を裂くことができず、日頃の信仰生活において自分の100%を捧げ切れていない人には、自分のすべてを捧げられるのかということを試されるということです。

それが愛するものを犠牲にできるのかということなのです。ここで気をつけないといけないのは、自分は愛するものを犠牲にしたのだから、兄弟姉妹も愛するものを犠牲にすべきだと、他の兄弟姉妹に強要することです。これは日本の文化ではよく見られることなのですが、これは蕩滅が見えていません。常日頃、精誠を捧げている兄弟姉妹においてはイサク献祭のような試練は訪れません。それなのに、なぜ自分だけしかそんな試練を受けるのかと、愛の減少感を感じて、自分の味わった苦痛と同じ苦痛を味わうようにさせたいという感情がわいてきたら、それは罪が門口で待っていると思って間違いありません。

蕩滅条件は摂理です。ですので、当然予定論が適用され、人間の責任分担として100%の投入が求められます。アブラハムはイサクを献祭するにおいて初めて自らのすべてを捧げる心情で捧げることができたということです。皆様はいかがですか。日頃の信仰生活において自分の100%を捧げていると言えますでしょうか。それができていないにも関わらずイサク献祭のような苦悩を経験しないということは、皆様は守られているのです。そのような守りの必要のない信仰者は、日頃から精誠を尽くすことを自然にしているものです。皆様はいかがですか。

【御言】

イサク献祭の結果

- ・神様のみ旨に対するアブラハムの心情や、その絶対的な信仰と従順と忠節からなる行動は、彼をしてイサクを殺した立場に立たしめたので、イサクからサタンを分離させることができました。
- ・アブラハムがイサク献祭に成功することによって、アブラハムの家庭を中心とする復帰摂理は、イサクを通じて成し遂げていくようになりました。
- ・このように、イサクは、アブラハムの使命を受け継いで、「象徴献祭」に成功して、「信仰基台」を復帰しました。

【感想】

原理でも学ぶようにアブラハム家庭におけるイサク献祭は無事に勝利に終わります。これによって、イサクはアブラハムと完全に心情的に一体化して、さらにサタンを分立することができたのです。

このように、中心との心情一体化がサタンを分立する条件となることは教会でも良く現れる摂理です。ここで間違えてはならないのは、中心の指示に盲目的に従うことが一体化であるということではありません。心情的な一体化においては、中心が何を考え、どのような心情で指示を出しているのかということまでも分かった上で従うべきなのです。

ですが、摂理歴史を見るとときに、御父母様に従う私たちが、本当にこの御父母様との一体化の条件で崩れることが多く、真のご家庭に蕩滅が行ってしまうということが何度もあったのです。

今の時代においても真のお母様が真のお父様と心情的に一体化されており、それであるがゆえに使命を継承されているということも明確だと思います。

イサクはアブラハムの使命を継承して、象徴献祭に成功しています。そして、信仰基台を復帰して、いよいよ実体基台の復帰になります。

皆様はいかがでしょう。御父母様の前にあつて、イサクのような心情を復帰されておられるでしょうか。ややもすると自分の事情を優先して、御父母様の意向が二の次になることはありませんか。

批判すると言うことは、自分と批判の相手とは異なることをサタンの前に提示していることに他なりません。つまり、心情の一体化の摂理が崩れているがゆえに、批判する対象の勝利圏を相続することはできないということなのです。それであるがゆえに、摂理においては批判する人がリーダーになることはほとんどありません。

皆様が真の御父母様と心情的に一体化となられた孝子孝女になられることを祈っています。

【御言】

実体基台

ヤコブがアベルの立場を蕩滅復帰するための摂理

・「実体献祭」をするためには、イサクの二人の子エサウとヤコブのうち、まずヤコブがアベルの立場を蕩滅復帰する条件を立てなければなりません。

① 第一に、ヤコブは長子の嗣業を個人的に復帰する争いで、パンとレンズ豆のあつものを与えて、エサウから長子の嗣業を奪いました。

② 第二に、サタン世界であるハランに行って、21年間苦勞しながら、家庭と財物とを中心に、長子の嗣業を復帰しました。

③ 第三に、ヤコブは、ヤボクの河で、天使との組み打ちに勝利して、実体で天使に対する主管性を復帰しました。このようにして、ヤコブはアベルの立場を蕩滅復帰したのです。

【感想】

ヤコブは生まれながらにしてアベルに生まれていたのではありませんでした。母リベカの母子協助の下、様々な教育を受けながら、アベルとしての位置を復帰したのです。

教会における中心者の方々も、何の苦勞の土台もなく中心者になっているわけではありません。このヤコブの路程で示されるように様々な苦勞を経て中心者になられているということです。

そのアベルとしての素養のポイントがここで3つ紹介されています。

第1にカイン圏よりも天のものはるかに大切に扱うということなのです。カインが天の嗣業を軽んじたということは、アベルがカイン以上に天の嗣業を貴重視していたことに他なりません。ですので、私たちの伝道対象者の前において、天の伝統や文化をより貴重視するという姿勢もが求められるし、それがあつてこそアベルの位置を復帰できるということです。

次に、サタン世界で人材と万物を復帰してきたということなのです。これはとりもなおさず伝道と万物復帰を意味します。皆様も摂理を進めるにおいて簡単ではないと感じておられると思います。アベルという方も、サタン世界の荒波の中で伝道と経済を勝利してきた背景があるのです。

そして最後に重要なのが、霊界の主管力なのです。ヤコブは天使との組み打ちで懸命に闘って勝利しました。その結果、天使に対する主管力を復帰します。これは同時に霊界に対する主管力を復帰したことでもあるのです。私たちも、ただ、苦勞を実践するだけの活動家になってはいけません。祈祷生活や御父母様の御言の訓読を通じて、霊界に対する感性と真理をしっかりと体恤し、霊界を主管できなければならないのです。

死後の世界の扱い方や祈祷の実践などを通じて、私たちはいかに霊界を知り、霊界の協力を得ているのかということが問われると思います。

このように、アベルの立場を復帰するためには、何もしなくてもなれるというものではなく、様々な苦勞の上に勝利してきたという勝利圏が必要なのです。

カインの立場に立つ人間はそのようなアベルの勝利圏を見ることなく自分の価値観でアベルを見て批判することが往々にしてありました。ですが、それは人間を知らないのと同じなのです。それは伝道をして初めて分かることでもあると思います。

皆様も対象者の前にはアベルです。ですので、アベルとして、ヤコブのように苦勞を勝利される

ことを私も祈りたいと思います。

【御言】

実体基台の造成

- ・イサクの家庭で、彼の子エサウとヤコブとを、カインとアベルの立場に分立して、「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」を立てて、「実体基台」を完成しなければなりませんでした。
- ・ヤコブは、天使との組み打ちに勝利して、天使に対する主管性を復帰することによって、イスラエルという選民形成の基盤をつくりました。
- ・エサウはヤコブがハランからカナンへ帰ってきたとき、彼を愛し、歓迎したので、彼らは「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」を立てることができ、それによって、
- ・アダムの家から「実体基台」を蕩滅復帰するために続いてきた縦的な歴史路程を、イサクの家庭で初めて、横的に蕩滅復帰するようになりました。

【感想】

エサウとヤコブの間で実体基台が無事に造成され、これでイサク家庭においてメシヤのための基台が整うこととなります。この勝利をもって、神様の基台は拡大して行くこととなります。

まず霊的な勝利は前回も紹介しましたが、ヤコブが天使と組み打ちをして、それに勝利してイスラエルという名をもらったことです。ヤコブはこれを通じて、天使をも主管する勝利圏を確定したことになるのです。そうすると、エサウに会う前にヤコブはエサウの背後に相對している悪霊を分立することができたのではということも考えられると思います。

ですので、悪霊との相對基準を断たれていたのが、エサウは素直にヤコブの注ぐ愛情に心を変えることができたのではないのでしょうか。

そのような意味において、私たちの道においても、清平を通じて悪霊を整理しておくことは、実体の人間と對する前の手続きとしてとても重要なことになると思います。

そのような手続きを経てから、ヤコブは万物を先に捧げ、次に家族がヤコブに敵意がないことを伝えさせ、最後に実体として会うこととなります。この路程は、よく和解などにおいても取られる手順になります。示談金は万物に相当し、本人が言い合う前に弁護士が中に入り、最後に本人同士で謝罪し合って和解するというパターンもこのヤコブ路程を踏んでいるということでもあります。

かくして、アブラハム家庭の勝利が確定され、神様の摂理は大きく進むこととなります。ここではエサウがヤコブを愛して歓迎したと簡単に書かれていますが、アダム家庭における実体基台を全部成したということなのです。

皆様は伝道対象者から愛され、歓迎されていますでしょうか。そのようになるための愛の実践が今も私たちに必要な伝道なのではないのでしょうか。

【御言】

メシヤのための基台

- ・イサクの家庭を中心として、初めて「メシヤのための基台」(家庭的基台)が造成されましたが、
- ・既に、墮落人間たちがサタンを中心とする民族を形成していたので、そのときにメシヤが降臨なさるわけにはいきませんでした。
- ・ゆえに、ヤコブの家庭は、ヨセフを中心としてエジプトにはいり、400年間の蕩滅路程を歩むことによって、民族的な基台を造成しようとしていました。

【感想】

イサクの家庭においてメシヤのための基台が準備されました。ですが、その基台というのは家庭的な基台だったので、神様はメシヤを送ることができなかったというのです。なぜなら、いくら家庭で迎えることができて、サタン世界が民族を形成していたので、家庭にメシヤが降臨しても、民族

によって滅ぼされてしまうからなのです。そのような理由によって、神様はメシヤのための基台が民族的に拡大するまで待たれることになります。

ここに数の基盤の重要性が説明されています。私たちは日々伝道をしていますけど、これはもちろん、家庭を救済し、国家復興の摂理でもありますけど、それに加えて、御父母様をこの国にお迎えするための数的な基台が必要になっているということなのです。しっかりと、数的な基盤、カイン圏を愛して、カイン圏から愛される基盤を準備しておかなければ、真の御父母様が来日された際に、危害を加えられる危険性もあるということです。

その意味において、真の御父母様が共産圏に入ることは、今の段階では難しいということです。ですが、民主主義圏においては、信教の自由が保障されているために、宗教や宗派を理由に殺されると言うようなことはなくなりました。かつては民主主義圏においても迫害の歴史を刻んだ摂理歴史ではありましたが、今の時代は御父母様を歓迎する基台が準備できたので、メシヤを迎えることができるようになったという経緯もあるのです。

これもすべては数の基盤なのです。ですので、日本においても、この数の基盤を確保することが御父母様を国家的にお迎えすることのできる条件になるために、伝道を進める一つの理由にもなっていると思います。そのような意味において、私たちが対象者を伝道することは、対象者の救いのみならず、日本という国家の救済にもつながっているということを忘れてはならないのです。

ですので、日本という国家においても民族的な基台を用意するためには、数万ではやはり不足ではないでしょうか。それであるがゆえに、神氏族的メシヤの勝利はそのまま国家復帰の摂理にも関連しているといえるのです。

ここでも紹介されているとおり、自分の家庭だけがメシヤを迎えるというのは、ある意味、家庭的な自己中心的な考えかも知れません。そうではなく、家庭を超えて、氏族、民族、国家レベルで御父母様を迎えられるまで、御父母様は日本を訪問するのも難しいという原理的な理由があります。皆様の伝道の責任分担はその大きな全体摂理の一端を担っているということ覚えておくべきだと思います。

【御言】

ヤコブがサタンを屈伏する典型路程

- ・ヤコブがサタンを屈伏する典型路程の成功は、すなわち、イサクの成功であり、アブラハムの成功なので、アブラハムを中心とした復帰摂理は、イサクとヤコブに延長されましたが、み旨を中心として見れば、延長されずに、一代で完成されたのと等しい結果となりました。
- ・アブラハムとイサクとヤコブとは、個体は異なりますが、み旨から見れば、みな一体であったのです。
- ・彼らは三代でありながらも、み旨から見れば、一つの目的を共同して完成した祖先たちであるので、一代と等しいともいえるのです。
- ・ヤコブはイスラエルという名前を受け、選民形成の基盤をつくり、「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」を立てたので、サタンを屈伏させる典型路程において成功したのです。
- ・この路程を、モーセも、イエス様も、イスラエル民族も、行かなければなりませんでした。

【感想】

ヤコブはサタンを自然屈服し、典型路程を勝利します。この勝利は、イサクの勝利でもあり、アブラハムの勝利でもあるということです。摂理的に見ればアブラハム一代で完成されたのと同じ意味があるということです。

これは、今の摂理においても同じことが言えます。真のお父様は聖和され、すべてを成したと語られて霊界に行かれましたが、地上における天一国は創建されておらず、その摂理は真のお母様に継承されています。真のお母様が摂理を継承できた背景には真のお父様との心情一体化の基台があったというのは言うまでもありません。ですので、真のお母様が地上で天一国を創建され、

勝利されることはまさに真のお父様が勝利されたのと同じ意味があるというのも、この原理から理解できると思います。

このようなヤコブの典型路程を真の御父母様は歩まれ、そして、真の御父母様に従う私たちも歩まなければならない道なのです。ですので、何も分からずに闇雲にサタンを屈服させるということではないのです。ヤコブの典型路程を私たちはなぞるだけで良いのです。

ヤコブのようにカイン圏を愛して屈服することができれば、私たちもメシヤを家庭に、氏族に迎えることができるようになるということです。

ですので、ヤコブ路程は本当に私たちは熟知しておくべきなのです。サタンを屈服させる方法というのが神様によって示されているということです。基本的にはサタンの怨みは愛されなかった怨みなので、その怨みを解くには愛するほかはありません。その道において、どのように愛すれば良いのかということがヤコブ路程では示されています。

皆様は対象者に向かうとき、ヤコブ路程を意識されていますか。この世的に横的な関係を結ぶことで摂理が進むと思われるかもしれませんが、その勝利の秘訣は既に原理で語られているのです。どうでしょう。皆様は活用されていますか。

【御言】

第2章 モーセとイエス様を中心とする復帰摂理

- ・アモス書3章7節に、「主なる神は、そのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」と記録されているみ言のように、聖書には、神様の救いの摂理に関する数多くの秘密が隠されています。
- ・しかし、人間は神様の摂理に対する原理を知らなかったのも、その隠れた意味を悟ることができなかったのです。
- ・神様は、ヤコブとモーセを立てて復帰摂理路程を歩ませ、将来イエス様が来られて、人類救済のために歩まねばならない摂理路程を、表示してくださったのです。

【感想】

聖書には神様が私たち人類に授けて下さった言葉が記されています。ですが、そこで語られている内容を人類は悟り得ることができず、また聖書を誤解することで、様々な悲劇も展開されたのがこれまでの歴史なのです。

そのような人類の悟り得なかった原理を真の御父母様は解明され、その真理を私たちが理解できるように説明して下さいました。

そして、とても重要なことは、御父母様は聖書に記されている原理どおりの人生を歩まれ、摂理を勝利されたということなのです。

ですので、御父母様の生涯を事実のみを追いかけると背後に流れている神様の摂理が見えないことがあるのです。御父母様の歩まれた人生とイエス様の路程、モーセの路程、ヤコブの路程を重ね合わせることで、御父母様がいかに神様に摂理を成就されたのかという方法論が明確になるのです。

ですので、私たちも御父母様に倣うと言うことは、御父母様の歩まれた原理的な歩みを相続することであって、外見的な風貌や言動だけを真似るのでは意味がないのです。

御父母様を神様の視点で理解するためには、ここでも示されているようにイエス様の路程を理解する必要もあります。イエス様の路程はヤコブの路程とモーセの路程を理解しながら見ないと分からない世界がいっぱいあるということです。

その歴史の前後的な関係性を既成のキリスト教会は悟り得ていないということではないかと思えます。これからモーセの路程を見ていきますけど、これはメシヤの歩むべき路程を神様が示されたのであって、私たちの歩むべき路程でもあるということです。

ですので、人物は違っても、象徴的にモーセの心情を経験することが信仰生活においては良く

あることを覚えておかれると良いのではと思います。

【御言】

第1節 サタン屈伏の典型的路程

- ・イサクの家庭において、ヤコブが、サタンを屈伏してきた全路程は、ヤコブによるその象徴路程を、形象的に歩まなければならないモーセ路程と、それを実体的に歩まなければならないイエス路程に対する典型路程でした。
- ・そして、この路程は、イスラエル民族と全人類が、サタンを屈伏させながら歩まなければならない、表示路程でもあります。

【感想】

ヤコブの路程がサタンを屈服した典型路程なので、モーセもイエス様もそれに従って人生を歩まれます。そして、これは聖書の人物だけではなく、氏族メシヤと呼ばれている私たちも歩むべき典型路程なのです。

皆様は伝道対象者を前にして、どのように伝道すれば良いのかと様々に中心者に相談されると思います。そのような中で、原理的な伝道という方法があり、それが私たちもヤコブの典型路程を歩むことなのです。

ですので、私たちは、様々な苦役を通じて万物を復帰し、家族を得て、氏族に向かうとき、ヤコブがエサウに対したように対すべきというのが原理的な歩みになるのです。

簡単なポイントを抑えると、まず天使に対する主管性を復帰したように、霊的な手続きをしっかりと踏んで、背後の霊界を主管するようにしないといけません。その上で、万物を捧げつつ、家族と一緒に、氏族を賛美しねざらいながら対するというのがヤコブとしての道理なのではと思います。

このことを文化的に知らず知らず行っているのが、氏族を訪問する際にお土産を持参することではないかと思います。万物を持ち、配偶者と子女を連れて、氏族を訪問するとき、よほどのことがない限り、拒絶されることはないでしょう。

もちろん、教会に反対している氏族もいますので、その際には、まず霊的に背後の悪霊を整理して、自分よりも前に万物を先に立てるというのも基本だと思います。ですので、氏族圏に良く与えるから氏族圏から多くの万物が復帰できるのであって、何も与えずにお金を借りるだけというのであれば、カイン圏は屈服するどころか讒訴してくるというのです。

ですから、氏族を伝道する際においては、日頃から良く祈り、何かにつけてプレゼントをすることを心掛けるのがヤコブ路程にかなっていると私は思います。

伝道対象者は私たちより神様から遠いのです。ですので、伝道対象者は私たちから愛されるのを待っているというのです。それなのに氏族に対して愛されることを求めて出かけると、とんでもないことになるというのです。

どうでしょう。このように原理は伝道の方法論をも提示しているのです。皆様はヤコブ路程を参照して歩まれていますか。メシヤであれば、その歩むべき道は必然的に御言で語られているのです。皆様にはその道が見えておられますか。

【御言】

イエス様の典型路程としてヤコブ路程とモーセ路程とを立てられた理由

- ・復帰摂理の目的は、究極的には人間自身がその責任分担として、サタンを自然屈伏させ、主管し得るようになることによって成就されます。
- ・イエス様が、人間祖先として、メシヤの使命を負うて来られたのも、サタン屈伏の路程を開拓し、すべての信徒たちをその路程に従わせることによって、サタンを自然屈伏させるためです。
- ・ところが、神様にも屈伏しなかったサタンが、イエス様に屈伏する理由はさらにないので、神様はヤコブとモーセをたてて、サタンを屈伏させる表示路程を見せてくださったのです。

【感想】

復帰摂理の目的が私たち人間がサタンを自然屈服させることにあるということが簡単に結論として説明されています。真の御父母様はサタンを自然屈服されて本然の天使長の位置に戻されたことも皆様は伺っていると思います。その意味において、復帰摂理の目的は成就されたのです。

ですが、まだまだ悪霊人が大勢残っていますので、その悪霊人を自然屈服させる路程も御父母様がサタンを屈服させられた路程に倣うのが道理なのです。

ここでも説明されている通り、サタンは神様にも屈服したかったので、単に自分がメシヤだからだという理由だけで、サタンが屈服することは毛頭ないということも説明されています。

ですので、カイン圏が自然屈服するように、私たちも御父母様の路程を相続して、歩むべきだというのが、私たちの信仰生活になっていると思います。

御父母様の路程を原理的に理解するためには、イエス様の路程をしっかりと理解する必要があり、イエス様の路程を理解するにはモーセとヤコブの路程を理解せずしては難しいということです。

ですので、復帰原理をしっかりと理解できるようになると、どのように伝道すれば良いのかということも自然と見えてくるのです。カイン圏を前にヤコブのように、モーセのように、イエス様のように、御父母様のように歩めば良いということなのです。

ですので、いきなり氏族圏を訪ねて行って、自分は氏族のメシヤだから私に従いなさいと説明しても、カイン圏が従う理由はないということです。ヤコブがエサウに対したように、祈祷や清平摂理などで霊界を整理して、霊界の主管性を復帰し、その上で、お土産などの万物を携えて、家族を連れて、ご無沙汰のなかったことをお詫びして、相手に関心があって、愛そうと努力していることを示しながら、交流を始めるというプロセスを踏むのが原理的なのではと私は思います。私たちは、カイン圏と交流するにおいては、ヤコブ路程をしっかりと押さえておくべきであり、その土台の上でモーセやイエス様の路程に発展できていると思っています。

どうでしょう。皆様は何の準備もすることなく、カイン圏に対しているようなことはありませんか。原理はどうすればカイン圏が自然屈服するのかということまで示してくれているのです。

【御言】

第2節 モーセを中心とする復帰摂理

モーセを中心とする復帰摂理の概観

・モーセを中心とする復帰摂理は、アブラハムを中心とする復帰摂理において既に立てられた「メシヤのための基台」の上で達成されなければなりません、「信仰基台」と「実体基台」とを蕩滅復帰して、「メシヤのための基台」をつくらなければならないという原則は、異なることはありませんでした。

・なぜなら、その摂理を担当する中人物が代わったならば、その人物自身もそれと同じ責任分担を完遂しなければ、み旨を継承することができないからであり、またその摂理の範囲が、家庭的な範囲から民族的な範囲へと拡大されたためでした。

【感想】

モーセ路程におけるポイントはカイン圏がエサウのように個人や家庭ではないということなのです。そのカイン圏の版図が民族に拡大しているという点において、氏族圏からさらに拡大していると言えます。それであるがゆえに、教会の運営において、モーセ路程が非常に参考になることがあるのです。

モーセ路程においても、信仰基台と実体基台を準備してメシヤのための基台を準備しなければなりません。それであるがゆえに、モーセは信仰基台を復帰してアベルの位置を確立します。

教会においても教会長を初めとする中心者がアベルの位置を確立するために、様々な精誠を

捧げられながら信仰基台を復帰されています。その姿を教会の一般の食口は見ることがないので、中心者の見えない精誠を見過ごすことがあるのです。そして、中心者が御父母様に愛情を注がれている姿にカインのように愛の減少感を感じることもあるというのです。

このように摂理を担当する中心人物は信仰基台と実体基台を復帰しなければ御旨を継承することができないということもここでは語られており、それは私たちが氏族に対する時も同じです。

ですので、御父母様の御言を実践しなければ、アベルの位置に立つこともできないし、伝道が進むはずもないのです。それであるが故に、伝道しなさいと言うことは、真の御父母様の御言をしっかりと実践して体恤しなさいと言っているのと同じことだと私には思えます。

【御言】

信仰基台

- ・アブラハムの子孫たちのエジプト苦役 400 年期間が終わってのち、「信仰基台」を復帰する中心人物は、モーセでした。
- ・アダム、ノア、アブラハムなどに比べて、モーセの異なる点は、第一に、モーセが神様の代理となり、神様として立てられたということです(出エ 4:16)。第二に、将来来られるイエス様の模擬者であったのです(ヨハネ 5:19)。
- ・モーセは、アベル、ノア、イサクが、象徴献祭を完了した基台の上に立っていました。
- ・また、供え物で「信仰基台」を復帰した、復帰基台摂理時代は過ぎさり、神様のみ言に直接対し得る、復帰摂理時代となったため、「象徴献祭」は、しなくてもいいのです。
- ・モーセは、神様のみ言を中心として、「40 日サタン分立基台」だけを立てれば、「信仰基台」を復帰することができました。

【感想】

モーセ路程の中心人物はもちろん、モーセでした。そして、モーセの時代においては神様の指示を直接受けることができる時代圏に入っていたために、供え物を捧げる必要がなかったというのです。その上で 40 日に相当する 40 数の数理的な期間を全うすることができれば、信仰基台を復帰することができたのです。

私たちも、万物を供える段階を超えて成長するようになると、教会から様々な指示を責任分担として受けるようになります。ですので、象徴献祭のように万物を捧げるのではなく、教会からの指示を 40 数に相当する期間、全うすることで、信仰基台を立てることができるのです。

そして、イエス様がモーセのごとく歩まれたように、御父母様もイエス様のように歩まれ、それに続く私たちも、御父母様に倣って歩むことを実践するというのであれば、モーセ路程は私たちの路程でもあるのです。

ですので、教会から流れてくる摂理とは、単なる組織的な指示ではなく、原理的な天の摂理にかなっているというのです。40 日路程が組まれれば、それを通して信仰基台が復帰され、精誠を捧げた皆様がアベルとなるのです。

このような時代的な恩恵により、御父母様の御言を直接受けることができるようになれば、象徴献祭が必要ではなくなるのです。ですが、逆にいくら御父母様の御言を聞いても、その真意を悟れず、実践できないのであれば、今度は象徴献祭を通じて心霊を成長させる必要も出てくるという判断になると思います。

皆様はいかがでしょうか。御父母様からの御言を毎日、充実して実践されていますでしょうか。それができない。御言とは関係のない生活をしてしまうというのであれば、万物を象徴献祭として捧げるのが自分の成長のためになるというのです。

モーセの時代は僕の時代です。僕は神様からの言葉を受けることができます。受けた言葉を行って義とされるのですから、この時代を行義時代と呼びます。

【御言】

実体基台

- ・復帰摂理時代になると、「民族的な実体基台」を立てる摂理をされました。
- ・ここで、モーセは神様の身代わりとなるので、イエス様の立場でした。それゆえモーセは、イスラエル民族に対しては、父母の立場でした。
- ・一方、モーセは、イエス様に先立って来た預言者として、その子女の立場でもありました。したがって彼は、「民族的な実体基台」の中心人物として、アベルの立場にも立たなければなりませんでした。
- ・このような基台の上に、イスラエル民族がカインの立場で、「墮落性を脱ぐための民族的な蕩滅条件」を立てるならば、そこに「民族的な実体基台」はつくられるのです。

【感想】

モーセを中心とする復帰摂理において、実体基台はモーセに従う民族がいかに墮落性を脱ぐための蕩滅条件を立てるのかということが説明されます。

このお話は他人事ではありません。教会において、教会の中心者の方々に従う私たちにおいても当然適用される典型路程なのです。ですので、私たちはかつてのヤコブ路程におけるエサウのようにヤコブを愛して一体化したごとく、教会の中心者の方々を愛して一体化すべきなのです。日本の教会の摂理において、中心性と一体化に神様が働くという経験則は、このような原理によって裏付けられているのです。

しかし、現実を見てみると、まさにかつてのモーセに従ったイスラエル民族のように様々な不信仰を犯しやすい私たちであり、そのような私たちを見つめながらも愛情を注ぎ続けなければならない中心者の苦悩というものを知る人は少ないと思います。

ここで、民族的な実体基台は作られるはずだったと表現されていることからおわりの通り、実体基台を作る摂理において何度も失敗を重ねたということを意味します。

モーセの前においてイスラエル民族はどのような所行を展開したのかは聖書がしっかりと記録しています。エジプトを振り返ったこともあると記録されています。皆様も今の苦勞を見つめながら復帰されなければ良かったと、復帰される前の生活を懐かしむようなことはありませんか。そのような情の発露もモーセ路程において解明されていたということです。

ですので、モーセ路程におけるイスラエル民族の犯した不信仰というものは私たちも犯しやすい信仰課題であって、それがどのような結果を招くのかということも原理は明確に示しています。

ですので、中心性と一体化に神様が働くのは、中心者の信仰基台の上に従う教会員の実体基台が整うために、メシヤが降臨できるという条件が成立するからなのです。皆様はいかがでしょうか。中心者の方と円滑に授受作用をしながら一体化されていますか。

【御言】

モーセを中心とする民族的カナン復帰路程

- ・モーセがサタンの世界であるエジプトから、イスラエルの選民を奇跡をもって導きだし、紅海を渡り、荒野を巡って、神様が約束された土地であるカナンに向かう路程は、
- ・将来、イエス様が罪惡世界において、キリスト教信徒を奇跡をもって導き、この罪惡世界の苦海を渡り、生命の水が乾いた砂漠を巡って、神様が約束された創造本然のエデンに復帰するその路程を、先に見せてくださったのです。
- ・この路程は、イスラエル民族の不信によって、各々三次にわたって延長されました。

【感想】

私たちは奇跡的に靈の親に出会い、真理の御言に触れ、サタン世界を後にして、この道に来ているのが一般的だと思います。私たちは、信仰を始める初期において、神様から奇跡的な実績を

与えられたり、奇跡的に病が改善するなどの恩恵を得て、御旨を出発することがあったと思います。これは、モーセの時もそうであったし、イエス様の時もそうであったということです。

ところが、そのような奇跡的な回復を聞いて、あたかも病院に来るようにこの道を訪ねるのは、まさにイエス様の前に運ばれた病人たちそのものになってしまうのです。病人はイエス様によって癒やされました。ですが、その後の癒やされた病人はどうなったのでしょうか。病気のことも忘れ、イエス様への感謝の気持ちも一時的なものになってしまい、誰もイエス様に従う者はいなかったと言います。

これが奇跡信仰の大きな問題点なのです。奇跡信仰の問題点は奇跡的な出来事が起こらなければ信仰を失ってしまう点なのです。ですが、御父母様は明確に奇跡は例外であって、摂理に大きな穴が開くと表現されています。

もう一つ、奇跡の問題点は奇跡で受ける恩恵は一時的なことです。一時的な恩恵に感謝しても、一時は従ったとしても時間の経過と共にその恩恵への感謝の気持ちは薄れ、最後には離れてしまうということも往々にしてあります。

そのような意味において、信仰の動機が奇跡にあるとするならば、それは改めるべき点があると私は思います。永遠性のある動機とは神様から流れてくる真の愛です。真の愛をもって神様とまた人々と授受作用を円滑にすれば、自然と病氣も改善することがあります。ですが、病氣を改善するために信仰を持つというのは本末が転倒としているといえます。

奇跡という大きな恩恵は一時的な現象なのです。一時的な現象に永遠に通じるのは真の愛が介在したときのみです。真の愛を抜きにした奇跡というものでは、信仰の道を永遠に歩むというのは難しいでしょう。

モーセの路程もその奇跡信仰故に三次にわたって延長されて、結局摂理を完遂したのは奇跡によって導かれた民ではなく、荒野の中で誕生した二世だったのではないのでしょうか。皆様はいかがでしょうか。

【御言】

第一次民族のカナン復帰路程

- ・モーセがイスラエル民族を導いて、「信仰基台」を復帰する人物となるためには、「40 日サタン分立の基台」を立てなければなりませんでした。
- ・モーセは、神様のみ言を中心として、サタン世界の中心であるパロ宮中生活の 40 年をもって、「40 日サタン分立基台」を立て、「信仰基台」を復帰することができました。
- ・しかし、「実体基台」は、民族の不信によりつくることができず、
- ・第一次民族のカナン復帰路程は失敗に終わりました。

【感想】

モーセはパロの宮中で 40 年を過ごします。その 40 年期間のうちに、モーセは神様の御言を中心として生活したとあります。そこには、パロの宮中で乳母となった実の母親の影響が大きいのは間違いないと思います。

裕福な家庭で育った方には、このパロ宮中の摂理はよく分かると思います。裕福な環境の中においても、神様の御言に触れ、貧しく虐げられている食口を見たときに、憤激の情を感じたことはありませんでしょうか。高い地位にあったり、経済的に裕福な生活の中で生活していた自分が、食口を救うためにその生活を飛び出したとします。でも、そのような貴方の愛情に気づくことなく、食口があなたの心情を信じるできないと拒絶されるような場面もあるということです。

これはモーセに限ったことではありません。高い身分において、経済的に裕福な環境に生活していた自分に起こりえることであると神様は示されているのです。そして、その環境を飛び出した自分はなんと愚かな自分だったのかと自分勝手に思ってしまい、やはり元の環境に戻ってしまうということもあるかもしれません。

ですが、それは天の摂理を知らないが故の無知による回り道なのです。一旦裕福な環境を飛び出した自分にはもはや戻るべき場所もなく、心情的には荒野に出て行くような境地を味わうというのです。

真の御父母様もそのように荒野に追い出されたメシヤなのです。ですが、そこで落胆してはならないのです。神様の摂理は聖書に示されているとおりに展開されて行きます。ですので、そのような人であればあるほど、多くの群衆を導くリーダーとしての道があるということを忘れてはなりません。

モーセにおいても第一次の復帰路程は失敗に終わったのです。モーセは何の問題もなかったのですが、従うべきイスラエル民族が不信したというカイン圏の条件不足によってです。

皆様はいかがでしょうか。教会の中心者を不信しているようなことはありませんか。その生い立ちを知るにつけ、あのような人には私たち貧乏人の気持ちは分からないと不信しているようなことはありませんか。これこそが、まさにモーセ路程の第一次路程の失敗の全容です。皆様は同じことをしていませんか。

【御言】

第二次民族のカナン復帰路程 信仰基台

・第一次路程の失敗で、パロ宮中の40年期間は、サタンの侵入を受けました。それゆえに、第二次路程を出発するためには、その40年期間を蕩滅復帰する期間を再び立て、「信仰基台」を復帰しなければなりませんでした。

・モーセは、ミデヤン荒野における40年をもって「40日サタン分立基台」を立てたため、第二次路程のための「信仰基台」を復帰することができました。

【感想】

モーセの一次の路程は失敗に終わったため、モーセは荒野に追い出されます。その荒野でモーセがどのような生活をしたのかということはここでは述べられていません。ですが、モーセの変わらぬ信仰は第二次の路程を出発するための信仰基台を復帰し得たのです。ここでは単に40年間、荒野生活をしたと述べられていますが、その苦難は私たちには計り知れないものがあります。

裕福な生活を抜け出て、教会の荒野生活に出てこられた方には、お分かりになるのかもしれませんが。教会生活においても変わらぬ信仰で神様を慕い、精誠を捧げる中で、神様は次の摂理を準備されているのです。

ですので、教会の中心者という方も荒野路程を経験されている方が多いために、貧しい生活や苦難の生活の事情などをよく理解して下さるということもあると思います。ですが、そのような人情的なつながりだけではなくて、天の摂理は荒野においても変わらず信仰を貫く指導者に次の摂理を準備されるのです。

ですので、私たちはパロの宮中にいても、荒野にいても、神様に対する信仰が揺れてはならないということです。それが指導者としての素養になるということです。

男性の場合、社会的な地位や名声、肩書きというものに価値を見だしやすいのですが、そのような肩書きで信仰をするものではないということです。教会長という肩書きがあろうと、教会の平凡な一食口であろうと、問われるのは神様に対する熱い情熱と愛情なのです。

その意味で、教会の中心者の方々は私たち以上に地位に対する固執はないと言えるのです。モーセ路程の示すリーダー像とは宮中においても、荒野においても、神様を変えることなく愛し、従う勇士であるというものです。

ですので、非原理世界における出世欲というようなものを教会において持つと位置に対する固執から摂理を見失うことがあるということです。

私たちは神様の前においては子女です。それ以上でもそれ以下でもありません。ただ、神様に近い心情を持っておられる方がアベルとして私たちを指導して下さっているのです。皆様はそのよ

うなリーダーを前にして歩んでいるのです。

【御言】

第二次民族のカナン復帰路程 実体基台

- ・モーセは、「信仰基台」を復帰すると同時に、再び「墮落性を脱ぐための民族的な蕩滅条件」を立てるに当たってのアベルの位置をも確立しました。
- ・第一次路程で、エジプト人を打ち殺したのと同じ目的をもって、第二次路程を出発するに当たって、神様はモーセに、三大奇跡と十災禍を起こす権能を与えられ、エジプト人を打つことによって「出発のための摂理」をされました。
- ・そして、イスラエル民族は、アベルの立場を確立したモーセを信じ、従う立場に立つようになったので、彼らは、第二次民族のカナン復帰路程を出発することができました。
- ・イスラエル民族は、荒野路程の全期間を通じ、従順と屈伏をもってモーセを信じ、従い、カナンに入ってしまうまでは、「民族的な実体基台」を立てることができませんでした。

【感想】

モーセは荒野路程において再び信仰基台を蕩滅復帰します。その信仰基台の上に民族のアベルの位置に立つのです。その上で、今度は三大奇跡と十災禍をもって、イスラエル民族を荒野に導き出します。

このようにモーセは奇跡をもって民を導こうとされたので、イエス様の時においてもイエス様は様々な奇跡を行い民を導こうとされたのでした。この奇跡を通じて、イスラエル民族はモーセを信じたので、カナン復帰路程を出発することができたというのです。

ですが、奇跡信仰の問題点でもあるように、奇跡は一時的な現象なのです。その一時的な出来事をもって、長い荒野路程を歩むことはできなかったというのです。ですが、民族的な実体基台が求めるものは、荒野路程の全期間を通じてイスラエル民族がモーセに従順に信じ、従うことでした。ですので、イスラエルの民族がモーセを信じたのは一時的なものであり、期間を全うできなかったがゆえに、この第二次の摂理も失敗に終わります。

ですので、教会の中心者の方の華々しい実績や奇跡的な手腕に感動して従ったとしても、それは信仰的には難しくなるというのです。本来の信仰とは真の愛に立脚した円滑な授受作用を復帰することにあります。真の愛とは一時的な愛情ではありません。そこには永遠性があり、不変性があります。

それであるがゆえに、奇跡的な恩恵を受けたので信仰をしているとすると、様々な日常的な試練に不平や不満、信仰の道に来ない方が幸せだったと思ってしまうようにエジプトを振り返るようなことが起こるのです。

ですので、信仰的に安定するためには、一時的な出来事を信仰の動機とするのではなく、真の愛の因縁を復帰するという永続性のある動機を持たなければこの道は難しくなると思います。

真の御父母様はそのことをよくご存じでしたので、イエス様のように奇跡を起こす権能を持っておられたとしても、どこまで人々を愛で屈服させてゆかれたということだと思います。

どうでしょう。皆様は一時的な奇跡を信じているようなことはありませんか。もしそうだとしたら、荒野のイスラエル民族のように長期間信仰を全うするのは難しくなります。どこまでも真の愛の心情を復帰することが永遠性のある動機を得ることにつながると私は思います。

【御言】

幕屋を中心とする復帰摂理

石板、幕屋、契約の箱などの意義とその目的

- ・イスラエル民族は、3ヵ月目の初めに、シナイの荒野に到着しました。モーセは、シナイ山で断食する間に、神様から契約の箱と幕屋についての指示と二つの石板を受けました。

- ・み言を記録した二つの石板は、復帰したアダムとエバとの象徴体であって、将来、み言の実体として来られるイエス様と聖霊とを象徴しました。幕屋はイエス様の象徴的な表示体であり、契約の箱は、大きくは天宙の、小さくは幕屋の縮小体でした。
- ・それでは、石板と幕屋と契約の箱とを下し給うた目的は、どこにあるのでしょうか。
- ・荒野路程でイスラエル民族は不信に流れてしまい、ついには、モーセまでが不信の行動をとるかもしれないという立場に陥ってしまいました。
- ・ここにおいて神様は、たとえ人間は変わっても変わることのできないある信仰の対象を立てなければなりませんでした。

【感想】

ここでは契約の箱、幕屋の意味が紹介されています。少し前までに、天福函が成約時代の幕屋であるということを皆様も聞かれていたと思います。その幕屋としての意味合いを考えると、まさに契約の箱の中に納められていた石板が、天福函に納められていた御言だと思います。

真のお父様の生前において、真のお父様をご存命中に摂理が完結しないことを思われた神様は、真のお父様が霊界に行かれた後も摂理を継続するために、食口たちを指導するために、人間は変わっても変わることのできない信仰の対象として天福函を用意されたというのです。

真のお父様が聖和された後も、御言の整理が急がれ、經典函が用意されたのは、皆様も良く知られていると思います。その意義とは何なののでしょうか。その原理的な理由というのが、このモーセ路程における幕屋のところで語られているのです。

真のお父様も地上の摂理を完結することができないことが明確になると、神様は真のお父様に代わって変わることの無い信仰の対象を準備する必要があったというのです。それが幕屋であり、今の私たちにおいては御言なのです。

ですので、天福函も經典函も授かるだけでは単なる摂理歴史の記念品にすぎないのですが、もっとその重要な真価というものがあることを忘れてはいけないと思います。それは、それぞれの函に納められている御言を絶対的に信じ、信仰の対象として、摂理を継承して行くことにあります。

モーセ路程においても、モーセが他界した後においても、ヨシュアがその使命を継承できたのも幕屋故だったのです。真のお父様が聖和された今においては、真のお父様が語られた御言が信仰の対象になるというのです。

今の時代、真のお母様が摂理を継承されており、真のお母様の時代にすべてを終わらせるという覚悟で歩まれていると言います。もちろん、天の摂理はそれを実現することを可能とする予定もあると思います。

ですが、人間の責任分担において、私たちの精誠が不十分な際にも神様は摂理を準備する必要があり、その際に、私たちの指針となるのが天福函、經典函に納められている御言だということです。

ですので、天福函も經典函も単に家宝として飾っておくだけのものではありません。中に納められている御言を毎日しっかりと訓読して、その御言を信じ、実践することをもって摂理を継承することができるという認証を受けたのが天福函の意義だと思います。

皆様はいかがでしょう。単なる経済摂理の方便として使われているなどとは思われていませんか。決してそのようなことはありません。天福函が家庭に入ったということは、真のお父様が聖和された後にも、その納められた御言を信奉することにより、摂理を継承して行くことを神様に許諾されたことを意味します。今は經典函の摂理になっています。ものとしての価値では無いことを私は感じています。

【御言】

第一次、第二次幕屋のための基台

- ・モーセは、40 日間の断食が終わったとき、十戒を記録した二つの石板を受けました。
- ・しかし、民の不信を見たモーセは大いに怒って、石板を壊してしまいました。したがって第一次幕屋のための基台はつくるができなくなったのです。
- ・再び 40 日 40 夜を断食したとき、神様は石板に再び十戒を記録してくださりました。
- ・石板をもって現れたとき、イスラエル民族は、初めてモーセを信じ、仕えるようになって、契約の箱をつくり、幕屋を建設したのであり、幕屋を中心としてシナイ荒野を出発しました。
- ・しかし、彼らは再び不信に陥り、第二次幕屋のための基台がサタンの侵入を受けるようになり、この基台を復帰しようとした摂理が、またも三次に延長されました。

【感想】

このモーセの路程における失敗は今の時代においても起こりえるということなのです。教会の中心者の方々が御父母様やより中心的な方の召集によって、御言を受けに出かけられた時のことです。その留守を食口がいかに守るのかということです。

留守中において、中心者が不在であるということで、非原理的な生活習慣が教会に入ってきて、これからはもっと科学的に実生活に即した歩みをするべきだとみんなが話し合っていたとします。これは天の摂理を知らないがゆえの過ちなのですが、その惨状を帰ってきた中心者が報告を受けられたときに、血気のあまりに受けた御言を忘れてしまうというようなことも起こりえるということです。もしくは伝えるべき重要な部分が抜けてしまうということも起こりえます。

これは、人間的な推測ではありません。モーセ路程における失敗の教訓なのです。とくに中心者不在における教会においては、金の子牛を崇拝してはならないということです。しっかりと留守を守るにおいては、中心者が受けた御言と恩恵を失わないように、しっかりと神様と御父母様に対する信仰を堅持して、中心者の帰りを待ち望むことを忘れてはならないと思います。

かつては二の位置の信仰が教会では重要な鍵を握ると言われていたことがあると思いますが、中心者不在の留守を預かるのもこの二の位置の方だと思います。それであるがゆえ、私たちは中心者が不在の時ほど緊張するということです。皆さんは羽が伸ばせるので安心できると思われるかもしれませんが、心ある食口はそんなことがないことをしっかりとわきまえているということです。

【御言】

第三次幕屋のための基台

- ・第三次の「幕屋のための基台」を蕩滅復帰できる条件として下さったのが、40 日のカナン偵察期間でした。
- ・40 日の偵察から戻ってきた 12 名のうち、ヨシュアとカレブを除いては全部が不信仰な報告をしました。
- ・この報告を聞いたイスラエル民族は、モーセにつぶやき、泣き叫びながら、不信に陥り、第三次の「幕屋のための基台」もサタンの侵入を受けました。

【感想】

ここでは不信仰な報告と信仰的な報告が登場します。40 日の偵察期間を終えて、偵察をして帰ってきた 12 名が誰と相対したのかということがポイントになります。

ヨシュアとカレブを除く 10 名が完全にサタンと相対して、カナンにいる民族の外見的な風貌などで、恐れを抱いたということです。すなわち、彼らの報告はカナンに入ることはできないということを前提に、その理由を納得の行くように説明したのだと思います。ヨシュアとカレブはどうでしょうか。彼らはカナンには入れることを前提に、その理由を説明したのだと思います。カナンに入ることは神様の予定なので、それが成就するという報告はもちろん神様と相対していたことになります。

ここに多数決の落とし穴があるのです。10 名が不信仰な報告をし、2 名が信仰的な報告をしました。多数決であれば当然、10 名の意見が通るのが道理でしょう。聖書もそのように記録しており、この報告を聞いたイスラエル民族は泣き叫びながら不信に陥っていったというのです。

イスラエル民族が不信に陥るということは、サタンと相対するようになることを意味します。この結果、摂理は成就できなくなります。つまり、これが悪であり、サタンの侵入なのです。摂理における多数決は、神様が投票する 1 票で全部が決まります。それが少数派の意見であっても、神様が賛成すれば多数派になるのです。この偵察における神様の意見は少数派のヨシュアとカレブだったのです。

私たちも摂理を進める上で難しい問題を抱えることがあると思います。ですが、問題を報告する際に、問題が解決できることを前提に、その根拠などを報告するのと、いやこの問題を解決するのは無理だと、できない弁明の理由を探して回るのとの 2通りの報告があるというのです。ですが、問題を前にできないと思い込んでしまうことは、解決策を見つけることをあきらめてしまう結果に陥りやすく、いつまでも問題が解決できないまま置き去りにされることもあるのです。

ですが、本来の問題解決は、問題が解決できることを前提に、方法を探すべきであり、神様の摂理も成就されることを前提に方法を考えるべきなのです。

皆様はいかがですか？ 2020 の摂理を成就できるということを前提に方法を探しておられますでしょうか。あまりにも目標が大きすぎると諦める理由を探しているようなことはありませんか。このような信仰姿勢において、私たちは信仰的な報告をしたヨシュアとカレブなのか、不信仰な報告をしたその他の 10 名なのか分かれるのです。そして、巧妙に侵入してくるサタンの方法というものもここから見えてくるのです。

【御言】

第二次民族のカナン復帰路程の失敗

- このように、「幕屋のための基台」が、三次にわたってサタンの侵入を受けるようになったので、第二次に立てようとした「実体基台」を造成することができなくなり、第二次民族のカナン復帰路程は、失敗に終わってしまいました。
- 第二次 21 ヶ月 荒野路程は、第三次 40 年 荒野路程に延長されました。

【感想】

偵察による報告によりイスラエル民族が不信仰に陥るようになったために、第二次のカナン復帰路程も失敗に終わってしまいます。その結果、摂理は延長され、イスラエル民族は荒野に 40 年間流浪することになります。この荒野路程において、エジプトを出発したほとんどのイスラエルの民が荒野において亡くなり、荒野で出生した二世圏が摂理を引き継ぐことになります。

真のお父様が聖和され、教会の方々も高齢化が進んでおり、霊界に行かれる人も年々増えていることと思います。このように、エジプトを出発した私たちは、この地上が地上天国になるというカナンを見ることなく霊界に行くかもしれません。摂理の荒野路程で生まれた二世圏が摂理を継承して、この地上世界を神様の主権となる地上天国へと転換してくれることを願っています。

そのような意味において、真の御父母様も二世圏に対する期待と教育の重要性を語られていると思います。

今、ビジョン 2020 で何としても韓半島を平和的に統一し、神様の祖国とすることを目指していますが、この地上全体が、この地球が神様の主管圏に復帰されるというのは、私たちの生きている間には見ることができないかもしれないというのです。それは、エジプトを出発したイスラエル民族の宿命でもあります。そのような事情も原理は紹介しており、今日の二世圏の摂理もそのような原理的な背景があることが理解できます。

真のお父様も地上の摂理が完結すること無く、霊界に行かれました。そのこともモーセの生涯を見れば、あまりにも同時的であり、モーセ路程を理解することなしに、御父母様の生涯を正確に理

解することはできないのではと私は思います。

【御言】

第三次民族のカナン復帰路程 信仰基台

- ・イスラエル民族が偵察 40 日期間を、信仰と従順をもって立てることができなかったのも、日を年に換算して、荒野を経てカデシバルネアに戻るまでの 40 年期間は、
- ・モーセにおいては、第二次民族のカナン復帰路程に侵入したサタンを分立して、第三次路程の「信仰基台」を蕩滅復帰するための期間となりました。
- ・モーセは、ひたすら信仰と忠誠をもって、幕屋を信奉しながら荒野を流浪したあと、カデシバルネアに戻ってきたこの荒野の 40 年間で、「信仰基台」を立てることができました。
- ・それによってこの路程の、「実体献祭」のためのアベルの立場も確立するようになりました。

【感想】

アベルと呼ばれる中心者の方々は、ここでも紹介されているように、カイン圏の不信仰にも関わらず変わることの無い信仰と忠誠をもって信仰基台を準備して下さっているのです。これはモーセに限りません。真の御父母様も足りない私たちの姿を見つめながらも、何度も信仰基台を準備され、摂理を進めようとされてきたのは皆様もご存じだと思います。

これは教会においても同じなのです。信徒の度重なる不信仰な姿を目にしながらも、摂理が延長されたことに不満や不平をこぼすことなく、変わらぬ信仰と忠誠で信仰基台を何度も準備されているのが中心者と呼ばれる人々なのです。

モーセは 21 ヶ月の路程が 40 年に延長されたとしても、信仰と忠誠においては変わることがなかったということです。皆様でしたらどうでしょう。摂理が 40 年間延長されたということで、再び 40 年間精誠を捧げる決意はありますか。

信仰歴においても 40 年になる方々は教会でも希少な存在だと思いますけど、摂理を牽引されていた御父母様は荒野 40 年路程を見事に勝利された方でもあるのです。

このようにリーダーと呼ばれる人には従う者の不信仰を目にしても信仰が揺らいではいけないという素養が求められます。また、そのような信仰の訓練を受けられた方が教会長などの中心者になられているというのが現状だと思います。

モーセは 40 年の荒野路程において勝利をし、見事にアベルの立場を確立するようになります。氏族のメシヤとして立てられている皆様においても、このモーセのように伝道対象者がどのような不信仰的な言動をしようとも変わることなく、御父母様に忠誠を尽くすことを決意されていますか。

このように信仰基台を復帰するためには一定の期間が必要になります。その期間が長ければ長いほど、摂理は大きなものになります。では、皆様は、どれくらいの期間の信仰基台を立てられていますか。条件生活の中で三日坊主になるようなことはありませんか。継続期間が長いほど、御言は体に定着するようになります。継続が力になるというのは、このように信仰基台に期間が必要なことから言われるようになったと私は思っています。

【御言】

第三次民族のカナン復帰路程 モーセを中心とする実体基台

- ・神様は磐石を中心とする「出発のための摂理」を立てるために、モーセをしてイスラエルの会衆の前で、杖をもって岩(磐石)を打ち、水を出させて、彼らに飲ませられました。
- ・ところがモーセが、不平を言い、つぶやいている民を見たとき、憤激のあまり、血気を抑えることができず、磐石を二度打った行動は、将来、復帰された石として来られるイエス様を、打つことができるという表示的な行動となりました。
- ・この行動は、イエス様の前に、サタンが直接、出現し得るという条件を、成立させたことになるので、罪となったのです。

- ・したがって、「出発のための摂理」は成就できなくなり、
- ・モーセは、カナンに入ることができず、120 歳を一期として死んでしまったのです。

【感想】

私たちは従ってくる者たちの不平や不満、そのつぶやきを目にしたとき、自分の苦勞を知らずになぜそのようなことが言えるのかと、ある種の怒りを感じることがあると思います。これはモーセに限ったことではありません。教会生活においても往々にして起こりえることなのです。

皆様も様々な責任分担を担われ、そのあまりにも大きな責任に苦痛を感じ、愚痴を漏らすようなこともあるかと思います。ですが、そのような不平を聞いた中心者は本当に試練を受けるというのです。湧き上がる怒りにも似た血気を主管しなければならないからなのです。

真のお父様も本当に血気が盛んな方でした。そのようなお父様も宇宙を主管する前に自己を主管しなければならないと語られた背景には、このような摂理的な憤激を主管できなければ、摂理を導けないことをご存じだったからなのです。

ですので、教会において中心者に従う際には、私たちは不平や不満をつぶやくことを厳に慎まなければならないのです。もちろん適切な報連相は必要です。ですが、中心者に対して不満をぶつけることは、時として中心者の血気を誘い、中心者の判断を誤らせてしまう可能性もあるということです。

このような歴史的な教訓があるがゆえに、人々を導くリーダーとは血気にはやる人ではなく、いかなる状況においても沈着冷静に振る舞うことが求められるのだと思います。

このように人間の血気、憤激とは神様の摂理を失敗させる原因となるのです。怒りに我を忘れて失敗してしまったら、取り返しがつかないこともあるのです。モーセはこの失敗故にカナンに入ることなく荒野で霊界に行くことになったのです。

もちろん、神様に喜怒哀楽があるように、人間にも喜怒哀楽の感情があります。怒気を悪いと言っているわけではありません。ですが、怒りの感情を主管することができなければ、摂理的判断を誤る危険性が高くなるということをモーセは示しています。皆様はいかがでしょう。感情にまかせて日々、怒りを発散しているようなことはありませんか。そうであるならば、是非、自己を主管することを意識されることを祈ります。重要な摂理的な判断を誤らないために。

【御言】

第三次民族的カナン復帰路程 ヨシュアを中心とする実体基台

- ・神様は、ヨシュアをモーセの代理として立てられました。
- ・ヨシュアは二人の偵察をエリコ城に送りました。偵察を終えて戻ってきた二人の偵察は、『この国の住民はみなわれわれの前に震えおののいています』と、信仰をもって報告しました。
- ・このとき、荒野で出生したイスラエルの子孫たちは、みなその言葉を信じたので、彼らは出発することができました。
- ・過越の祭を守ってのち、エリコの城壁に向かって進軍しました。7日間城を回った後、ヨシュアの号令で、一斉に大声をあげて呼ばわったので、その城が、たちまちにして崩れてしまいました。
- ・このように、カナンにはいったヨシュアは、31 王を滅ぼしました。

【感想】

ここでは、モーセの使命を継承したヨシュアが、カナンに入り、31 王を滅ぼしたことを紹介しています。ここでも、予定論の内容を反復しますが、神様の摂理を担う中心人物が責任を全うすれば、信じられないような大きな実績が与えられることを述べています。つまり、人間の 5%の精誠に神様の 95%が加わるからなのです。

ヨシュアもモーセの時の蕩滅として再度偵察をエリコに送ります。しかし、今回の偵察は、モーセの時の偵察の失敗を知っており、さらに信仰的な報告をしたヨシュアが摂理を継承したことを理解

していたと思います。それであるがゆえに、カナンの民族に恐れを抱くよりも、必ずカナンに入ることができるということを前提に報告をしたのだと思います。

また、イスラエル民族はその報告を信じ、誰もがカナンには入れると確信した時に、天の摂理は大きく動いたことを述べています。

私たちの教会においても、真の御父母様はいついつまでに必ず摂理は成就すると宣言されても、従う私たちが信じ切ることができずに、摂理が延長されてきたという歴史を刻んでいます。これは初めてのことでありません。かつてのモーセに従ったイスラエル民族がそうだったというのです。

今も 2020 年に向けて摂理が進められていますが、それを担う私たちが、みんな必ず成就することを確信するとき、予定論におけるように、急速に摂理が進むことがあるのです。その足並みをそろえるのが今の現状で難しいというのは、かつてのイスラエル民族がそうだったというのです。

真のお父様の使命を継承された真のお母様を中心として、私たちは 2020 年に必ず摂理は成就すると確信して、責任分担に取り組むべきなのです。私たちの 5% の精誠が足りないとき、神様の 95% が用意されていても、つながらないことがあるのです。その神様の 95% の準備を天運と呼ぶこともあります。

どうでしょう。私たちは 2020 年に摂理が成就することを前提に歩んでいますか。その確信を持つことが信仰の訓練にもなると思います。予定論を知る人は、このヨシュアの大勝利も良く理解できると思います。

【御言】

メシヤのための基台

- このようにして、第三次の民族的カナン復帰路程の「実体基台」がつくられ、それによって「メシヤのための民族的基台」が造成されました。
- ところが、そのとき既に、墮落人間たちが、サタンを中心として、エジプト王国などの強大な王国を建設し、天の側の復帰摂理と対決していたので、サタンと対決することのできる天の側の王国が建設されるまでには、メシヤは降臨なさることができませんでした。
- カナンに入った内的イスラエルも、また不信に陥り、この摂理は、再び延長を重ねてイエス様のときまで至りました。

【感想】

このようにモーセ路程においては民族的な蕩滅条件がカナンに入ることによって成し遂げられます。ですが、サタン世界は版図は民族ではなく国家だったのです。その国家基準の故に神様はメシヤを送ることができなかったというのです。

これは、今の摂理においても同じなのです。私たちがいくら救われたと喜んでいても、それが個人レベル、家庭レベル、教会という民族レベルでは国家からの攻撃を防ぐことは難しくなるのです。それで、教会の全体摂理として国家復帰を叫んでいるのであり、南北統一もその一環なのです。

南北統一は単に韓半島が統一されれば良いというものではなく、統一された韓半島が私たちの祖国となり、国家を私たちが復帰したことにならなければならないのです。

カナンに入った内的なイスラエルは不信に陥り、摂理はさらに延長を重ねて、イエス様の時代を迎えます。この内的なイスラエルの不信した内容は今日の二世においても気をつけなければならない注意点になっています。

二世の婚姻においても、非原理との結婚を警告するのも、この内的イスラエルの不信仰につながるからなのです。カナンに安住したイスラエル民族は経済的な豊かさや地位や名誉、知識などを重んじてしまい、荒野で培った信仰を忘れてしまいました。

今日、教会で生活苦を経験している二世において、裕福な異性との縁談が舞い込んできたとしたら、それをどうするのかというのです。御父母様の伝統をしっかりと相続させるためにも、婚姻においても祝福を受けるというのが理想的だという理由の根拠は、この内的イスラエルの不信による

警告故の原理的な理由があるというのです。

このように、摂理には数の基盤、版図を必要とすることも原理はしっかりと述べています。ですので、伝道においても人々の救いであると同時に、数的な基盤を広げるという使命も含まれているということを、この部分では述べています。どうでしょう。皆様の版図は広がりつつありますか。

【御言】

第3節 イエス様を中心とする復帰摂理

サタン屈伏路程

- ・後のアダムとして来られるイエス様は、サタンを屈伏させて、天国を復帰しなければなりません。
- ・ヤコブはサタンを屈伏させる象徴的路程を歩いたのであり、モーセはサタンを屈伏させる形象的路程を歩み、イエス様はその実体的路程を歩まなければなりませんでした。
- ・それゆえに、イエス様は、モーセがサタンを屈伏していった民族的カナン復帰路程を見本として、サタンを屈伏させることによって、世界的カナン復帰路程を完遂しなければなりませんでした。

【感想】

イエス様は世界的カナン復帰路程を完遂しなければならなかったのです。これが明確になっているということは、イエス様は十字架にかかって死ぬために来たのではないということなのです。では、誰が十字架にかけたのでしょうか。聖書はイスラエル民族がイエス様を十字架にかけてしまったと記録しています。ですが、その背後ではサタンが動いていたことは間違いありません。

つまりは、イエス様の示された愛情にサタンは屈服しなかったということなのです。そうではなく、サタンはイスラエル民族の不信を理由に、イエス様の肉体を引き替えとして要求したということなのです。

ヤコブやモーセを通じて示されたサタン屈服の典型路程にもかかわらず、サタンはイエス様に三大試練を与え、イエス様の前に屈することはあっても、何度も機会をうかがっていたということは、心情的に屈服していなかったことを物語ります。

そのサタンを真の御父母様は心情的に屈服させ、サタンを神様の前に連れて行き、本然の天使長として復帰したという歴史的な偉業を成し遂げられたのです。ですので、イエス様の時代に達成することのできなかったサタンの完全屈服の使命を真の御父母様は再臨主として継承し、イエス様の失敗を繰り返すことなく、成就されたというのです。

私たちはそのサタン屈服の路程をもっと研究すべきであり、その路程を典型路程として、悪霊人を屈服させてゆくべき使命が私たちにもあるというのです。ですので、真の御父母様の生涯を研究することは、サタンを屈服させる方法を知ることにつながり、それを相続することで、私たちも悪霊などを屈服させてゆくことができるようになるというのです。

ですので、真の御父母様の生涯路程を研究することの重要性を原理はこの部分で説明しているのだと思います。皆様はいかがですか。悪霊人から逃げて回ったり、避けて回っているようなことはありませんか。真の御父母様のサタン屈服の路程を相続することができれば、悪霊でさえも本然の善霊へと復帰することもできるのです。

ですが、その悪霊を屈服させるには、十分な知識と経験が必要です。決して自分勝手に試したりしないように。悪霊が相対すると強力に引っ張られることがありますので、私たち一般の食口においては清平摂理に連結し、祈願書を活用するのが一般的だと思います。

【御言】

第一次世界的カナン復帰路程 信仰基台

- ・第一次世界的カナン復帰路程において、「信仰基台」を復帰しなければならない中心人物は、洗礼ヨハネでした。
- ・モーセが、パロ宮中で忠孝の道を学んだように、洗礼ヨハネは、荒野でメシヤを迎えるために、天

に対する忠孝の道を立てました。

・洗礼ヨハネは、このようにして「40 日サタン分立基台」を立てたので、第一次世界的カナン復帰のための「信仰基台」をつくることができました。

【感想】

イエス様の世界的カナン復帰路程において、誰しもが中心人物はイエス様だと思っておられる方が多いのではないのでしょうか。ですが、原理をよくよく理解してみると、イエス様の第一次世界的カナン復帰路程における信仰基台の中心人物は洗礼ヨハネだったのです。つまり、イエス様ではなかったのです。

その洗礼ヨハネは見事に荒野における修道生活によって信仰基台を復帰します。その信仰基台を復帰した洗礼ヨハネにイスラエルの民も彼こそはメシヤではないかというように従います。

ここで、メシヤのための基台が整ったので、メシヤとしてイエス様が降臨されたというのです。しかも、カイン圏の基盤も国家レベルに達していたので、版図的にも問題はなかったというのです。

それであるがゆえに世界的カナン復帰路程は問題なく出発することができたというのです。ですが、ここで愛の減少感の問題が登場します。

洗礼ヨハネはイスラエル民族を天使世界とすると、まさに愛の基となる天使長的な立場に立っています。人々は彼らから神様の愛を受けていたのです。そのような天使長の前に人間のアダムが登場したようにイエス様が降臨されたのです。ここに墮落性が生じます。天使長はアダムを自分よりも神様に近い、侍るべき人であることを知りつつも、自らの位置を悟ることができませんでした。この墮落性が洗礼ヨハネにおいても起きてしまったのではないのでしょうか。

このように、第一次世界的カナン復帰路程の信仰基台を復帰したのはイエス様ではありません。洗礼ヨハネだということです。

これは真の御父母様においても同じです。真の御父母様は世界的復帰路程を出発する際の信仰基台を立てる中心人物ではなかったというのです。メシヤのための基台の上に降臨されたメシヤだったというのです。

ですので、御父母様がすべての摂理の中心人物ではないのです。皆様が洗礼ヨハネの立場だとしたら、皆様こそがメシヤのための基台を準備する中心人物だということです。もし、地位や名声故に多くの人々があなたを尊敬し、崇拝しているとするならば、まさに洗礼ヨハネだということです。そのような方は自らの地位故に信仰を継続することが難しくなる試練に直面するというのです。

皆様は大丈夫ですか。伝道対象者の前に私たちは洗礼ヨハネでもあります。イエス様の立場ではないのです。そのことを原理は語っています。

【御言】

第一次世界的カナン復帰路程 実体基台

・そうして「墮落性を脱ぐための世界的な蕩滅条件」を立てるに当たっての、アベルの立場をも確立することができました。

・神様は、洗礼ヨハネを中心とする奇跡を見せてくださり、ユダヤ人たちが彼を信ずるように仕向けることによって、「出発のための摂理」を成就しようとなさったのです。

・ユダヤ人たちは、洗礼ヨハネをメシヤのように信じ、従う立場にいたので、世界的カナン復帰路程を出発することができました。

【感想】

第一次世界的カナン復帰路程においては、イスラエルの民は洗礼ヨハネをメシヤのように信じており、彼を中心に神様も奇跡を見せられ、これをもって、カイン圏のイスラエル民族は洗礼ヨハネと一体となり、実体基台も準備できたというのです。

ですが、蕩滅条件において最も重要な期間というものがあったのです。モーセ路程においても、

イスラエルの民はモーセの奇跡を通じて、モーセを信じるようになり、荒野に出発することができたのですが、その一体化がある一定の期間、継続することができなかったのです。

洗礼ヨハネにおいても、荒野に出発することができるのですが、今回は、メシヤとして来られたイエス様を不信するという事態が生じてしまったのです。

神様に忠誠を尽くし、来たるべき人はこの人であると神様から示されていたにもかかわらず、世俗の噂や自分の保身を図ったが故に、洗礼ヨハネはイエス様を疑うようになり、さらに彼に従うイスラエル民族がイエス様の前に出る道をふさいでしまったのです。

これと同じようなことが韓半島でも起こっています。つまり摂理歴史において、御父母様に対して洗礼ヨハネ的な人物が登場しており、その人物が御父母様を受け入れて、摂理を進めていけば、世界摂理はもっと短縮されていたし、御父母様が荒野に追い出されることはなかったといえます。

ところが、その人物が御父母様を受け入れることができなくて、韓民族とキリスト教が御父母様の前に出る道を完全にふさいでしまったという歴史を刻んでいるのです。

ですので、私たちが韓国を見るときに、それは御父母様が誕生された祖国ではありますが、それは同時に、イエス様を迫害し十字架に付けたユダヤ教と同じような立場にも立っているということです。

ただ、御父母様は死ぬことはなかったので、何度もその不信仰を取りなされ、自分に従う食口で基盤を形成して摂理を進められていますが、韓国のクリスチャンが御父母様を受け入れずに霊界にいれば、イエス様を十字架につけたユダヤ教と同じような霊界に行くというのは推測できることです。

ですので、そのような悲劇を回避するためにも、私たちは懸命に南北統一を推進し、韓半島を御父母様の誕生された主の祖国として復帰されようとしているのだと思います。

ですので、洗礼ヨハネの立場の人は使命が大きいですが、その使命を失敗すると、私たち一般の食口よりも悲惨な霊界に行かれてしまうという諸刃の剣の使命を担われているということです。

皆様はいかがでしょう。対象者のリストを眺めながら、対象者の洗礼ヨハネとなっている自分がもし伝えるべきことを伝えなければ、対象者は讒訴するというのです。皆様はどれだけの影響力をお持ちですか。その基盤が大きければ大きいほど使命も大きいですし、御父母様を不信したときの反動も大きいということなのです。

第一次的世界的カナン復帰路程においては、無事に出発することができていたのです。この事実を知らない人が意外と多いのです。皆様はいかがですか。

【御言】

第一次世界的カナン復帰路程の失敗

・ところが、洗礼ヨハネはイエス様をメシヤとして証したのにもかかわらず、彼を疑うようになり、自分がエリヤとして来たのにもかかわらず、それを否認して、ユダヤ人たちがイエス様の前に出ていく道をふさいだばかりでなく、彼らがイエス様に逆らうような立場にまで押しやったのです。

・これによって洗礼ヨハネは、アベルの位置を離れたために、「実体基台」を立てることができなくなりました。したがって、「メシヤのための基台」を造成することができず、第一次世界的カナン復帰路程は失敗に終わることになり、モーセのときと同じく、二次から三次まで延長されました。

【感想】

洗礼ヨハネが信仰基台もしっかりと立てて、実体基台の準備もできていたのです。それをもって第一次世界的カナン復帰路程は出発することができたのですが、期間を全うすることができなかったのです。これはモーセ路程においてもそうでした。

洗礼ヨハネはイエス様をメシヤとして証したのです。それをもってキリスト教では洗礼ヨハネを偉大な人物であると評価することもあるようですが、原理では彼の失敗を明確に説明しています。

洗礼ヨハネはイエス様を疑うだけであればまだ良かったのですが、墮落性本性を誘発して、ユダ

ヤ人がイエス様の前に出る道をふさぐばかりでなく、彼らがイエス様に逆らうようになる立場まで押しやってしまったのです。

韓国においても、キリスト教においても、同じ現象が御父母様に対して起こりました。洗礼ヨハネとして立てられた人物が失敗をしたために、単に御父母様を受け入れないという個人的なレベルにとどまらず、韓国、キリスト教が御父母様に反対するような立場に導いてしまったという経緯があるのです。

これにより、洗礼ヨハネはアベルの位置を離れてしまい、第一次世界的カナン復帰路程は失敗に終わります。

アベルの難しさとは、信仰基台を立てた中においても、アベルの位置を離れてはいけないということが求められるのです。それであるがゆえに、御父母様を絶対信仰されて、疑う余地なく、揺るぎない確信を持って御父母様を信じている人たちがアベルでもあるのです。皆様は対象者を前にアベルとして揺れているようなことはありませんか。

【御言】

第二次世界的カナン復帰路程 信仰基台

・洗礼ヨハネが第一次路程のために立てた「信仰基台」はサタンの侵入を受けてしまいました。それゆえ、イエス様自身が洗礼ヨハネの使命を代理して、「信仰基台」を蕩滅復帰することにより、第二次世界的カナン復帰路程を出発するほかありませんでした。

・イエス様が荒野で40日間断食されながら、三大試練を受けて、サタンを分立されたのは、「信仰基台」を蕩滅復帰されるためでした。このような事情のために、ペテロに向かい、自分がメシヤであるという事実をユダヤ人たちに証してはならないと言われたのです(マタイ16:20)。

【感想】

洗礼ヨハネが失敗したために、イエス様自らが洗礼ヨハネの使命を代理して、信仰基台を復帰されたというのです。

真の御父母様も本来は統一教会の教祖として立つはずではなかったというのです。キリスト教における洗礼ヨハネが失敗したために、仕方なく、御父母様はキリスト教の基盤を自ら復帰されるために、統一教会を創立されたという経緯が、このイエス様の路程と完全にダブるのです。

ですので、キリスト教が御父母様を受け入れていれば、摂理はもっと短い期間に達成されていたし、私たちも統一教会という教会の教会員ではなかったというのです。

ところが、キリスト教が受け入れることができなかったために、御父母様は荒野に追い出され、自らが洗礼ヨハネの使命を代理して、キリスト教のような基盤を自ら復帰されたというのです。

その経緯があるために、御父母様が洗礼ヨハネの使命を代理されている間においては、真の父母の宣布ができなかったという理由もこの原理で明確に理解できるというのです。

御父母様は本来は試練を受けるべきお方ではなかったのです。ですので、御父母様が苦労されたから屈服するというのは、正しいのかというと少し疑問があります。もちろん、世の中のすべての苦労を知り尽くされた方として屈服するという人は多いかもしれません。

ですが、御父母様は苦労されるためにこの地に降臨されたわけではありません。それは、イエス様が十字架にかかるために降臨されたと信じているキリスト教と通じる発想だと思います。

そうではありません。立てられた者が使命を果たしていれば、御父母様は苦労をする必要がなかったというのです。御父母様にしなくてもいい苦労をさせてしまったのは、洗礼ヨハネの失敗であり、私たちの不信仰の故なのです。

ですから、真の御父母様がメシヤ宣布をすることができなかった背景というものに、ここで紹介するように洗礼ヨハネの使命を代理していたという事情があることを忘れてはならないと思います。

ここでも明確になるのです。イエス様は十字架にかかるために降臨されたわけではありません。ましてやサタンに試練されるために降臨されたのでもありません。第一次の路程が失敗したために、イ

イエスはサタンの試練を受けられたのです。その原因は洗礼ヨハネにあり、ユダヤ民族の不信仰に起因するのです。

私たちも使命をしっかりと果たしておかないと、御父母様にしなくてもいい苦勞を背負わせてしまうというのです。皆様はそのような使命を担っておられるのです。

【御言】

第二次世界的カナン復帰路程 実体基台

- ・第二次世界的カナン復帰路程においてイエスは、三大恩賜と十戒の実体であられるので、自身がみ言と奇跡とをもって、「出発のための摂理」をされました。
- ・カインの立場におかれていたユダヤ民族が、イエスを信じ、仕え、従ったならば、「実体基台」を復帰するようになっていました。
- ・しかし、ユダヤ民族の不信によって、イエスは十字架の死の道を行くようになり、「実体基台」はつくり得なくなりました。したがって「メシヤのための基台」も造成することができなくなったために、第二次世界的カナン復帰路程も、失敗に終わってしまったのです。

【感想】

イエスは、かつてモーセが三大奇跡と十災禍をもってイスラエル民族を導き出したように、奇跡をもってユダヤの民を信じさせ、出発の摂理をなさろうとしていたのが分かります。モーセの時は奇跡をもってイスラエルの民はモーセを信じたのですが、ユダヤの民にイエスが奇跡を行っても信じることができず、イエス様に従うどころか、悪霊の頭だとして、十字架につけてしまうのです。

このように、イエス様はモーセの路程を典型路程としてそれをなぞるように歩まれたのですが、イスラエルの民はイエス様に従うことができなかったのです。

このようにして、第二次の世界的カナン復帰路程も失敗に終わります。これを蕩滅するために、私たちは御父母様をしっかりと信じ、御父母様に従うことをもって、カイン圏としてメシヤを迎えるための基台を備える必要があるのです。

ですので、キリスト教が御父母様に従えなかったことを蕩滅するために、今の私たちの基盤は、今日のキリスト教の基盤を凌駕するものになるように伝道を進めないといけないという事情もここから見えてきます。

真の御父母様は私たちの信じられないような実績を立てられ、世界摂理を進めてこられました。これはある種の奇跡的な実績かもしれませんが、そのような奇跡を目撃した私たちはどうなのかというのです。その奇跡をもって示された御父母様の愛情に応えて、従ってゆけるのかというのです。

このようなイエス様の失敗をご存じの真のお父様は奇跡を起こす権能を持っておられたとしても、そのような権能を行使することはなかったというのです。

奇跡信仰は瞬間的な一時的出来事故に、継続性に問題があるのです。御父母様は奇跡ではなく永遠性のある真の愛をもって、私たちが自然と従えるように導かれたのだと思います。

【御言】

第三次世界的カナン復帰路程 靈的な信仰基台

- ・イエス様が十字架によってその肉身をサタンに引き渡したのち、靈的洗礼ヨハネの使命者としての立場から、40 日復活期間をもってサタン分立の靈的基台を立てました。
- ・したがって、第三次世界的カナン復帰の靈的路程のための、「靈的な信仰基台」を復帰されました。

【感想】

イエス様の路程においては、イエス様が靈界に行かれてからも摂理は続いていることを紹介します。復帰摂理は三次まで延長することができますので、イエス様はそのこともご存じであったので、靈

界で第三次の摂理を出発することを決意されて、十字架に臨まれたのではないのでしょうか。

そのことをご存じだったので、十字架にかかることを妨げようとしたペテロを叱責したのであって、決して十字架にかかるのが最終的なゴールではなかったのです。

キリスト教の今日の発展は、イエス様の十字架の結果なのではなく、霊界に行かれた後の第三次カナン復帰摂理の勝利によるものなのです。イエス様が復活されなければ、今日のキリスト教はこのようには決まっていなかったということは、聖書を見れば明白になると思います。

イエス様は復活された後、霧散した信徒たちを再び呼び集められ、洗礼ヨハネの使命を再び成し遂げられるようになります。そうして、復活された霊的なイエス様は、様々な苦難を経て40日という数的期間を忠誠と信仰で全うされ、信仰基台を復帰されます。

このようなことは私たちにも当てはまることなのです。御父母様を信奉して地上の摂理を責任分担を担いますが、与えられた責任を全うすることができなければ、霊界に行った後にもその摂理を完遂するために邁進しなければならないというのです。

今、神氏族的メシヤとして、伝道の使命を皆様も与えられていると思いますけど、これが宿命として与えられたのであれば、地上の生活で成し遂げることができなければ霊界に行った後にもその摂理を完遂するために精誠を捧げなければならないというのです。

ですが、霊界に行ってからではあまりにも摂理が大変なので、真の御父母様は地上にいる間に完遂しなさいと私たちをプッシュされます。これは、このような摂理的な事情を知った上の愛なのです。どうでしょう。皆様はこのような霊界における摂理が残っていることをご存じでしたか。

【御言】

第三次世界的カナン復帰路程 霊的な実体基台

- ・復活されたイエス様は、四散していた弟子たちを呼び集められて、自身が石板と幕屋と契約の箱との霊的な実体となられ、弟子たちに奇跡の権威を授けられることによって、「出発のための摂理」をされました。

- ・ここにおいて、カインの立場に立っていた信徒たちは、復活されたイエス様を信じ、仕え、従って、「墮落性を脱ぐための霊的な蕩滅条件」を立てることにより、「霊的な実体基台」を復帰することができました。

【感想】

復活されたイエス様は四散した弟子たちを呼び集められます。そして、自らが石板と幕屋と契約の箱の霊的な実体となられて、出発のための摂理をされたのです。ここに、イエス様はまさにモーセの路程をなぞっていることがお分かりになると思います。

第三次路程はこのようにして、無事に出発のための摂理を成就し、いよいよ実体基台が立てられるのかどうかということが問われるようになります。

モーセの荒野路程においては、出発の摂理だけではなく、荒野においても一定の蕩滅期間を変わらぬ忠誠と信仰で過ごさなければなりませんでしたが、イエス様の第三次の霊的な実体基台は無事に成就されます。

これをもって、イエス様はメシヤのための基台を復帰することができるようになります。ですが、この使命はイエス様の本来の使命ではないのです。洗礼ヨハネが失敗した使命を蕩滅したにすぎないのです。

これは、御父母様の路程においても言えることなのです。御父母様が荒野に追い出され、洗礼ヨハネの使命を代理して果たしている間はメシヤ宣布はできなかったのです。それであるがゆえに、洗礼ヨハネの使命が完遂され、メシヤのための基台が整った時点で初めて真の父母宣布ができたというのが摂理歴史に見られる原理的な事情だと思います。

ですので、私たちは御父母様の前に常にメシヤのための基台を準備しておくべきであり、それがキリスト教に匹敵する基盤だということです。そのような基盤を御父母様が本来復帰するものではな

かったというのです。洗礼ヨハネが失敗したがゆえに、メシヤである御父母様が代理に洗礼ヨハネの使命を果たされたというのです。

ですので、基盤を整える使命はどこまでも私たちの使命なのです。その使命を御父母様に背負わせてしまうということは、私たちが失敗したことを意味するのであり、御父母様はそのような事態を避けるためにも日々、私たちに責任を全うするように指導されています。

皆様はそのような摂理における原理的な事情というものが見えていますか。御父母様は本当に原理的に摂理を進められます。ただの思いつきでは決して摂理されないのが御父母様です。

【御言】

メシヤのための霊的な基台

- ・「霊的な実体基台」を造成し、それによって「メシヤのための霊的な基台」を復帰しました。
- ・イエス様は、この基台の上で、霊的な洗礼ヨハネ使命者の立場から、霊的なメシヤの立場を確立し、聖霊を復帰することによって、霊的な真の父母となり、重生の摂理をされるようになりました。
- ・すなわち、使徒行伝2章1節から4節に記録されているように、五旬節に聖霊が降臨されてのち、復活されたイエス様は霊的な真の父として、霊的な真の母であられる聖霊と一つとなって、霊的重生の摂理をされて、霊的救いの摂理だけを成就するようになりました。

【感想】

イエス様の路程において、霊的な実体基台が整った時点で、霊的なメシヤのための基台が準備され、その基台の上に神様はメシヤを送ることができるということになります。そのメシヤのための基台の上に、イエス様は初めて洗礼ヨハネの立場から真の父母の立場に上げられたというのです。

これは、真の御父母様においても同様で、洗礼ヨハネとして立てられた人物が失敗することで荒野に追い出され、自らが洗礼ヨハネの使命を代理している間においては、真の父母を宣布できなかったという事情がここでも見えてきます。

ですが、いったんメシヤのための基台が整うと、真の御父母様はメシヤとしての本来の使命を果たすことができるようになり、そこから重生の摂理が始まったと言えるのです。

イエス様も霊的なメシヤとしての位置に上がられてから、相対として聖霊と一つになられ、霊的真の父母となられたのです。その真の父母によって、イエス様を信じるクリスチャンは生み変えられるようになり、霊的重生の恩恵を受けるようになったというのです。

ですので、私たちはイエス様が失敗したとか、何もできなかったとは言っていない。その霊的重生の恩恵は他の宗教とは一線を画しており、これまでキリスト教が世界をリードしてきた理由でもあります。

私たちは真の御父母様から祝福を受け、霊肉共に重生できる恩恵にあずかっています。ですが、この恩恵は真の御父母様が洗礼ヨハネの使命を完遂されて、メシヤの位置に上がられてからのことなのです。洗礼ヨハネの使命を果たす前に真の御父母様が真の父母宣布をしたとしたら、カイン圏に殺される危険もあったと言います。その基盤というのも数が問題となり、その数の基盤を整える上でも伝道が重要な責任分担になっています。

イエス様も霊的にではありますけど真の父母になられたのです。今の私たちは実体を持たれた真の父母に侍っているのですけど。皆様はいかがですか。そのような背景を見て、御父母様に侍っていますか。

【御言】

霊的カナン復帰

- ・キリスト教信徒たちは「メシヤのための霊的基台」の上で霊的メシヤとして立たせられたイエス様を信じ侍ることによって、霊的カナン復帰だけを完成するようになりました。
- ・それゆえに、信徒たちの肉身は、十字架によってサタンの侵入を受けたイエス様の肉身と同じ立

場に立つようになり、原罪は依然として元のままだに残っているので(ロマ7:25)、信徒たちも、キリスト再臨のための、サタン再分立の路程を歩まなければならなくなりました。

【感想】

キリスト教徒の方々は霊的メシヤとして立たれたイエス様に侍り信じることで、霊的なカナンに復帰されるという恩恵を受けてきました。つまりは、イエス様を信じることで、霊的に樂園にまで復帰されるに至り、地獄のような苦しみからは解放されてきたという歴史があります。

ですが、イエス様は十字架によってその肉身はサタンの侵入を受けてしまいます。つまり、イエス様と一体化しても、その肉体においてはサタンの侵入を許し、さらに原罪も解決することができませんでしたので、霊的に救われても地上世界においてサタンが所有権を主張するということが展開されてきたというのです。

このような事情があるために、イエス様は再臨されて、人類を霊肉共に完全に救い、原罪のない人類による地上天国を建設しなければならなかったのです。

ですので、クリスチャンは肉身から侵入してくるサタンを分立するために常に祈りなさいという指導をされており、肉欲に走った生活をするとう地獄のような人生に転落するということも起きていたのです。

私たちは真の御父母様から祝福を賜り、血統転換をすることで、サタンは血統的な所有権を主張することができなくなるのです。ですが、血統が転換するためには、真の御父母様と真の愛によって一体化する必要がある、単に儀式的に聖酒を飲んだからと言って、救われるという意味ではありません。もちろん、儀式的な価値はありますが、聖酒だけ飲んで教会とは関係のない生活をしていれば、その生活から入ってくるサタンを防衛することはできず、サタンが血統以外の条件をもって所有権を主張するということは往々にしてあります。

ここで紹介されているようにキリスト教徒が待ち望んだイエス様の再臨が真の御父母様であり、その御父母様を迎えるためにクリスチャンはサタン分立の苦難を経てきたというのです。

【御言】

再臨主を中心とする実体的カナン復帰路程

- ・イエス様は、霊的カナン復帰路程を、再臨されてから実体路程として歩まれ、地上天国をつくらなければなりません。
- ・再臨主は、実体の人間として、地上に生まれなければなりません。
- ・再臨主は初臨のときのように、復帰摂理の目的を完遂できないで、亡くなられるということはありません。なぜなら、摂理は、アダムからイエス様を経て三度目である再臨のときには、必ず、その摂理が成就されるようになっているからです。
- ・その上、イエス様以後 2000 年間の霊的な復帰摂理によって、彼の為の社会を造成するために、民主主義時代をつくっておかれたからです。

【感想】

イエス様が再臨されてとありますが、それが真の御父母様の路程になります。まず、御父母様は地上に実体の人間として誕生されているということなのです。イエス様の時の復活のように、霊的に現れるということはありません。

ですから、イエス様の再臨ということは、イエス様の霊が入ったり、憑依して役事を行うということではありません。どこまでも、再臨主として肉体を持って誕生されるということなのです。

それから、真の御父母様は復帰摂理の使命を完遂されているというのです。真のお父様が聖和され、地上にはまだ天国ができていないことを指して、御父母様は使命を完結することなく霊界に行かれたと思われる人もいるかもしれません。ですが、モーセ路程にもあるように、モーセはカナンの福地に入ること無く霊界に行きましたが、荒野で生まれたイスラエル民族がヨシュアを中心として

カナンに入ったように、真のお父様の使命は真のお母様に継承され、今まさにカナンの福地に入ろうとしています。

真のお父様はすべてを成したと語られて霊界に行かれているように、復帰摂理の目的は成就されているのです。

そして、民主主義世界がメシヤのための基盤だったということです。真の御父母様は民主主義世界を中心にその活動を展開されています。ただ、洗礼ヨハネ的な人物の失敗によって、神様の準備されたキリスト教の基盤が無為に帰ってしまったのは真のお父様も悲しかったことだと思います。

真のお父様は聖和されましたが、真のお母様が地上に残られており、真の父母が霊界に行かれたわけではありません。その意味において、この部分をおかしいと誤解しないことを私は祈りたいと思います。

【御言】

血統的因縁からみた神様と人間との関係

- ・神様の復帰摂理の目的は、墮落人間を復帰して、神様の直系の血統的子女を立てようとするところにあります。
- ・ノアのときには、ノアが忠誠を尽くした基台があったので、僕の僕としての立場に立つことができ、神様と間接的な関係を結ぶことができました。
- ・アブラハムのときは、選民を立てたので、僕の立場に復帰することができました。
- ・イエス様が来られてのち、初めて、養子の立場にまで復帰されました。
- ・それゆえに、イエス様は、すべての人類を神様の血統を受けた直系の子女として復帰するために、再臨されなければならないのです。

【感想】

神様の復帰摂理の目的は墮落人間を復帰して、神様の直系の血統的な子女にすることにあるということです。そのような意味において、血統転換式をされて、多くの祝福家庭を生み出し、墮落した血統の私たちを神様の直系の子女へと復帰されたことは、前回も触れましたが神様の復帰摂理の目的を成就したことになります。

ですが、地上にはまだまだ墮落したままの血統の子女が大勢残っています。このような子女をすべて祝福して血統転換をするために、私たちは日々伝道を推進しており、祝福の行事も真のお母様に継承されて、挙行されているということです。

アブラハムの時には僕の僕から僕の位置に復帰されたのですが、イエス様の時代においては、養子の立場にまで復帰されたということです。養子と実子では血統が異なります。養子も神様を父と呼ぶことはできますが、神様の血統を受けていないために、サタンが血統を理由に所有権を主張することを防ぐ手立てが無かったということです。

それであるがゆえに、血統的にも完全に人類を救われるためにイエス様は再臨されなければならなかったということです。真の御父母様の執り行われる祝福式とは単なる結婚式ではないのです。そこに血統を転換する重要な儀式が含まれているのが大きなポイントなのです。そして、神様の人類復帰の一点もこのポイントに焦点が当てられているのです。

血統が完全に転換されるためには私たちは真の御父母様に接ぎ木されなければなりません。接ぎ木されるためには真の愛によって心情的に一体化しなければなりません。ですので、儀式的に祝福を受けるだけでは不十分だということです。

祝福を受けられた皆様は血統転換の路程を歩まれているのです。それがまさに神様が人類に願われてきたことなのです。その血統転換の伝統を成してゆかれたので、真のお父様は摂理を成就されたという立場でもあるのです。

【御言】

・再臨のイエス様は、み言を中心とする「出発のための摂理」によって、「メシヤのための基台」を実体的に造成し、その基台の上で、すべての人類を霊肉併せて接がせることにより、彼らが原罪を脱いで、神様の血統を受けた直系の子女として復帰できるようにしなければなりません。

・そして「メシヤのための基台」を、実体的に家庭的なものから出発して、氏族的、民族的、国家的、世界的、天宙的なものとして復帰され、その基台の上に、天国を成就するところまで行かなければなりません。

【感想】

真の御父母様はメシヤのための基台を実体的に造成され、真の父母として宣布され、祝福行事を通して人類の血統転換を進められています。そして、この摂理の最終的なゴールとは全人類が原罪を脱いで、神様の血統を受けた直系の子女として復帰されるところまで行くのです。

今もその摂理は進められており、伝道摂理もその目的は対象者が原罪を脱いで神様の直系の子女として復帰されることにあります。

そのことを考える時、自分が祝福を受けて原罪を脱げたので嬉しいという段階にとどまっているのは、全体的な摂理にそぐわないということもお分かりになると思います。私たちは多くの対象者を祝福に導くために先駆けて復帰されたのです。その祝福を独り占めしようという人は、逆に福を失うという結果になるのです。

私たちの唱える家庭盟誓においても、天の祝福を周辺に連結するとあります。ここに血統転換の恩恵を知人や友人、周辺の人々に拡大することが私たちの責任分担として与えられているのです。

私たちは、福を受けませんかと伝道しているのです。ですので、その伝道の申し出を断るということは、天の福はいりませんということに同意したことになり、受けるべき福を拒否したのですから、その人たちが私たちをうらやましがるというのは道理に合わないのです。

私たちはメシヤのための基台を随時拡大すべく日々伝道活動に邁進しています。その理由とも言える内容がここでも紹介されているように、全体摂理として全人類を神様の直系の子女として復帰するという内容があるからなのです。そのような原理的な理由を明確にして歩むべきなのであり、教会でアベルから命令されたとか、頼まれたとかそういう次元ではないのです。

原理で明確に語られているように、全人類を祝福するために私たちは伝道するのです。福を与えるために伝道をしているのです。ですので、私たちが伝道しなければ、対象者がなぜ福をくれなかったのですかと讒訴されるのです。

皆様においては伝道の目的とゴールは明確ですか。原理はこのようにしっかりと理由とゴールを提示しているのです。

【御言】

第3章 摂理歴史の各時代とその年数の形成

第1節 摂理的同時性の時代

・ある時代がその前の時代の歴史路程とほとんど同じ様相をもって反復されるとき、そのような時代を摂理的同時性の時代といいます。この現象は本来、神様の蕩滅復帰摂理に起因しています。

・同時性の時代が反復される理由は、「メシヤのための基台」を復帰しようとする摂理が、反復されるからです。

・したがって、同時性の時代を形成する原因は、

① 第一に、「信仰基台」を復帰するための3つの条件、すなわち、中心人物と、条件物と、数理的な期間などです。

② 第二は、「実体基台」を復帰するための「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」です。

【感想】

この摂理的同時性の問題は全体的な摂理歴史にのみ適用されるものではありません。皆様の家庭、個人の摂理においても適用される法則性なのです。

ですので、全体的なことなので自分のこと、自分の家庭のこととは関係がないと思っているとんでもないということです。これは私のことであり、貴方のことなのです。

まず、摂理を知る前には摂理というものを知りませんが、自分の人生を振り返って、同じような試練、同じような経験というものが繰り返されていたことに気づきませんか。

私たちの個人においても真の御父母様を迎える基台、メシヤを迎えるための基台が準備されるまでは、何度も摂理が延長され、同じような境遇に自分が置かれるということが繰り返されてきたということです。

そこで、メシヤのための基台を造成するのに失敗するたびに摂理は延長され、再び同じ摂理がめぐってくるということを繰り返しているということです。

ですので、この負の連鎖を断ち切るのは簡単なことなのです。復帰原理が分かれば明確なように、メシヤのための基台が準備できれば、メシヤが降臨されて、その負の連鎖は断ち切られるのです。これは仏教における輪廻転生においても同じ事がいます。何度も使命を継承して世代を経て同じような境遇を通過するというのは、メシヤと出会い、メシヤを迎え入れることによって解脱できるという明確な理論でもあるのです。

個人的な摂理が何度も延長され、世代を超えて使命が継承されることを仏教では輪廻と呼びます。ですので、私たちはメシヤのための基台を準備した上で真の御父母様を迎えることができれば、輪廻の連鎖からも抜け出ることができるのです。それは継承されてきた使命を完遂するためなのです。

このことが明確であるが故に、私たちが御父母様と正しく出会うということがいかに重要かということが分かるのです。単なる有名人に会うというレベルではないのです。

ここにもあるように、メシヤのための基台を準備した上で御父母様と出会い、御父母様を迎え入れることができれば、摂理はもう延長されないのです。そこで、新しい使命が始まるので、これまでの人生とは全く異なる人生を出発することになるのです。

ですので、国家がメシヤを受け入れれば、その国家のつづってきた負の歴史が一気に清算され、新しい国運をもった新しい国家歴史が出発するというのです。それであるがゆえに、日本という国家においても、国家レベルで御父母様を受け入れる基台を準備する必要がある、その基台の上で御父母様を迎えることができれば、日本の国運は上昇することになり、発展するしかないという歴史を綴るのです。

伝道はそのような救国運動の一環でもあり、個人においては人生を転換するメシヤに出会うことを導くことに相当するのです。それができなければ、歴史はその歴史の使命を成就するまで何度も繰り返されるということなのです。

【御言】

第2節 復帰基台摂理時代の代数とその年数の形成

復帰摂理はなぜ延長されるか？

- ・予定論によれば、神様のみ旨は、絶対的なものとして予定され、摂理なさるので、一度立てられたみ旨は必ず成就されます。
- ・しかし、み旨成就の可否は、相対的であって、神様の責任分担とその人物の責任分担とが一体となって初めて成就されます。
- ・したがって、その使命を担当した人物が、責任分担を全部果たさないときには、時代を変えて他の人物をその代わりに立てても、必ず、そのみ旨を成就する摂理をなさるのです。このようにして復帰摂理は延長されていきます。

【感想】

予定論が分かれると私たちの人生も見方が変わってきます。つまり、予定論というのは全体的な摂理にのみ適用されるのではなく、私たちの個人的な人生においても適用されるということです。つまり、私たちは神様の直系の子女に復帰されるために、神様によって摂理されているということなのです。

人生における流れというものが、このゴールに向かって流れているということを理解すると、この流れに乗るのか、それとも流れに逆らうのかということで、人生の幸不幸が決定されてゆきます。

神様の摂理は絶対的です。私たちに与えられる責任分担と呼ばれる使命も絶対的なのです。ですが、その使命を完遂するかどうかということは私たち人間の5%にかかっています。

したがって、私たちが使命を完遂できなければ、その使命は後孫に継承され、何代を経ても必ず成就されるようになっているということです。

ですので、私たちの人生において、どんなにあがいたとしても、結局は神様の下に復帰されるようになっているということです。そのために、時に苦難を与えられ、時に喜びを与えられ、私たちは摂理の中で一つのゴールに向かって生きているということなのです。

ですので、自分の人生において振り返ってみると、何度か同じ事が繰り返されていることに気づくと思いますが、これも神様の摂理が何度も延長されたことを物語っているのです。

ですので、どんなに迫害する人がいたとしても、その子女、後孫においては、この道に来るべくして来るようになっているという道理もここから理解できるのです。

ですので、私たちは与えられた責任分担を全うするしかありません。神様の摂理は絶対なので、成就できなかったとしても、何度でも摂理は延長され、必ず成就されるようになるということです。

では、摂理は早く成就される方が良いですか？ 遅くても良いですか？ 少しでも早いほうが良いという道理から、摂理は急がれているのです。それは全体に限らず、個人や家庭においてもそうだと感じます。

【御言】

いかに延長されるか？

- ・創造原理によれば、神様は三数的存在であられるので、神様に似たすべての被造物は、その存在様相、運動、成長過程など、すべてが三数過程を通じて現れます。

- ・ゆえに、この復帰摂理が延長されるときにも、創造原理により、三段階までは延長され得ます。

【感想】

神様は数理的な方でもあられます。摂理を進めるにおいても、感情的に無秩序に進められるのではありません。きちんと、法則性に従って、数理性をもって摂理をされます。

その数理性をよく理解すると、神様の摂理は三段階まで延長されるということです。神様は三次路程において、必ず勝利されるようにされているということです。

ここで予定論をひもとくと、摂理の成就是どこまでも立てられた中心人物の5%によると言います。3次目の路程において中心人物が失敗したらどうするのかと。

その時にはにおいて、その中心人物に担われた使命は、失敗に終わりますが、その使命を成就するために捧げた精誠の土台は、次の使命者を立てる条件となるということは、以前にも説明したと思います。

当然、神様の予定は絶対的です。3次目で勝利できなかったとしても、神様の立てられた摂理は必ず成就されるために、新しい使命者を立てて準備されます。

ですので、この部分だけを見て、3次目で失敗すれば、神様は摂理を完遂できないとは思わないようにして下さい。神様の予定は絶対的なので、中心人物を変えてでも成就されるようになっています。

ただ、復帰歴史を見てみるとそのほとんどが3次目で勝利されて終わっており、第3アダムとして

降臨された御父母様もすべてを成したとして霊界に行かれています。

教会における摂理においても延長されたとしても3次目が勝負の時なのです。単なる数字だけの問題ではないのです。人間の成長が3数によって成されていることに起因するためなのです。

【御言】

縦的な蕩滅条件と横的な蕩滅復帰

- ・み旨を担当した中心人物は、自分が立たせられるまでの摂理路程において、自分と同じ使命を担当した人物たちが立てようとしたすべての蕩滅条件を、自分を中心として、一時に蕩滅復帰しなければなりません。
- ・復帰摂理路程において、歴史的に加重されてきた条件を、縦的な蕩滅条件といい、このようなすべての条件を、ある特定の使命者を中心として一時に蕩滅復帰することを、横的な蕩滅復帰といいます。
- ・復帰摂理を担当した人物は、単に一個人としてだけではなく、彼に先立って、同一の使命を負ってきたすべての預言者、烈士たちの再現体であり、彼らの歴史的な結実体であるということを知ることができます。

【感想】

御旨を担当した中心人物とは誰でしょうか。私たちのことなのです。摂理において責任分担を与えられ、使命を与えられている私たちのことなのです。そして、先日も説明してきましたが、自分と同じ使命を担ってきた過去の歴史的な人物の蕩滅条件を私たちが一気に復帰しなければならないというのです。ですので、使命の大きい人は大変なのです。それは自分の個人的な蕩滅ばかりではなく、過去の同じ使命を担った人の蕩滅も背負うからなのです。

家系において、時代の流れと共に代を重ねることで加重されてきた蕩滅条件を縦的な蕩滅条件と言います。それをメシヤと出会った私たちが横的に一気に蕩滅するというのです。ですので、今の家庭の状態を見る時に、家庭の過去である家系図を見なければ解けない内容があるというのです。家族を見てみると、何代か前のご先祖様と同じような生活をしているという人がいるのです。

ですので、教会で家系図を解くことを進めるのは、このようにメシヤと出会うことによって縦的な蕩滅条件を横的に一気に立てることになるので、何をすべきかは当事者だけを見ていては分からないということがあるのです。

ですので、私たちは氏族の連綿と綴られてきた使命の結実体であり、先祖代々受け継がれてきた使命を完遂するために今、私たちは御旨に同参しているということなのです。

入籍された皆様は氏族のメシヤなのです。歴史的に継承されてきた使命を完遂すべく、家庭ではなく、家系の上に立てられたメシヤなのです。ですので、地上の氏族ばかりではなく、霊界にいる多くの氏族を伝道し、救済する使命が私たちにはあるというのです。清平摂理はその一環だと思います。

ですので、この道に来ると一遍に蕩滅するために、考えられない苦勞をすることもあるというのです。皆様は大丈夫ですか。

【御言】

縦からなる横的な蕩滅復帰

- ・アブラハムのときは、「メシヤのための家庭的な基台」を復帰するための摂理において、第三次に該当するときでありました。したがって、必ずそのみ旨を成し遂げなければならない原理的な条件のもとにあったのです。
- ・しかし、アブラハムが、「象徴献祭」に失敗したので、アブラハムを中心とするみ旨は、縦的に、イサクとヤコブの三代に延長され、み旨を中心として、一代で横的に蕩滅復帰したのと同じ立場に立たせたので、これを、縦からなる横的な蕩滅復帰といいます。

【感想】

摂理歴史を見てみるとアブラハムは第三次の路程になりますので、神様の予定では神様の摂理が成就されるはずでした。ところがアブラハムは象徴献祭に失敗し、その使命はイサクからヤコブにまで継承されました。

これは摂理の延長に関するとりえ方です。真のお父様は地上の摂理を完結されずに霊界に行かれた。それであるがゆえに、真のお父様はメシヤとしての使命を完遂できなかったと見るのは原理的に誤りがあるということです。

真のお父様は地上で摂理を完遂することができなかったとしても、その摂理は延長され、真のお母様に使命は継承され、真のお母様の勝利は真のお父様の勝利でもあるのです。

その理由が、ここで説明されている、縦からなら横的な蕩滅復帰なのです。真のお父様の使命は真のお母様に縦に使命が継承され、真のお母様が勝利されれば、真のお父様が横的に勝利されたのと同じ意味になるのです。

真の御父母様に従い、氏族メシヤとして立てられた私たちも、その使命を完遂することができなければ、心情的に一体化している人物にその使命は継承されるということです。そして、継承された人物が勝利すれば、それは私たちの勝利でもあるのです。

予定論にあるように立てられた人物が使命を完遂できなくても神様の予定は絶対的ですので、必然的に使命を継承する人物が立てば、その使命を担った勝利者は、かつて同じ使命を背負った人物の勝利をも成し遂げたことになります。

ですので、私たちも使命を完遂することができなければ、子女がその使命を継承し、子女がいなければ養子をもってでもその使命を継承して完遂しなければならないという事情もあるのです。

皆様はいかがですか。自分の代で、与えられた使命である摂理を完遂することはできますでしょうか。

【御言】

信仰基台を復帰するための数理的な蕩滅期間

- ・中心人物が、「信仰基台」を復帰するには、彼のための数理的な蕩滅期間を復帰しなければなりません。
- ・人間始祖は、数理的な成長期間である、12、4、21、40 数などによる「信仰基台」を立てて、創造目的を完成することによって、このような数の完成実体とならなければなりませんでした。
- ・しかし、彼らの堕落によりこれらすべてのものが、サタンの侵入を受けたので、復帰摂理歴史路程において、これらを蕩滅復帰する中心人物は、12、4、21、40 数などを復帰する数理的な蕩滅期間を立てなければなりません。

【感想】

よく教会から来る精誠条件には期間というものがあります。その期間はデタラメに設定されているわけではありません。原理的な数理性を背景にしっかりと原理数を持って定められています。

なぜ、期間が原理数なのかというのは、神様が数理性をもって摂理されるからなのです。これが人間の感情的な言動とは違う点なのです。ある種のコンピューターのようにきっちりと数理性を踏んで、摂理は展開されています。御父母様は自分の思いどおりに摂理を進められていると思われるかもしれませんが、それは大きな誤解です。

神様も原理による法則性と数理性を無視されて動かれることはありません。それは、御父母様においても同じです。ただ、従う者がその数理性を見えていないだけだということもあります。ですので、理数系の人々が摂理を真面目に見つめると、実に法則性に富んでおり、それゆえに、摂理のシミュレーションというのも可能なのです。つまり、事前にある程度の結果の予想が立つのが摂理であり、それであるがゆえに、真の御父母様は少しでも有効に法則性を活用しようということで、絶対

死守という言葉も登場するのです。

宗教と科学は相反するものと思われるかもしれませんが、神様は法則性と数理性の神様でもあります。原理という法則性をしっかりと把握すると、摂理が実に法則性にのっとって進められていることに気づかれると思います。

つまり、時代を読むことも、摂理の今後の進展を予想することも数理性を用いれば可能だということです。もちろん、神様の摂理だけではなく人間には責任分担という5%がありますので、この自由度が予想を難しくするのですが、天からくる摂理というのは、そのような自由度が少ないのです。

ですので、教会から来る精誠条件の期間というものを疎かにしてはならないのです。しっかりと与えられた期間において精誠を全うすると神体験のような神様の95%を受けることができるようになっていくというのです。そこにおいて自分なりという歩みがなかなか進展しない理由でもあります。

ですので、氏族のメシヤである私たちも中心人物として、原理的な数理的蕩滅期間を立てなければならない使命というものがあるのです。単に継続するだけではないのです。しっかりとした期間というものがあるのです。皆様はそのような摂理が見えておられますか。歴史を見れば、神様がいかに数理的に摂理を進められたのかが分かります。ですので、その法則性、数理性をもってして、私たちの学ぶ原理は科学的でもあるのです。

【御言】

第4章 摂理的同時性から見た復帰摂理時代と復帰摂理延長時代

・復帰摂理の目的は、「メシヤのための基台」を復帰しようとするところにあるので、その摂理が延長されるに従って、結局、「象徴献祭」と「実体献祭」を蕩滅復帰しようとした摂理の反復であったのです。

・アブラハムから始まったところの復帰摂理時代の摂理をなしてきた中心民族は、イスラエルの選民でした。したがって、イスラエル民族史は、この時代における史料となります。

・イエス様から始まった復帰摂理延長時代の摂理をなしてきた中心民族は、キリスト教信徒たちでした。したがって、キリスト教史が、この時代の史料となります。

・アブラハムの血統的な子孫を第一イスラエルというならば、新約時代のキリスト教信徒たちは、第二イスラエルとなるのです。

【感想】

ここに摂理的な同時性を見てゆきますが、そこで登場するのがイスラエル選民というものです。アブラハムの血統的な子孫を第一イスラエル、新約時代のキリスト教信徒たちが第二イスラエル、真の御父母様に侍る私たち食口が第三イスラエルになります。ですので、復帰摂理が延長された時代は幕を閉じ、摂理が完成されるのが今の時代なのですが、真の御父母様は荒野に追い出され、再度、摂理歴史を再蕩滅されたという摂理史を見れば、何故に私たちが第三イスラエルと呼ばれるのかもお分かりになると思います。

ですので、真の御父母様が摂理歴史を再蕩滅されたということは、摂理的な同時性を再度反復されたということであり、その摂理史を理解する上で、同時性をしっかりと理解しておくことはとても大切になってきます。

ですから、真の御父母様に侍る私たち食口の歴史が、今の時代の摂理的な中心史料となるのです。世界情勢は様々に動いていますけど、そのような大国の歴史も周辺歴史になるのです。そして、中心史料とは私たちの歩みとなるのがこれからの歴史が証明するのです。

ですので、選民というのは中心民族となるということを意味しており、私たちも成約歴史のその一員なのです。神様によって祝福された群れとして、これからも私たちは中心的な歴史を刻むのです。どうでしょう。皆様は輝かしい歴史を刻んでおられますでしょうか。

【御言】

同時性の時代の対照

- ・復帰摂理延長時代は、形象的同時性の時代である復帰摂理時代を、実体的な同時性として蕩滅復帰する時代であります。ゆえに、この時代においては、復帰摂理時代を形成する各時代とその年数を、そのまま蕩滅復帰するようになります。
- ・復帰摂理延長時代においては、エジプト苦役時代 400 年を実体的な同時性として蕩滅復帰するローマ帝国迫害時代 400 年がありました。
- ・このように、士師時代 400 年を蕩滅復帰する、教区長制キリスト教会時代 400 年があり、
- ・統一王国時代 120 年を蕩滅復帰する、キリスト王国時代 120 年がありました。

【感想】

これから復帰摂理の歴史を見てゆきますが、中心民族史は見事に同じような年数を形成しているのです。これを見ても神様が歴史を動かしてこられたということが明確になるのです。

キリスト教歴史である復帰摂理延長歴史は、きっちりと復帰摂理時代の中心民族であるユダヤ教の歴史と数字的にも合ってきます。

ここでは前半のエジプト苦役 400 年と士師時代の 400 年が紹介されていますが、その後に統一王国時代の 120 年が登場します。

真のお父様は洗礼ヨハネが失敗し、摂理的な準備が崩れてゆくのを知られながら、この摂理歴史を再度 40 年で蕩滅されたと言います。従って来る者にはこの 40 年全体を見ることは難しいかもしれませんが、そこにはあきらかにこの同時性で現れる数理性が繰り返されていることを発見することができます。

ですので、摂理というのは闇雲に原理数を設定するというものではないのです。ここに同時性をしっかりと認識し、どの時代を今、通過しているのかということを把握すると、明日の摂理を予測することもできるのです。

今、基元節を迎えて 7 年路程を歩んでいます、その歴史的な意義を考えてみられたことはありますでしょうか。振り返ってみると本当に神様が役事された 7 年だと分かる時が来ると私は思います。

人間の一生は長くても 100 年程度です。ですが、神様はその何十倍もの期間を通じて摂理を進められているのです。そのような意味において、私たちは何十人もの中心人物のバトンを受け取った者なのです。そして、私たちはそのバトンを受けたアンカーだということです。そのような歴史の重みを感じられたことはありますか。

【御言】

- ・南北王朝に分立していた 400 年期間を蕩滅復帰する、東西王朝分立時代 400 年がありました。
- ・ユダヤ民族がバビロンに捕虜として捕らえられ、再び帰還する、ユダヤ民族捕虜および帰還時代 210 年を蕩滅復帰する、法王捕虜および帰還時代 210 年がありました。
- ・また、メシヤ降臨準備時代 400 年を過ぎたのちイエス様を迎えたように、メシヤ再降臨準備時代 400 年を過ぎて、初めて、再臨主を迎えることができます。

【感想】

前回に引き続き、摂理的な歴史の同時性の対照を続けます。統一王国は二つに分断される南北王朝分立と東西王朝分立もきれいに 400 年という期間を形成します。そして、歴史でも学ばれたと思いますが、教皇のアヴィニョン捕囚を教皇のバビロン捕囚と呼ぶこともあることは皆様もご存じだと思います。

この世的にも、歴史の繰り返しを学問として研究する分野があり、ユダヤ民族のバビロン捕囚は見事に教皇によって再現されています。

その後メシヤの降臨の準備のためのメシヤ降臨準備時代を経た後にイエス様が誕生されたように、メシヤ再降臨準備時代の400年を要して真の御父母様が誕生されているということです。

この点においても、メシヤとして誕生された御父母様は単に一般の人間として誕生されているのではないことが分かります。外見的に普通の人間とさせて頂かないからという理由で、私たちと比較すること自体が大きな誤りなのです。

歴史はこのように繰り返されて摂理されているのです。その歴史が結実するのが終末である現代であり、真の御父母様が歴史を完結されるということです。真のお父様が再度荒野から復帰歴史を再蕩減されたというのであれば、この同時性は見事に40年路程に再現されていると思います。

真の御父母様の生涯がこの摂理歴史と同時性の関係にあるということは、振り返ってみて初めて分かることですが、まさに御父母様の生涯においても神様は摂理されたということが、明確に分かるのです。ですので、自叙伝を読むと、摂理歴史の概観が把握できるというのも納得ができるのです。

ですので、摂理は原理的な期間をもって成されるので、時を逃すとまた準備するのに原理的な期間が必要になるということです。それであるがゆえに、時を失わないためにも、摂理というものをしっかりと把握して精誠を捧げる必要があると私は思います。

【御言】

第7節 復帰摂理から見た歴史発展

人類歴史は、善悪の交錯

- ・人類歴史は、善悪が交錯する渦の中にありながら、悪を退け、善を指向してきました。それゆえに、歴史が指向する終局的な世界は、善の目的が成就された天国でなければなりません。
- ・ところが、人間がサタンとの血縁関係を結んだことにより、サタンは、墮落した人間を中心として、神様がつくろうとなさるものと同じ型の世界を、先立ってつくってきたので、人類歴史は、原理型の非原理世界を形成してきたのであります。
- ・したがって、人類歴史の終末には、神様が地上天国を復帰される前に、サタンを中心とする、それと同じ型の非原理世界が、先につくられるようになっているのです。これが、すなわち、共産主義世界なのです。

【感想】

ここにおいて歴史はどのように流れるのかということが簡単に紹介されています。唯物論による唯物史観によるとこの世界は最終的には共産主義世界になると理論的に説明しています。ですが、原理はその理論が登場した理由まで説明しているのです。それがなぜかというと、神様を中心とする地上天上天国が実現される前にサタンを中心とした非原理的な天国が作られるということです。それが共産主義だということです。

ですので、原理の提唱する歴史観においては共産主義の登場は必然的であると説明し、その上で、共産主義の唯物史観のゴールは最終ゴールではなく、そのような共産主義世界を凌駕する原理的な神様を中心とする天国が実現されると説明します。

歴史について詳しいことをお知りになりたい時には統一思想の歴史論をひもとかれることをお勧めします。

このように原理では共産主義の出現を必然的に扱い、さらに唯物史観の誤りを明確に提示した上で、この無形世界を含めた宇宙は、神様を中心とした天国を実現する方向に流れると説明します。これは、今日における共産主義世界の終焉現象を見ても明確に時代が証明しつつあることであり、これからの時代は共産主義が終焉を迎え、原理的な神様を中心とした天国が展開されるように流れるというのが原理を学ぶものの歴史観だと思います。

そして、私もその歴史観を、とても理論的に納得できるものであり、誤りはないと信じている一人でもあります。

皆様はいかがでしょうか。共産主義は終焉を迎える。この理論は今も共産主義が現存する中国における大きな変革を預言するものでもあると私は思っています。

【御言】

復帰摂理時代における歴史発展

- ・サタンを中心とした人類罪惡史の発展過程を見てみると、原始共同社会から分裂した人間を中心として氏族社会を形成し、それがさらに成長して、封建社会を成し、その版図と主権を拡張して君主社会が成されたのです。
- ・それは将来、神様がつくろうとなさる世界を、サタンが先に知って、そのような型の路程を歩んできたのです。
- ・事実上、神様はこのような罪惡世界からアブラハムを呼びだされて、彼を通じて、神様のみ旨を信奉し得る子女を繁殖することによって、イスラエルの氏族社会を立てられたのです。その後、彼らは、エジプトに入って、部族へと発展してきたのであり、さらに、イスラエルの封建社会（士師時代）、そして、イスラエルの君主社会を形成してきました。それがすなわち統一王国時代でした。

【感想】

今、天一国の建国の歩みが進んでいると思いますが、その発展形態においても原理的な観点があるということです。

私たちは、今氏族メシヤということで、それぞれが摂理に精誠を捧げられていると思いますが、これはイスラエルにおける氏族社会の形成に相当すると私は思っています。この氏族社会が形成されると、その氏族が束ねられ、やがて部族へと発展し、その後、封建社会が形成されてのち、天一国の国家が地上に誕生するということではないでしょうか。

今、国家メシヤの方々が精誠を捧げられている状況において、摂理は封建時代を迎えつつあると思います。そのように国家という形態は簡単に誰かが決意して発起する会社のように行かないことを原理は語っていると思います。

そのような意味において、氏族社会の基盤を造成する私たちの氏族メシヤの摂理はとても重要なものになります。

霊界には天一国が創建されたと言うことなのですが、その国家という基盤を創建するには、氏族から始まり、民族へと発展させ、さらに封建社会を経て、国家に至っているということだと思います。横的摂理の横的8段階を考えても、それにきちんと符合しているのがこの部分ではないかと思います。

ですから、氏族復帰だけで国家を復帰できるとは真のお母様も思われていないのだと思います。その先に、氏族を統合した民族が形成され、しっかりとした領土などを確保した封建社会を形成することも考えられているのではと私は思います。

今、そのような建国の歴史を刻んでいる私たちは、今後、どのような社会が形成されるのかというしっかりとしたビジョンを持たなければなりません。その筋道を示すのがこの部分でもあるのではと思っています。

【御言】

復帰摂理延長時代における歴史発展

復帰摂理と西洋史

- ・ユダヤ民族がイエス様をメシヤとして信じ、仕えて、一つになっていたならば、ローマ帝国を中心として地中海を基盤として成立していた古代の統一世界は、生きておられるイエス様によって感化され、彼を王として信奉し、エルサレムを中心とする王国を建設し得たはずでした。

【感想】

もし韓民族が御父母様を受け入れ、一つになっていたならば、アメリカを中心として世界に基盤を有していたキリスト教文化圏は御父母様によって感化され、韓国を中心とする世界的な王国が建設されていたというのです。

韓国の人は今も思いもよらないというのです。韓民族が世界の中心になっていたということをです。それは、イエス様の当時のユダヤの民も同じだったのです。ローマの属国だったイスラエルは、まさかイスラエルがローマを感化し、世界の中心になれたとは思わなかったことでしょう。そして、霊界に行って、この真理を知った時に、涙を流して悔いたというのです。

ですので、本来でしたら真の御父母様を中心とした王国が建設されるはずであり、今もその建国の摂理は続けられているのです。本来でしたら、この民主主義世界だけでなく、共産主義世界においても真の御父母様によって感化され、この世界は統一し得ていたと摂理歴史的な経緯があるというのです。そのチャンスを韓民族は失ったというのです。

人間とはどうしても自分の器でしか物事が見れない物ですから、世界を視野に活動される御父母様に相対する人間は地上には皆無であつたに違いありません。そのような孤独な中で、何も分からず盲目的に従ってくる信徒を前に、世界摂理を展開される御父母様の心情は本当に大変だったと思います。

真の御父母様は世界を統一し得る内容を備えて地上に誕生されています。その人間としての大きさを知らずして、国家レベルの国益や集団レベルの長子権にこだわり、大局を見失うということが摂理歴史では往々にしてあります。

どのように御父母様を真似てみても、人間としての器が歴然と違うのです。日本のリーダーという人は日本の未来には明るいかもかもしれません。ですが、アメリカや欧米、アフリカや中国などの未来について連携した摂理を踏まえて語れるのは御父母様しかいないのではないかと思います。

人間とは自分よりも大きな存在は得てして見えない物です。それゆえに、その無知が摂理を遅らせることが往々にしてあります。御父母様には私たちが手に取るように分かるというのです。韓国は世界の中心になることができる機会と運勢が到来していたのです。その機会を逸したのも人間の無知であり、御父母様を荒野に追い出したのも人間の無知故です。

そのような中、摂理は延長されて進められています。極東の小さな国家が何故に世界の中心になれるのか。これは、イエス様の当時のユダヤ教徒もイスラエルが何故にと考えたことではないでしょうか。まさかイエス様が全世界に影響を与えようとは夢にも思わなかったように。

私たちはそのような人に侍っているのです。単なる小さな宗教団体の教祖で終わる人ではないのです。真の御父母様とはそういうお方だと私は思います。

【御言】

・しかし、イエス様が十字架で亡くなられることによって、476年に、西ローマが滅亡したあと、神様の復帰摂理は、恨みの地ユダヤより、西ローマの版図であった西欧に移されていきました。したがって、イエス様以後におけるキリスト教による霊的復帰摂理は、西欧を土台として成就されてきたので、この時代の復帰摂理歴史は、西欧においてのみ、典型路程に従って発展するようになりました。

・このようにして、西欧を中心とするキリスト教史は、復帰摂理延長時代を形成する中心史料となったのです。

【感想】

メシヤとして降臨されたイエス様が十字架で亡くなられることで、神様の恨となったユダヤは摂理から外され、神様の関心を注がれる摂理はイエス様を信奉するキリスト教に移ります。そして、その発展は西欧社会にもたらされます。ですので、復帰摂理の典型路程は西欧においてのみ見られるというのです。

このことから考えると、西欧と関係のない中国をはじめとする東洋史は神様の摂理の典型路程に従っていないということはお分かりになると思います。ですが、神様の創造のみ業を考えると被造物が展開する歴史にはある一定の法則性が働いていることは明らかなだと思います。

ですので、歴史をただ年代と出来事を暗記するだけではなく、全体を見ることができると見事に法則性を発見することができるということです。

このことは私たちも十分に気をつけなければならないことなのです。私たち韓日米は摂理国家として選ばれていますが、その使命を完遂することなく、御父母様を迫害した歴史を刻むとするならば、神様の摂理はより神様を信奉する他の国に移ることも考えられるということです。そのことは、日本が摂理国家を外されるかもしれない事態が生じた摂理史を見ても明らかなだと思います。

ですが、摂理的に見ると真の御父母様が3段階目なので、摂理が完結することを考えれば、摂理が韓国から移ることはないかもしれません。ですが、御父母様を南米に追いやったのも摂理国家の無知によるものです。

そのような歴史を見る時、私たちの生きている摂理歴史というのは間違いなく神様の典型路程に従っているということです。ですので、真のお父様も人生を振り返る時、完全にそれが典型路程になっていることを悟られるがゆえに、常に神様が関与されていたことを知っておられたのではないかと思います。

このように、私たちの摂理歴史には神様が関与されています。それはとりもなおさず摂理に同参している私たちに神様が関与されているということなのです。これがどれほどの恩恵か分かりますか。天運ではなく、天が直接私たちに関与されて、人生を導いてくださっているということです。御言を学ぶということは、このような神様の関与の出発を意味します。どうでしょう。皆様は御言を学ぶことで神様に会ったのではありませんか。

【御言】

宗教史と経済史と政治史との相互関係

・宗教と経済とは、互いに対立しあう側面をもちながらも、我々の社会生活と関係を結んで、各々キリスト教史と経済史とを、形成してきました。それらが、社会生活といかにして結びつくことができたのかというと、政治によってでありました。したがって、復帰摂理のための歴史の発展を、正確に把握するためには、キリスト教史と経済史と政治史をそれぞれ別途に考察しなければなりません。

【感想】

私たちの教会では経済摂理もあり、宗教と経済は心と体。無形と有形の摂理として共存してきた歴史があると思います。ですが、経済が偏重になれば対象である万物が主体となってしまう主管性が転倒されてサタンが入りやすい状況に陥りやすいという傾向もあったと思います。

ですので、どこまでも私たちの教会の主流は宗教であり、経済摂理は対象的な位置づけになると思います。ですので、献金においても心情が先立たなくてはならないのが本筋であり、多額の金額を献金しただけで、その人が信仰者だという判断はある意味、当てはまらないこともあると思います。もちろん、経済摂理には大きく貢献したことになりますが、ここにもありますように、非原理世界では心と体が戦いますので、必然的に宗教と経済は対立的にならざるを得なかったという歴史もあります。

私たちは、そのような中、本然の人間として、心と体が円滑に授受作用して一体化している人間を理想としており、これが展開されると、宗教と経済が心の世界と現実世界を一つにして主管するということを意味しており、対立してきた歴史に終止符を打つことになると思います。

そして、天一国が発した現在において、いよいよ天一国の政治が始まるのであって、この三つの歴史は真の御父母様を中心として一つの課題として解決されることになると思います。

私たちの教会は宗教と経済が円滑に授受作用を行い、心を救済することで、現実世界も改善することを説明します。それはどこまでも、人間というものの中で、心と体が授受作用して一体化する

のが理想であるという創造理想にその根拠を置いていると思います。

ですので、献金するにおいても心情が重要なのはいうまでもないということです。教会から経済の責任分担がやってきたとしたら、お金を動機として動くのではなく、献金できた額は結果だと思ふべきなのです。動機はどこまでも神様や御父母様に対する感謝の心情であるのは、説明されないことが多いのですが自明なのです。皆様は大丈夫でしょうか。

【御言】

氏族社会

- ・イエスを殺害したユダヤ民族は、サタン側の系列に転落してしまったので、神様はこの社会を分裂させ、その中から篤実なキリスト教信徒だけを呼びだされて、キリスト教氏族社会を立てられました。
- ・この社会は、ローマ帝国の厳しい迫害を受けながら繁栄し、キリスト教部族社会を形成しました。
- ・そして、4世紀後半から移動してきたゲルマン民族にキリスト教が浸透することによって、広範なキリスト教社会がつくられました。

【感想】

今、私たちは氏族メシヤの摂理を展開しています。ですが、氏族メシヤがゴールではないのです。ここでも紹介されているとおり、氏族メシヤを通じて、氏族社会を形成できると、氏族で様々な艱難を乗り越え、統一教会の部族社会が形成されることになります。さらに、御父母様の教えは世界に受け入れられ、広範な天一国の版図が作られるようになるという歴史の流れもここから見えてと思います。

それをもって全人類を復帰する路程が完結するというのが、ある意味、これからの歴史になるのではないかと思います。キリスト教文化圏では洗礼を受けるのが当たり前のように、天一国の文化圏では祝福を受けるのが当たり前になるのも見えてきます。

この部分では氏族的版図からその版図の拡大に伴い、部族、そして広範な社会へと拡大される様子が簡単に述べられていますが、私たちが氏族メシヤを通じて、氏族社会を形成することができれば、その版図は一気に世界に拡大される条件を御父母様は立てられているということです。

ですので、神氏族メシヤの摂理は単に氏族的な復帰の完結を意味するのではなく、その先に全人類の復帰がかかっているということも真のお父様は語られていました。

統一原理に立脚した天一国の版図はこれからも拡大されると思います。その際に、御父母様を十字架に掛けてしまった人々がサタン側の系列に転落しないことを祈ります。

真の御父母様は韓半島を統一されて、天一国を建てようとされています。韓国が世界の中心になるということです。ですが、そのことに気づいていない韓国人の方が大勢いるという現実、人間の無知を本当に感じさせます。

皆様はどう思われますか。韓国が世界の首国(世界の中心の国家)となる日が到来しようとしているのです。当時のユダヤ人がそうであったように、今の韓国人においてもそのことを信じられない人が多いということは、私も残念に思います。

【御言】

封建社会

- ・西ローマ帝国の滅亡と前後して、国家が無秩序な状態に陥ったとき、封建社会が形成されはじめました。
- ・神様は、ゲルマン民族を、新しい選民として教化され、封建社会を樹立されることにより、宗教と政治と経済の3面にわたる、小単位の天の側の版図を強化し、将来、天の側の王国を建設するための基台を、準備することができました。

【感想】

氏族メシヤを勝利すればいきなり国家が復帰できるのかということそうではないと思います。原理が説明するように、その後、勝利した氏族が集まり、国家を形成する前に一定の領土を獲得した封土というものを持つ、有力者になることを通過すると思います。

今の時代は封土に相当するものは単に土地だけではなく、人材や技術、経済などの様々な万物の集合体を意味するようになると思います。私たちは氏族メシヤを勝利した上で、適切な経済力と人材を主管するようになり、そのような封土を基盤にした有力者になるという経緯を通過しなければならないということだと思っています。

それをもって、天の版図を氏族圏から拡大することなのです。この小さな領域で宗教、政治、経済を神様を中心として営む小単位の天の側の版図を築くのが国家復帰の前段階です。

今の教会の規模を考えれば、この封建社会が樹立され、非原理社会と共存しているという状況がピッタリとするかもしれません。

真のお父様はこの摂理歴史を一気に短縮されて、君主社会を形成するまでに進めたかったのではと私も思います。ですが、今はまだ、教会の現状はここでも紹介する通り、封建社会のレベルではないのかと思います。

これから摂理歴史は次回に紹介する君主社会へと流れて行くと思います。この部分のポイントをしっかりと抑えておくこと、さらにキリスト教社会で封建社会から君主社会へと移るときにどのようなことが起きていたのかということを知ることは、今の時代のこれからの摂理を見て行く上で極めて重要であるというのではないのでしょうか。

摂理歴史を見れば、今後、間違いなく、真の御父母様を王とする君主社会へと版図は拡大すると思います。その過渡期において、私たちは何をすべきなのか。それをするヒントはここでも紹介するように同時性にあると私は思っています。

【御言】

君主社会と帝国主義社会

- ・宗教面において、キリスト教君主社会は、「メシヤのための霊的基台」の上で法王を中心としてたてられた国土のない霊的な王国社会でした(800～1500)。
- ・国王が、封建階級社会の領主の立場を離れて、政治面における君主社会を形成したのは、17世紀の中葉から1789年にフランス革命が起こるときまででした。
- ・経済面では、封建社会のあとに続いて資本主義社会と、そのあとに帝国主義社会がきました。

【感想】

今、摂理はこの地上に君主社会を形成するために動いているということかもしれません。まだ地上には天一国が定着していませんので、安定した地上基盤が築かれれば、その場において、どのような国家が形成されるのかということが考えられますが、メシヤが選挙で選ばれるわけではありませんので、必然的にメシヤを王とする君主社会が形成されるのではと思います。

もちろん、天一国の王は王の位置に立ちますが、権力や武力でもって国家を治めようとはされなと思います。そのような力は形状的な力であり、より主体となるのは心情的な愛の力になると思います。

ですので、私たちは単に韓半島が統一されれば良いとは思っていません。統一された韓半島において、真の御父母様が王として推戴され、国家を治められるということを目指しています。ですが、現在はそのような基盤がまだ整っていません。ですので、今は前段階の封建社会が形成されていると私には見えます。

天一国はメシヤが王となりますので、サタンの第三試練である権力や地位の誘惑に勝利した人間でなければ立つことはできないでしょう。今、地上に真のお母様がおられますが、これから目指す地上の天一国は真のお母様を女王とする君主国家であると、この部分から読み取れると思いま

す。

ですが、歴史を見ればサタンが先行しますので、原理的な王が誕生する前に多くの非原理的な人間を中心とした王が誕生したということは言うまでもありません。よくよく覚えておいて欲しいのは、真のお父様も真のお母様もイエス様と同様にサタンの第三試練にパスされているという点です。韓国は王となるべきメシヤを迎えていたのです。ただ、多くの韓国人はそのことを知らなかったのです。

私たちは日本に住んでおり、国籍も日本だということかもしれません。ですが、父母国家として立てられた日本ですので、韓国に天一国が建てられれば、日本とは緊密な国交を行い、同盟国して発展するようになるのではと思います。天一国はまだ地上に国家が復帰されていません。ですが、その国家像というものを皆様はしっかりと持っておられますでしょうか。ゴールを見ずして走るのは道に迷う危険性もあります。皆様のビジョンは大丈夫ですか。

【御言】

民主主義と社会主義

- ・神様は、君主社会を打ち壊し、メシヤ王国を再建するために民主主義を立てられました。
- ・政治面では、18世紀の末葉に起こった民主主義は、イギリス・アメリカ・フランスで革命を起こし、民主主義社会の基礎を確立しました。
- ・宗教面においては、1517年の宗教改革により、国土のない霊的な王国が倒れたのち、キリスト教民主主義時代が到来しました。
- ・経済史においても、帝国主義を倒し、民主主義的な経済社会をつくるために、社会主義が生ずるようになります。

【感想】

君主が支配する非原理型の王国はやがて終焉を迎え、次に民主主義社会が到来します。民主主義とは限られた権力者によって国家が運営されるのではなく、国民の総意を反映するような国家運営をしようという考えが基本だと思います。

これは、メシヤが降臨されたときに、メシヤが一人の国民として国家に影響を与えることができる基盤となるように準備されたものです。

もし、君主社会にメシヤが降臨されたとしたら、君主を打ち倒して王にならなければならないので、問題が大きいというのです。いえ、逆に殺されるかもしれないというのです。それで、神様は民主主義を準備されたというのです。

このような原理があるので、民主主義国家とはメシヤのために準備された神側の国家だということです。これと対極を成す共産主義国家とは、神様不在の無神論に立脚しており、その性質からしてサタン中心の国家だと言うことができます。

ですが、民主主義が神側だからといって、メシヤが選挙で選ばれるということはありません。その点は間違えないようにしないといけません。真の御父母様は民衆の支持だけによって選ばれたものではありません。神様が立てられたお方だということです。天一国は真の御父母様を王とする王国です。その王に推戴される経緯を私たちは良く知っています。決して武力や財力などによって王になられたお方ではありません。それであるがゆえに、その王を倒すような摂理は存在しないというのです。

皆様は天一国はどのような国家になると考えておられますか。この同時性を見て、王はいずれ倒されるなどという誤解はしないでください。君主社会が終焉を迎えたのは、非原理型だったからなのです。これから共産世界も民主世界も行き詰まるようになると思います。それは神主義が主流となる時代の転換期における現象だと私は思っています。

【御言】

共生共栄共義主義と共産主義

- ・神様の創造理想は、だれにでも均等な環境と平等な生活条件とを与えようとされることです。
- ・人間が、このような理想を復帰し得る摂理歴史の終末期に至っては、神様を中心とする社会主義社会が現れなければなりません。
- ・天の側の社会主義社会を指向する人間の本心は、共生共栄共義主義を主唱し、神様の創造目的を完成した理想世界をつくるどころまで行かなければならないのですが、この世界が、すなわち、再臨されるイエス様を中心とする地上天国なのです。
- ・サタンは、神様の摂理に先立って、唯物史観に立脚した、いわゆる科学的社会主義を叫びながら共産主義世界へと進んでいきます。

【感想】

私たちの向かおうとする地上天国とはどのような所なのか。創造目的を完成した理想世界とはどのような世界なのか。それを見るにおいて、ポイントとなるのが共生共栄共義主義というものです。言葉を聞いてもピンとこないかもしれませんが、原理はそこに天の側の社会主義と説明を加えています。つまり、神様の理想社会とは民主主義圏で一般化されている資本主義国家ではないということなのです。その社会システムにおいては、現状では社会主義国家のようなものになるということです。

ですが、現存の社会主義はサタンを中心としていますので、必然的に苦悩と破綻が待っています。様々な平等を叫びながらも物欲から解放されることなく、権力者が富を搾取するということがいくらでも起きています。

創造理想世界はその中心者に神様と一体化した愛の主管主が立ちますので、権力にものを言わせて富を蓄積するというようなことは起こりえません。皆が平等に物資を分かち合い、助け合って生きる社会を構築しようというのです。

歴史においてはサタンが先行しますので、神様のこのような理想をサタンはサタンを中心として先駆けて実現しようとします。ですので、共産主義世界というものがサタンを中心としてはいますが、これからの未来における社会の理想的なシステムになっているということです。

共産主義と社会主義、民主主義と資本主義が対になって一体になっていると思われそうですが、原理が主張する理想世界とは民主主義であり、宗教を中心としながらも、社会主義のシステムを取るようになるという説明がここではなされています。

共産主義世界とは唯物史観に立脚して、科学的社会主義を叫びながら進んでいます。私たちはどうすべきなのでしょう。資本主義に埋もれるのではなく、統一史観に立脚して、真の御父母様と神様を中心とした宗教的社会主義を叫ぶべきなのではないのでしょうか。

皆様には今住んでいる資本主義社会と共生共栄共義主義社会というものの区別はついておられますか。

【御言】

宗教史、政治史、経済史の融合

- ・宗教、政治、経済の三つの部面に分かれて発展してきた歴史が、一つの理想を実現する焦点に向かって帰結されるためには、宗教と科学とを、完全に統一された一つの課題として解決し得る新しい真理が現れなければなりません。
- ・このような真理に立脚した宗教によって、全人類が神様の心情に帰一することにより、一つの理念を中心とした経済の基台の上で、創造理想を実現する政治社会がつくられるはずですが、これがすなわち、共生共栄共義主義に立脚した、メシヤ王国なのです。

【感想】

ここに宗教と政治、経済が一つのゴールに向かって歴史が進んでいることが紹介されています。統一原理は宗教と科学が統一された一つの課題として解かれているものです。それであるがゆえに、このような真理を通じて、宗教と政治、経済は神様の心情に帰一するようになり、創造理想を実現する社会が形成されるべきであると原理は説明します。

最終的な天一国とは共生共栄共義主義に立脚した真の御父母様を王とするメシヤ王国であると明確に提言しています。

ですので、経済人も、政治家も、そしてもちろん宗教者も、これからの時代のリーダーは神様の心情に帰一しなければ、人々をリードできない時代に入ります。これまでは、人間が人間をリードしてきた歴史だったかもしれません。聖書はそのたとえをめくらめくらの道案内をしていると比喻しているようなこともあります。ですが、神様の直接主管圏時代が宣布され、神様が歴史をリードする時代が到来していますので、必然的に無神論に立脚した国家、社会は衰退するようになります。

民主主義、資本主義も行き詰まりを見せ始めていますが、その打開策がまさしく神様の心情に帰一するという事なのです。国家の運営、社会の運営もすべて原理で解くことが可能になっていることを私たちは知っています。

共産圏においても信教の自由を認めることが国家のこれからの発展の原動力になるということをも明確に私たちは認識しているので、そのような運動を展開しているのです。

ここでのポイントは歴史を誰が作ってきたのかという認識の転換なのです。人間の歴史なのだから当然、人間が作ってきた時代の結果が歴史だと皆様も思われるかもしれませんが、実はそうではないのです。歴史とは神様の摂理によってリードされた、神様の作品だということです。ですので、摂理を読むことのできる人が、未来をリードし、預言することもできる先駆者であると私は思っています。真の御父母様とはそのような側面を持たれていると私は思います。

【御言】

第5章 メシヤ再降臨準備時代

再降臨準備時代 400 年 (1517～1918)

- ・メシヤ再降臨準備時代とは、西暦 1517 年の宗教改革が始まったときから、1918 年第一次世界大戦が終わるまでの 400 年間をいいます。
- ・復帰摂理から見て、この期間は宗教改革期、宗教および思想の闘争期、政治と経済および思想の成熟期などの三期間に区分されます。

【感想】

ルターによる宗教改革から第一次世界大戦までの期間をメシヤ再降臨準備時代と言います。つまり、真の御父母様が誕生されるために、準備された期間だということです。

このように、真の御父母様が誕生されるにおいて、このような長い時代を掛けて神様は準備されたということです。そのような歴史的な結実として真の御父母様は誕生されており、私たちと外見が似ているからと、一般の人と比べることは、真の御父母様の価値を見誤ることにつながります。

そのような方の指導を受けて、私たちは信仰生活を営んでおり、御父母様の真似をした人についていっても、歴史的な背景が全く異なりますので、その価値においては雲泥の差が生じるのです。

このように真の御父母様は長い歴史において神様が関与されて誕生されているということを私たちはしっかりと認識しておくべきだと思います。

これからメシヤの誕生のためにどのような準備がされたのかということを見て行きます。これは、世界の歴史に限ったことではありません。氏族のメシヤとして私たちが誕生するにおいても、象徴的に同じような路程を氏族圏は通過しているということです。

私たちも神様の準備によってメシヤとして立てられているのであって、決して御父母様の人間的

な願いをもって立てられた位置ではないのです。

ここでの準備期間は私たちが御父母様と出会うために準備された人生とも関連があると思います。世界史を見れば、原理の解くこの期間のことですが、規模を個人に小さくした摂理は私たちの人生においてもあったのではないかと思います。

この期間も原理数である三段階で構成されています。これから詳細を見て行きますが、これは今の摂理を準備された神様の心情を知る上でとても貴重な内容だと私は思っています。

【御言】

第1節 宗教改革期(1517～1648)

- ・西暦 1517 年、ルターが宗教改革の旗を掲げたときから、1648 年、ウェストファリア条約によって新旧両教徒間の闘争が終わるまでの 130 年の期間をいいます。
- ・中世社会は、封建制度とローマ・カトリックの世俗的な墮落によって、人間の本性が抑圧され、自由な発展を期待することができない時代でした。ゆえに、中世の人たちは、その環境を打ち破って、創造本性を復帰しようとする方向へ動かざるを得ませんでした。
- ・カイン型思想であるヘレニズムの復古運動は、人本主義の発想である文芸復興を引き起こし、アベル型思想であるヘブライズムの復古運動は、神本主義の復活のための宗教改革を引き起こしました。

【感想】

ここでは宗教改革期における時代の説明がなされています。宗教改革の発端は、人間の本性が抑圧され、自由な発展を期待できないという時代的な背景がありました。

これは過去に限ったことではありません。教会の組織においても、組織としての制約や強制力が人間の本性を抑圧し、個々人の自由な発展を阻害しているとするならば、いずれはその組織は改革されるべき時が到来するというのです。

これは、教会に限りません。非原理の世界でも同じです。日本の企業においても、企業利益を優先する余り、人間の本来の本性を否定して利益のために行動することを強要していれば、いずれ人はその企業を去り、自分の本性に従って、会社を興すというようなことも起こるのです。

このように人間の本来の自由を抑圧する組織には、必然的に改革の時機が到来するというのです。ただ、私たちの教会はそのような非原理の組織ではなく、愛情で結ばれた心情組織であるために、日本の本来の本性が啓発されることはあっても、それを否定したり、阻害するようなことはないというのです。教会の伝道においても組織的な強要によるものではなく、自由な本心の発露によって実践されているのです。

ただ、その本性を抑圧する社会システムを否定する方法として、カインとアベルに別れるというのがこの時代の教訓なのです。人間本来の情動的な発露によって組織を変革して思いやりのある人間味のあふれる組織にしようというのがヘレニズムの方向であり、そうではなく、もっと神様との関係をしっかりと結び、これまで以上に神様の愛と神霊に満ちた組織にしようというのがヘブライズムの方向だと思います。

これは組織論ですが、発展する組織とは、個々人の本心を引き出し、愛情の伴った授受作用によって、四位基台を形成することを実践する組織です。宗教改革期には宗教が世俗化して、四位基台の中心が神様ではなくなってしまったのです。そうすると必然的に摂理は神様を中心に戻そうとしますので、宗教を改革するようになると思います。その時において、宗教を離れて、宗教に頼ることなく自由を得ようと叫ぶのがヘレニズムの文芸復興なのです。

日本ではルネッサンスは芸術面でも高く評価される運動であり、様々な作品が紹介されていますが、本来のアベル的な改革運動は宗教改革なのです。それが伝来していないというのが、日本が宗教的にまだ幼いということの現れかもしれません。ぜひ、皆様もルネッサンス以上に宗教改革に関心を持たれることをお勧めします。

【御言】

文芸復興(Renaissance)

- ・中世の人々の本性から生ずる外的な追求は、ヘレニズムの復古運動を起こし、この運動によって文芸復興が勃興してきました。
- ・人間は、自身の責任分担を、自由意志によって完成されるように創造されたので、本性的に自由を追求するようになります。
- ・また、人間は、個性を完成することにより、人格の絶対的な自主性をもつように創造されたので、本性的に人格の自主性を追求するようになっています。
- ・そして、人間は、理知と理性によって神様のみ旨を悟り、生活するように創造されているので、本性的に理知と理性を追求するようになります。
- ・人間はまた、自然界を主管するように創造されたので、本性的に自然と現実と科学とを追求するようになります。

【感想】

ここではルネッサンスの内容が紹介されていますが、その根本は人間が本性的に何を追求するようになるのかということを端的に説明しています。

まず、人間は自由を追求するというのです。自由意志と自由行動をもって人間は責任分担を完成できるからなのです。これは組織論においても同じです。組織の一員として指示や命令に従っていたとしても、その人間はいずれ自由を求めて、自分の自由意志を実現する方向に歩み出すというのです。このような理由から、様々な自由を阻害している共産主義においても、いずれは自由を求める民衆によって変革がなされるというのです。

そして、人格の自主性を追求するようになりますので、上からの命令で摂理は成就できるようにはなっていません。どこまでも私たちの自主的な歩みによって摂理の結果が左右されるのです。真の御父母様も多くの愛情を注がれましたが、み旨を歩むのかどうかの決定は私たちに委ねられていたのです。

そして、信仰は盲目的であってはならないという理由もここににあります。本性的に理知と理性を求めるからなのです。したがって信仰するにおいても合理的な理由を必要としており、原理はその理論を提供していると言えます。

最後に、信仰において自然界を主管するようになるので、現実と科学を追究するようになるというのです。ですから、宗教と科学が対立しているような宗教は必然的に現代人の説得力に欠けるというようなことになります。ですので、原理が宗教と科学を統一された課題として解決していることが本当に大きいのです。

このように、人間をどのように主管するのかという基本がここに紹介されているのです。人間の本性が何を求めているのかということがここで分かるのです。

自由であり、自主性を求めるが故に、上からの強制では人間の本心が納得しないのです。また、理知と科学を追究するがゆえに、非科学的な歩みには人間が納得できないというのです。そのような意味において、私たちには主体性が求められており、原理は非常に科学的な側面を備えているので、それであるが故に、人間の本心が納得できる理論になっているというのです。従来宗教は科学と対立してきたが故に、現代人の説得力に失敗しています。統一原理は宗教的であると同時に非常に科学的なのです。

皆様も人の上に立つのであれば覚えておくべきなのです。人間の本心が何を求めるのかということなのです。これを無視すれば、表面的には従ったとしても、本心が納得しなければいずれ去ってしまうということも起こりえるのです。

ですので、リーダーはいかに科学的に指示を出し、従ってくる者の自主性を引き出すのかということが問われると思います。そのような意味で真のお父様の出された指示はすべて原理にかなっているというのです。その点に気づかれる人は多くはありません。真の御父母様は気まぐれで、気

分で指示を出される方ではありません。すべて、原理にかなってとても理論的な指示になっているというのです。それであるが故に、男性も本心が納得するというのです。皆様はいかがですか。本心は納得されていますか。

【御言】

宗教改革(Reformation)

- ・中世の人々が人本主義を唱えるにつれて、人間の自由を束縛する形式的な宗教儀式と規範とに反抗し、
- ・人間の自主性を蹂躪する封建階級制度と法王権に対抗するようになりました。
- ・さらに、彼らは人間の理性と理知を無視して、何事でも法王に隷属させる固陋な信仰生活に反発し、
- ・中世のキリスト教信徒は、自然と現実と科学を無視する法王政治に反抗するようになりました。

【感想】

中世キリスト教の問題点。それは自然と現実と科学を無視したことにありました。もちろん、現代人はその反動であまりにも科学に頼りすぎており、科学的でないことを信じないという弊害も生まれています。宗教性を無視して科学偏重になると唯物論的な感覚になりますが、統一原理は宗教と科学を一体のものとして解明しており、そのような問題点も克服されているというのです。

それであるがゆえに、摂理を進めるにおいても、単に中心者の祈祷などの啓示的な歩みばかりではなく、システマティックな科学的論理的アプローチも試みられているというのです。ですので、真のお母様はシステムリーダーを提唱されたのであり、そこには従来の宗教に偏りすぎた歩みをバランスの取れたものにするための配慮もあったのではと思います。

ですが、科学には今なお解明されていない課題が山積しており、すべてを科学で解明できないことを科学者は知っているというのです。

ですので、心の世界、精神世界は宗教的に救済し、現実問題や自然界の管理においては科学を導入する統一運動は本当に時代の最先端を行っているとは思っています。

ですので、これからのリーダーは人々の心をとらえる宗教性と現実問題を科学的に解決する科学性の両面が求められてくると思います。政治においてもそうです。精神論ばかりで議論を尽くしても問題は解決できなくなってきたおり、科学的な所見が必要とされるのは明白なことだと思います。

ただ、皆様もアプローチを間違えないようにしないといけません。現実問題を解決するために何か奇跡のようなことを信じ、宗教的に解決しようとする事なのです。これは、摂理に穴が開くと言われるのです。現実問題は科学的に解決できると原理は述べているのです。

ですので、人間の救済においても、精神的には宗教がリードし、肉体的には医学が対象の位置に立って授受作用をして本来の救済が成立するというのです。

中心者に隷属させ、従う者の自主性を蹂躪するような体制においては、いずれ宗教改革の流れが生じてしまうと原理は警告もしています。

皆様はいかがですか。自らの主体性をもって御旨に邁進されていますか。

【御言】

第2節 宗教および思想の闘争期(1648～1789)

- ・この期間は、西暦 1648 年ウェストファリア条約によって新教運動が成功して以後、1789 年フランス革命が起こるまでの 140 年期間をいいます。
- ・文芸復興と宗教改革によって近世の人々は、信教と思想の自由から起こる神学および教理の分裂と、哲学の戦いを免れることができなくなりました。
- ・カイン型の人生観とアベル型の人生観は、この期間に確立されました。

【感想】

自由を受けるとしたら、それは同時に一体化の困難も生じるということをここでは説明しています。中心者に従う者に自由が与えられたとしたら、宗教性がなければそれぞれがバラバラの方向に動いてしまうというのです。信教と思想の自由が与えられた人々においては、様々な教派分裂、戦いが生じてしまうのですが、それは中心がないからなのです。自己中心であるが故に、個々人の数だけ中心が生じて、分裂を生じるようになります。

ですが、私たちの教会は中心が神様であり、御父母様と唯一であるために、分裂ではなく一体化が可能になっているというのです。

宗教改革と文芸復興は民衆を指導していた中心が崩れることになりました。それであるがゆえに、自己中心の問題を解決することができなければ、自分が中心になってしまっ、分裂してしまうというのです。

私たちにおいては、中心が自分ではなく、神様であり御父母様です。ですので、私たちは陽子の周りを回る電子のように一体化して目的を達成できるようになっています。もし、中心が存在しなければ一体化は不可能になり、各自が自己中心になってバラバラになるというのです。

ですので、共産世界で民衆に自由が与えられれば国家がバラバラになるためにそれを軍勢力などの力で束ねているという構図もあると思います。

民主世界ではどうでしょうか。宗教があるがゆえに、神様という中心が唯一なので、民衆が自由に動きつつも一体感があるということなのです。ですので、民主主義圏で宗教が衰退すると国家はバラバラになるというのです。

天一国はどうでしょうか。民衆に自主性と自由が与えられたとしても、生活や人生の中心が神様であり、真の御父母様という唯一の存在であるために、一つにまとまるというのです。ですから、神様を抜きにした統一はあり得ないというのです。南北統一も同じだと思います。

皆様も御父母様を中心とすることで、兄弟姉妹と一体化できるのだと思います。皆様は大丈夫ですか。

【御言】

カイン型の人生観

- ・文芸復興運動は、すべてのことを自然と人間本位のものに代置させました。
- ・すなわち、理性と経験による合理的な批判と実証的な分析を通じて、彼らの価値を高める人生観を確立したのです。
- ・このような二つの思潮に乗って、人間が外的な性向のみ従ってサタンの側に偏る道を開く人生観を生みだしました。これがカイン型の人生観です。
- ・啓蒙思潮として発展してきたこの人生観は一層成熟して、共産主義世界をつくるようになりました。

【感想】

ここではカイン的な人生観というものがどういうものなのかということが紹介されています。

人間に自由が与えられ、人々は人生を切り開く上において、内的に進んだ人と、外的に進んだ人がいるというのです。外的に進んだ人とは、理性と経験による合理的な判断と実証的な分析を通じて人生観を確立したというのです。

この傾向は現代人に多く、科学を崇拝し、科学万能主義を唱える人も多いと思います。このような人々は人生において合理的な判断を優先するようになり、自分の感情や湧き上がる情熱を理性でコントロールしようとします。物事を進めるにおいても科学的な数字を重視するということもあるのではないのでしょうか。

このような人生観がカイン的な人生観なのです。この傾向は家庭においては男性によく見られる傾向で、摂理に対しても理性や経験をもって判断し、家庭において合理的な決断を下そうとするのではありませんか。それをもって人生を切り開き、家庭を運営しようとするのは、日本における男

性の傾向ではないかと思います。

ですが、それであるがゆえに、家庭においては男性がカインなのです。そのような傾向が強まれば強まるほど、摂理を非科学的だと、合理的でないと批判するようになりやすい傾向もあると思います。気をつけないといけないのが、このカイン的な人生観が共産主義の入り口になっているという点なのです。統一原理はどこまでも内的な宗教が主体であって、外的な科学は対象であると位置づけます。主管性が転倒されるとそこにはサタンが入ります。

ですので、私たちの人生において、科学は無視できませんが、どこまでも宗教の主体に対する対象であることを忘れてはいけないと思います。人間の人生をリードするのは宗教です。決して科学ではありません。現代人はこのような原理を知らないので、科学的な判断のみに従い、苦悩しているというのです。統一原理は科学を否定しません。いえ、現実問題の解決には科学は必要だとも説いています。ですが、人間の人生を見るときに、そこには科学で解決するのでは不幸になりやすいという警告をしているのではないのでしょうか。

皆様は大丈夫ですか。自分の人生を合理的に科学的に解決しようとしていることはありませんか。人間の心の世界を扱うのは宗教です。統一原理は宗教であると同時に科学でもあるのですが、その主体は宗教です。皆様も人生の問題は宗教を通じて解決される方が、アベル的な人生を歩めるのではないかと私は思います。

【御言】

アベル型の人生観

- ・宗教改革運動によって哲学と宗教は創造本性を指向する立体的な人生観を樹立しました。
- ・この人生観は、中世の人々をして一層高次的に神様の側へ指向するように導いてくれました。これがアベル型の人生観です。
- ・この人生観は、一層成熟して、今日の民主主義世界をつくるようになりました。

【感想】

アベル型の人生観とはどういうもののでしょうか。自由を与えられた民衆は、その自由に従って、より本心の願う、神様との高い次元の因縁を構築することのできる方向に導かれたというのです。そして、その人生観を有した人々が成熟することで民主主義世界が構築されたというのです。

ですので、民主主義とは多数決の理論ではなく、個々人に与えられた神様への問いかけによって、民衆が神様の判断を仰ぎ、それを政治に反映させるシステムだというのです。ただ、この民主主義が日本に導入されるにおいて、その宗教的な精神が抜け落ち、ただ単に大勢の人の意見を国家の意見として採用し、国家の運営を行うという多数決理論にばかり目が行くようになったのです。それであるがゆえに、神様の下において調和すべき民衆が選挙戦などと言いつつ争って政権を奪取するような構図になるのは、原理的に見ると民主主義の本来の姿ではないというのです。

天一国においては宗教と科学の両面が備わっていますので、心の世界、宗教の面では神様との密接な関係を必然的に必要とします。その関係が父子関係として親子の因縁であると原理は明確に提示しています。

このように心の世界においては、民主主義のように神様をより高次的に関係を持ち、さらに現実世界においては科学を活用して自然界を主管して行く。このように、母を中心としてアベルとカインが一体化しているのが天一国だと私は思います。

ですので、人生観においても、私たちは民主主義でもなく、共産主義でもなく、両者を統一して一体化させた神主義を採用しているのです。

ここではアベル型の人生観を紹介しましたが、民主主義の根底にはこのアベル型の人生観があるということを忘れてはならないと思います。単に多数決の理論で国家の方針を決定するのが民主主義なのではありません。神様の前により自由に出て行き、今後の人生における判断をうかがうという人生における姿勢が前提にあることを忘れてはならないと思います。

【御言】

第3節 政治、経済および思想の成熟期(1789～1918)

・1789年フランス革命が起こってから、1918年第一次世界大戦が終わるまでの130年期間をいいます。

- ・カイン、アベル二つの型の人生観はそれぞれの方向に従って成熟するようになりました。
- ・この二つの型の人生観の成熟につれて、カイン、アベルの二つの世界が形成されていきました。

【感想】

1789年のフランス革命以後、第一次世界対戦終了までの期間を政治、経済、思想の成熟期と呼びます。単に呼ぶだけではなく、この期間において何が起きたのかということもしっかりと押さえておきたいと思います。

カイン、アベルの二つの型の人生観はそれぞれが成熟期に入って行きます。すなわち、個人に与えられた自由によって、外的に発展してきたカイン型の人生観。内的に神様をより追求するようになったアベル型の人生観は、個人から拡大され、社会や国家を形成するようになります。

そして、やがて国家群というものが形成され、世界は民主主義と共産主義という二つの主義によって真っ二つに分断されることになるのです。これが現代まで続いた冷戦構造であり、両者の対立は御父母様の降臨をもって終結に至ります。

しかし、皆様も不思議に思いませんか。何故に同じ時期に、民主主義と共産主義が世界的な版図をもったのかということ。時代が少しでもずれれば世界はどちらかの主義によって覆い尽くされていたと言っても過言ではないと思います。それがちょうど、時を同じくして、民主主義と共産主義が世界的な版図を見るようになるということは、これも神様の摂理を考えなければ理解することはできないと思います。決して偶然による時代のぶつかりではないというのが原理的な視点だと思います。

では、どのような流れによって、民主主義世界、共産主義世界が登場するようになったのかということこれから見て行くことになると思います。

【御言】

民主主義 カイン型の民主主義

・カイン型の人生観は啓蒙思想を立ててフランス革命を起こし、カイン型の民主主義を形成しました。

・これが、ドイツでのマルクス主義と、ロシアでのレーニン主義として体系化されることにより、ついには共産主義世界を形成するに至りました。

【感想】

カイン型の人生観は啓蒙思想を立てます。人間を宗教からの隷属から解放して、人間の本来の本性を呼び起こそうとしたのがカイン型の人生観です。人間を神様から切り離し、人間中心の人生観を確立したのですが、その思想は唯物論へと流れて行きます。そして、その潮流はドイツにおいてマルクスを誕生させ、ロシアのレーニンによって国家から共産主義世界を形成するに至ります。

ですので、カイン型の人生観の根本が人本主義であるために、日本の思想的な土壌においても、共産主義に流れやすい風土があるということは否めないと思います。

ですが、神様の摂理はそのような宗教的な素養の薄い日本をエバ国家として立てられ、母の国として用いるようになります。その意味において、外的な側面においては日本は韓国よりも優れていると自負する人もいるかもしれませんが、その内面性、宗教性においてはやはり韓国がレベルが高いというのではないのでしょうか。

ですが、国家は宗教だけでは発展しないというのが明確な原理観であり、その外的な科学分野のサポートを日本が行うという意味において、経済の摂理も展開されたのだと思います。ですので、

現実問題の打開において、日本が優れているのは自然なことであり、それであるがゆえに私たちは人本主義に流れないように気をつけなければならないということだと思います。

皆様は大丈夫ですか。人本主義の誘惑に知らず知らずのうちに乗ってしまっているということはありませんか。日本においては特に宗教性が啓蒙されなければ、適切な教会運営は難しくなりますので、真の御父母様は多くの韓国の牧会者を日本に送ってくださったのではないのでしょうか。私たちは心情面においては本当に韓国の方々に学ぶことが多いというのです。ですが、それは日本の長所である現実問題の解決能力を捨てるということではないのです。心情は性相面、現実問題は形状面として両者を一つの課題として解かなければならないのが私たちなのです。

ここに韓国の方々から何を学ぶべきなのかということもある程度見えてきます。皆様が人本主義に染まってしまうと、神様とは関係なく自分たちで素晴らしい教会を建設しようという意見も出るので、それは、本当に気をつけないといけない日本の素地だと私は思っています。

【御言】

民主主義 アベル型の民主主義

- ・アベル型の人生観の結実体である熱狂的なイギリスのキリスト教信徒(清教徒)たちが、信教の自由を求めるために絶対主義と戦い、勝利して実現したのがアベル型の民主主義でした。
- ・イギリスの清教徒たちが、信仰の自由を得るためにアメリカの新大陸へ行き、1776年に独立国家を設立してアメリカの民主主義を樹立しました。
- ・このアベル型の民主主義は今日の民主主義世界を形成するようになりました。

【感想】

アベル型の人生観は宗教改革によってさらに進展し、信教の自由を獲得した民衆は、さらに上からの強制ではなく、自らの自由意志に基づいて、熱烈に神様を求めるようになったというのです。そのような人々が清教徒革命を主導し、その人々がやがて社会を形成し、国家を形成するようになるというのです。

ですので、アベル型の民主主義の背景にはこのような熱烈な神様への信仰が背景にあるのであって、決して数字だけのゲームで政権を取ったりするようなものではないのです。民主主義の根幹には神様の望む国家運営というのが基本にあり、それを離れては国家の求心力を失うというのが一般的な見方だと思います。

このような民主主義の特徴は、国家をリードするのは人間ではなく神様なので、国家のトップが変わったとしてもその国家の運営方針にはぶれがないというのです。ですが、近年において、現代人が宗教から離れるに従って、民主主義世界でも人本主義がはびこり、左翼勢力が力をつけるという構図が見られるのは残念なことだと思います。

日本の政治においては政教分離のスタンスを取っており、ややもすると国家の運営に宗教的判断が反映されないという大きな欠点を有していると思いますが、国家による宗教弾圧を防止するためには仕方の無いことなのかなと思います。ですが、そのようなスタンスを見ても、日本は欧米の民主主義の精神を相続することなく、外見的な形式だけを真似てしまっているのではという見方を私もしています。

原理的に民主主義とはどういうものなのかということがここで明確に説明されているのです。アベル的な人生観によって主導されて登場しているのが民主主義なのです。アメリカの建国精神は神様への自由なアプローチにあると思います。

ですので、世界情勢において宗教が力を失うようになるとき、まさに御父母様が降臨され、これまでの宗教は使命を終えて、新しい真理をもって人類をリードするようになったというのです。その経緯を考えると、これからの民主主義も御父母様を受け入れることがなければ、今後間違いなく行き詰まるか、人本主義に流れるようになってしまうという意味もあると思います。

今日の民主主義世界を形成する基盤がアベル型の人生観なのです。皆様は日本で民主主義

を謳歌していると思われるかもしれませんが、その真実の意味を理解されていますでしょうか。

【御言】

三権分立の原理的意義

- ・三権分立思想は、国家の権力が特定の個人や機関に集中するのを分散させるために、モンテスキューによって提唱されましたが、フランス革命のとき「人権宣言」の宣布によって実現されました。
- ・元来、この三権分立は、天の側の理想社会の構造であって、サタン側で、先に非原理的な原理型として成し遂げたのであり、立法、司法、行政の三機関もキリストを通じて伝達される神様の命令によって、お互いに原理的な授受の関係を結ばなければなりません。

【感想】

日本においても国家運営は三権分立の上に成り立っています。ですが、その三権分立においても、理想型、神様の意図された三権分立というものがあるということをここで紹介しています。

三権とは立法、司法、行政を意味しますが、日本にも立法機関があり、裁判所をもって管理される司法があり、政府の決定を実行する行政機関があります。ただ、日本の三権分立においては神様の命令がなかなか反映されていないというのです。人間同士のかけひきなどが存在し、権力の構図で物事が決定され、それが政府に反映されるということが現状ではないでしょうか。

もちろん、国家の興亡を担った機関でもありますので、その責任故に様々なリーダーシップが求められるのは当然ではありますが、政教分離のスタンスは神様の意志が国家の運営に反映されることを妨げているとも思います。

したがって、ややもするとここで説明されているように、サタン側の非原理的な原理型として構築された三権分立になりやすいというのは、皆様もお分かりだと思います。

私たちの所属する天一国においても、いずれ立法機関、司法機関、行政機関が設置され、そこで様々な運営が展開されるようになると思います。ですが、非原理の三権分立と決定的に異なるのが神様の意図が明白に反映される点と、三権が円滑に授受作用をするという点なのです。決して三権がお互いを牽制し合うとか、お互いに見張り続けるというような関係ではありません。三権が神様を中心として、愛情の伴った授受作用を行って、一つの有機体を形成するということだと思います。

皆様はいかがですか。三権分立という言葉が学校で学んだと言われる方も多いと思いますが、原理的な三権分立というものが、三権分立の理想型として存在することを原理はしっかりと説明しています。

【御言】

今日の民主主義政体

- ・今日の民主主義政体は、三権に分立され、また政党が組織されることによって、ついに人間一人の構造に相似するようになりました。
- ・政党は神様のみ旨を知らないで、それは頭脳の命令を伝達できなくなった脊髄と、それを中心とする末梢神経と同様なものであるといえます。
- ・すなわち、憲法が神様のみ言から成り立っていないので、立法、司法、行政の三機関は、あたかも神経系統が切れて、頭脳からくる命令に感応できなくなった三臓器のように、調和と秩序を失って、常に対立し、衝突するばかりなのです。

【感想】

今日、真の御父母様が世界のリーダーを指導される中で、神様のみ旨が様々な政党のリーダーにも知られるようになり、国家の神経系統が回復しつつあるというような摂理的な状況を見るとき、真の御父母様が降臨される以前においては、まさに政党は神様のみ旨を知ることもできずに、歴

史の流れに翻弄されていたのではないかと思います。

これは、日本においても例外ではなく、日本が摂理国家として立てられ、真の御父母様が指導される以前においては、まさにサタン側のエバ国家として多くの負の遺産を築いたことは近代史が証明しています。

ですので、国家の政治において神様のみ旨が反映されるにつれて、三権は調和を取り戻し、一つの有機体として、目的に向かって機能し始めているということだと思います。

現代人は、権力の欲望に抗するすべを知らず、国家というものが権力者によって運営されると錯覚することで、国家が滅亡の坂を転げ落ちて行くようなこともあるということです。ですが、歴史を長い期間で見つめてみると、すべては神様の手のひらの上で人間が踊っていたに過ぎないのです。

これから真の御父母様がリードされて摂理は展開されて行くと思いますが、この摂理が神様のなさろうとされる世界の方向性であり、国家の方向性になると思います。神様の意志を伝えるのが真の御父母様であるとするならば、今後、世界は真の御父母様の意見を反映させなければ、まさにここで語られているように頭脳を失った人間と同じようになってしまうということです。

日本においては三権が互いに牽制し合っており、常にお互いを見張っているというような状況があるかもしれませんが、真の御父母様の意向が反映されるようになると、まさに頭脳の神経が回復するように、三権がお互いに円滑に授受を行い国家の発展のために機能するようになるということです。

これは日本だけの話ではありません。世界中の民主主義国家がそうだというのです。

【御言】

再臨理想の目的

・ゆえに、再臨理想の目的は、イエス様が降臨することにより、墮落人間一人の構造に似ている現在の政治体制に完全な中枢神経を結んであげることによって、神様のみ旨を中心とした本然の機能を完全に発揮させようとするところにあるのです。

【感想】

原理では国家像というものをよく人間にたとえています。宗教性を失った国家は、神様の意図が政治に反映されず、それは頭脳との中枢神経が切れてしまった状態でもあると表現します。これは前回の内容でも紹介したとおりです。

では、再臨主はこの病人のような国家をどのように再建するのでしょうか。それを比喩的に表現しているのですが、人間で言えば中枢神経を結ぶということなのです。つまりは、三権を担当する中心人物が神様との関係を復帰し、それぞれが神様の意図をしっかりと把握した上で、お互いに相補的に授受作用を行い、一つの目的を達成するために機能するということなのです。

これが神様のみ旨を中心として本然の機能を発揮するということではないでしょうか。今の政治家の方々がどれだけ神様のみ旨を理解されているのでしょうか。真の御父母様が指導された歩みによって、この日本も救われているということは間違いありません。このように、政治家の方々においても摂理を理解することが今後の国家の発展、繁栄に直結することを理解されるようになればなるほど、国家というのは本来の機能を発揮するようになり、発展せざるを得ないということです。

神様のみ旨に逆行すれば国家は国運を失います。逆に天運にそってその波に上手に乗ることができれば、国運は天運と連結され、発展するようになるというのが私たちの原理観でもあります。ですので、私たちの伝道活動は国益にも直結していると言っても過言ではないのです。

この部分は国家のリーダーとなる方々に語られている内容でもあると思います。御旨を中心とした三権の円滑な授受作用は神様を軸としなければ成立しません。そのことを私たちは説明し、国家の繁栄理論を展開しているのです。いかがでしょう。皆様は自分の所属するこの日本という国家の繁栄を真剣に考えておられますか。

【御言】

産業革命の意義

- ・理想社会の経済機構も、完成された人体の構造と同様でなければならぬので、生産と分配と消費は、人体における胃腸と心臓と肺臓のように、有機的な授受の関係をもたなければなりません。
- ・ゆえに、必要かつ十分な生産と、公平にして過不足のない分配と、全体的な目的のための合理的な消費をしなければなりません。
- ・ところで、産業革命による大量生産は、イギリスをして商品市場と原料供給地としての広大な植民地を急速度に開拓せしめました。そして、産業革命は理想社会のための外的な環境復帰ばかりでなく、福音伝播のための広範囲な版図をつくって内的な復帰摂理の使命をも果たしたのです。

【感想】

日本ではイギリスの産業革命を経済的な成果としてでしか評価しない傾向があると思いますが、イギリスの産業革命のそれは外的な側面に過ぎないというのです。何故にイギリスの産業革命がこれほどまでに発展したのかという内的な理由があると原理は紹介しています。

それは、植民地を拡大するにおいて、原料供給地と商品市場というものを獲得するだけではなく、多くの宣教師が派遣され、植民地がキリスト教化されたことがもっと大きいのです。イエス様の福音を広範囲に拡大したことが、産業革命成功の大きな要因だったというのです。

ですので、アメリカの発展においても同じなのです。アメリカが世界的な力を持つと同時に、多くのキリスト教の牧師がアメリカの影響圏に宣教に出かけ、キリスト教の拡大に貢献したが故に、そのような発展があるというのです。

このように産業革命の背後には宗教の興隆と拡大が欠かせないということなのです。ですので、何故に日本のIT革命がスムーズに発展しないのかということも、原理は簡単に説明しています。それは、経済的な発展ばかりを求めてしまい、日本を救済する宗教の発展をまるで見ていないからなのです。IT技術が飛躍的に伸びたとして、その技術を伝える技術者が単なる技術の伝播だけでなく、同時に宗教的な啓蒙も行ったとしたら、そこには大きな発展が約束されていたというのです。

これからも日本の産業は発展するのだろうかという疑問を皆さんはお持ちだと思います。ですが、産業だけを発展させようとしても成功はしないと原理は警告しています。産業を外的な環境整備、宗教を内的な環境整備として内外の両輪がしっかりとかみ合ってこそ、産業は発展するというのです。

どんなに社会が大きくなろうと働くのは人間です。人間をどう扱うのかということは宗教に大きく依存します。働きやすい社会とは宗教の興隆無くしては実現できないのは原理を学ばれると自然と見えるものです。それであるがゆえに、産業の発展は宗教の興隆と切り離せないのです。

これは、産業という大きな版図に限ったことではありません。家庭においても、経済を循環させる産業があると同時に、そこに家庭を構成する人の宗教性がなければ家庭は発展しないというのです。そのようなことを原理は明確に説明するのですが、皆様はお分かりでしょうか。

【御言】

列国の強化と植民地の分割

- ・産業革命による科学と工業の飛躍的な発達、生産過剰の経済社会を招来しました。
- ・そして、世界列強は、植民地争奪戦を続けながら、急速度に強化されていきました。
- ・カイン、アベル二つの型の人生観の流れと経済発展は、政治的にこの世界を、民主と共産の二つの世界に分立させました。

【感想】

産業革命により生産効率が上昇し、大量生産が実施されるようになると、次には生産した商品を

販売する市場というものが必要になります。大量生産は市場の拡大を必要とするようになり、必然的にその矛先は植民地へと向けられました。

今の時代は市場はグローバル化されて、世界市場というものが展望される時代になり、それぞれの国家が得意とする生産物を貿易で世界市場に流し、そこで収益を上げるということが可能になってきています。

ですが、ここで紹介されている時代は、今の時代ではなく、そのような世界市場も構築されていない時代でしたので、必然的に民主主義圏、共産圏と列強の支配する地域が世界市場を分割して支配していたことになります。

このような経済基盤の上に政治的にも世界は二分されるようになり、世界は民主圏と共産圏の戦いの様相を呈するようになるということです。

今、アメリカと中国が二大経済圏として取り上げられますが、中国は共産圏、アメリカは民主圏、資本主義圏として世界市場がまた大きく分かれようとしていることもうかがわれます。

本来でしたら、中国が共産主義を放棄し、信教の自由を認めつつ、ロシアのように欧米とも円滑な交流ができれば良いのですが、それがまだ進んでいない状況です。

このように生産効率の革新的拡大は、大量生産を生み出し、大量に作り出された商品は市場を求めて、世界中に進出するようになるということです。日本がこれから世界に提供する商品とは、高い技術ではなく、高品質の安定性ではないかと思います。故障しない製品を世界に提供できる企業は、必然的に世界の市場で大きなセールスポイントを持つことになると思います。これが、民主主義圏にとどまっていたのが、この時期の世界情勢なのだとことを覚えておきたいと思います。

【御言】

第4節 世界大戦

蕩滅復帰摂理から見た世界大戦の原因

- ・戦争は、いつでも政治、経済、思想などが原因となって起こるようになります。しかし、このようなことはあくまでも外的な原因にすぎません。そこには必ず内的な原因があるということを知らなければなりません。
- ・世界大戦を、外的な原因を中心として見ただけでは、これに対する摂理的な意義を把握することができません。

【感想】

ここでは、世界大戦における原因について紹介をして行きます。世界史を学ぶ上でも世界大戦は必ず覚えなければならないほど重要な戦争だと思います。数多くの歴史的証言によって、その原因というものが世界史の授業でも紹介されると思います。

ですが、そのような学校で紹介される政治的、経済的、思想的な理由は外的な理由だと原理は紹介します。そして、物事には内面と外面があるように、世界大戦においても内的な理由として摂理的な理由があったことを原理は解いています。

この摂理的観点から見た世界大戦というものが分かってくると、人類は世界大戦を避けることはできなかったということも分かってきます。日本には世界大戦の反省から反戦活動家の方も多いと思いますが、どんなに人間的な努力で避けようとしても、避けることのできない時代的な流れというものがあります。世界大戦もしくりで、これは人類が避けることのできない大戦であり、原理は第三次の世界大戦も存在したと明確に提示しています。

何故に、世界大戦を人類は必要としたのでしょうか。その摂理的な理由は次回から紹介されると思いますが、そこには神様とサタンの人類を相手にした奪い合いというものがあるのです。世界大戦をもって人類における神様の摂理は大きく進むことになります。

日本は世界大戦においては敗戦を経験しています。それゆえに、世界大戦は間違いだったのではと負の側面しか見ない傾向もあるかもしれません。ですが、覚えておいてください。日本が世

界大戦で敗れることで摂理は進んだのです。

そのような摂理的な事情と日本との関わりというものも世界大戦では紹介されてきます。本来なら日本はサタン側のエバ国家として滅びるしかなかったという時代の流れもあったのです。それを真の御父母様が救済されたという明確な摂理史があるのです。そのような摂理的世界史を日本の人々はもっと知っておく必要があると私は感じています。

【御言】

世界大戦の内的な原因は？

第一に、主権を奪われまいとするサタンの最後の発悪によって

第二に、サタンが先に非原理的につくってきた三大祝福を復帰する世界的な蕩滅条件を立てるために

第三に、イエス様の三大試練を世界的に越えるために

第四に、主権復帰のための世界的な蕩滅条件を立てるために、
世界大戦が起こるようになります。

【感想】

ここには世界大戦の勃発した内的な理由が簡単に紹介されています。外的な経済的、政治的、思想的理由の他にこの内的な理由を理解しなければ、本当の意味で世界大戦の意義を理解することにはならないと思います。

まず第一に、サタンが主権を奪われまいと最後の発悪をするということなのです。サタン的な政権、独裁者などによって運営されている政権などは、その終末期において、民主主義的な政権に移行する前に、最後の発悪として残虐な行為を行うことがあるということです。そのような意味において、韓半島の南北統一においても、このような教訓をしっかりと押さえて慎重なソフトランディングを模索しているということです。

第二に、サタンが先行して非原理的に構築した三大祝福を世界的に蕩滅復帰するために、世界大戦が起こるということです。世界大戦における勝利とは神様側の陣営が勝利することで、摂理的に三大祝福を蕩滅復帰したという重要な意義があったということです。

第三に、イエス様の三大試練を世界的に超えるためにあったということです。イエス様は人類を救済されるためにサタンからの三大試練を克服されました。その基準を世界的に超えたのが世界大戦における勝利だったということです。この結果、キリスト教国家群は世界版図を形成するにいたり、世界は一気に再臨主を迎えて地上天国へと向かう準備が整っていたということです。

第四に、この世界大戦において神様側の主権が復帰されたということです。この時期を境にして真の御父母様が誕生され、地上は神様が主権を持つ版図へと復帰されるはずだったのです。

このように世界大戦が摂理的な理由においても起こるようになっていたということを原理は説明します。そして、世界大戦における神様側の勝利は、世界を大きな天運の中に包み込もうとする流れをつくっていたということです。

今の時代、日本でも戦争を知らない世代が増えていると思います。戦争を過去のいやな思い出として忘れるべきだと主張する人も多いかもしれません。ですが、世界大戦という戦争が歴史に刻まれたのには、そこに大きな摂理的な理由もあったことを認識するようになると、これは忘れるべき忌まわしい出来事ではなかったと改めて感じます。皆様はいかがですか。

【御言】

第一次世界大戦(1914～1918)

第一次世界大戦に対する摂理的概要

・第一次世界大戦は、政治的な面から見れば、アベル型の民主主義政体と、カイン型の全体主義政体との戦争でした。

- ・経済的な面から見れば、天の側の帝国主義とサタン側の帝国主義との戦争でした。
- ・思想的な面から見れば、キリスト教を信奉した(米・英・仏など)アベル型の国家群と、当時のキリスト教を迫害した(ドイツ・オーストリア・トルコなど)カイン型の国家群との間に展開された戦争でした。

【感想】

ここでは第一次世界大戦における外的な概要が説明されています。それを政治的概要、経済的概要、思想的概要として紹介しています。

まず政治的な面から見れば、米英仏などは宗教改革から進められた民主主義によって立てられた国家であって、アベル型の民主主義政体として紹介されています。これに対して、民主主義とは反対の神様無き全体を考える全体主義という理念の下に構築された国家として、ドイツ、オーストリア、トルコなどが紹介されています。ドイツやオーストリアなどはヨーロッパと言うことで、キリスト教の文化が根付いていると思われるかもしれませんが、その歴史は複雑で、世界大戦においてキリスト教国家群が勝利したが故にその文化が吹き込まれたというのが本当のようです。

経済面ではどちらも帝国主義を取りますが、天の側の帝国主義とは頂点に人ではなく、神様が臨在され、神様の下において経済がコントロールされるという理念がしっかりとあったのだと思います。それにくらべてサタン側の帝国主義とは頂点に人間が君臨し、その人間の意志によって経済は運営されるという理念です。この流れは民主主義においては市場原理に発展し、市場は神様の見えない手によって運営されているという思想に至ります。これに比べてサタン側の帝国主義は社会主義の統制経済に発展し、国家の一部の人間が国家内におけるすべての経済活動を統制するという思想に至ります。

思想的とはありますが、これは宗教的な背景になると思いますが、米英仏などはキリスト教を信奉したキリスト教国家群であり、これに対してドイツ、オーストリア、トルコなどはキリスト教を迫害した国家群だったのです。この戦争において、キリスト教国家群が勝利することにより、キリスト教の迫害がなくなり、一気にキリスト教が世界に広がる基盤ができたということもあります。

こうまでして、キリスト教が世界的な版図を獲得するまでになりながら、真の御父母様を受け入れることができなかったというのは、神様の目には痛恨の限りだと思います。世界大戦を通じて、キリスト教は間違いなく世界的な版図を得るに至ります。そのような歴史的な流れを皆様は学ぶ機会がありましたでしょうか。原理を聞いて、初めて知ったというのが私の素直な感想です。

【御言】

復帰摂理から見た第一次世界大戦の結果

- ・第一次世界大戦で天の側が勝利することにより、
 - ① 神様の三大祝福を世界的に復帰するための蘇生的な蕩減条件を立てました。
 - ② イエス様に対するサタンの試練を世界的に越える立場から見れば、神様の第一祝福を世界的に復帰できる蕩減条件を立てました。
 - ③ 民主主義が勝利を得るようになり、天の側の主権復帰の蘇生的な基台を造成しました。
- ・再臨主が誕生される基台が造成され、再臨摂理の蘇生期が始まったのです。

【感想】

第一次世界大戦においてはキリスト教国家群の民主主義圏が勝利を収めるのは、世界史を学ばれた方ならどなたもご存じだと思います。ですが、これが天の側の勝利であったということは、原理を学ばなければ分からないことだと思います。世界大戦は神様の世界的な摂理でもあったのです。その第一次摂理において、無事に神様の側の勝利が確定し、摂理は大きく進んだということです。

ここで蘇生的な段階を勝利したと表現されていますが、世界大戦においても三段階の摂理という

創造原理的な法則が適用されます。したがって長成期的な段階としての第二次世界大戦があり、さらに完成期的な第三次の世界大戦があったということです。

世界史では第三次世界大戦は記録されておらず、そのような戦争がなかったかのように思われるかもしれませんが、摂理的には第三次世界大戦はあったということです。ただ、両陣営が武器を取って戦争をしたのではないので、世界史は世界大戦とは記録していないのです。

世界大戦の意義は前回も紹介しましたが、ここではその蘇生的な段階を成就したと説明しています。つまり、世界的に三大祝福を復帰するための蘇生的段階、天の側の主権復帰の蘇生的な基台が造成されたということです。さらにイエス様の第一試練を世界的に超えたということです。

この第一次世界大戦の勝利によって再臨主が誕生される基台が造成されたということです。つまり、真の御父母様が誕生されるためには世界大戦という準備を神様がされたということです。そして、それをもって再臨摂理は蘇生期が始まります。

このように真の御父母様は世界的な条件の下に誕生されており、まさに人類においては福音中の福音だったのです。皆様はいかがですか。学校で学ばれた世界大戦とは少し違った内的な摂理的歴史としての世界大戦を見ると、世界情勢が以前よりハッキリと見えてくるのではと思います。

【御言】

第二次世界大戦

- ・第二次世界大戦は、第一次大戦によって蘇生的な勝利の基台の上に立つ民主主義(米・英・仏)が、全体主義(独・日・伊)と戦って、長成的な勝利の基盤を造成する戦争でした。
- ・第二次世界大戦が天の側の勝利に終わったので、
 - ① 神様の三大祝福を世界的に復帰するための長成的な蕩滅条件を立てることができました。
 - ② イエス様に対するサタンの試練を世界的に越える立場から見れば、神様の第二祝福を世界的に復帰できる蕩滅条件を立てました。
 - ③ 民主主義世界が長成的な基盤をつくって、主権復帰の長成的な基台を造成しました。
- ・再臨主を中心として、新しい天と新しい地を建設するときになり、再臨摂理の長成期に入るようになりました。

【感想】

第二次世界大戦において、日本は敗戦します。そのような状況下で、神様の摂理は大きく進んだのです。私たちにとって受け入れるのは中々難しいのですが、日本の敗戦によって、天の側は大きく勝利したということです。もちろん、敗戦したのは日本だけではありません。当時の全体主義国家として同盟国のドイツとイタリアも敗れることになります。

では、第二次世界大戦において天の側はどのような進展があったのでしょうか。

まず、神様の三大祝福を世界的に復帰する長成的な蕩滅条件が成立したということです。第一次においては蘇生期でしたが、第二次では長成期に入ります。

次にイエス様の受けられた三大試練のうち、第二試練を無事に勝利したことで、神様の第二祝福が世界的に復帰されます。このことによって、戦勝国家は植民地を拡大するのではなく、多くの植民地を独立させ、子女として国家を誕生させるという歴史を刻むようになります。

そして、主権復帰の長成的な基台を造成できたということです。

このようにして、真の御父母様を中心として新天新地を建設する時代に入り、再臨摂理は長成期に入るようになったということです。

このような摂理的な事実は学校の世界史の授業では習いません。原理で紹介するが故に初めて分かることだと思います。日本においては第二次世界大戦は原爆を投下され、焼け野原になった都市を見つめながらの悲しい経験をした歴史かもしれません。その日本の敗戦を天の側の大きな勝利だとして喜べというのは、ある意味、国民感情として無理があるかもしれません。

ですが、戦争を知らない世代が増えるに従い、また、日本が戦後大きく経済的に発展した歴史

を刻むにつれて、日本の敗戦を肯定的に見つめることのできる人も増えてきたと思います。

そして、真の御父母様はそのような世界大戦でサタン側だった日本という国家を愛して復帰されようとしたというのです。

ですので、韓国を植民地化した日本と言うだけではなく、世界大戦においてサタン側の国家だったという摂理的な苦難を越えて、日本を愛された真の御父母様に私たちは本当に大きな感謝の気持ちを届けるべきではないかと私は思います。

【御言】

第三次世界大戦は必然的に起こるのであろうか

- ・人類歴史の終末には、サタン側も天の側もみな世界を主管するところまで行かなければならないので、民主と共産の二つの世界が両立するようになります。
- ・第一次、第二次の大戦は、分立するための戦いであり、この分立された二つの世界を統一するための戦いが必要ではありません。ゆえに第三次大戦は、必ず必要ありません。
- ・その戦いには二つの道があります。第一は、武器でサタンを屈伏させることであり、第二は、理念による内的な戦いです。この中で、いずれの道を選ぶかは、人間の責任分担の遂行いかんによって決定される問題です。

【感想】

学校で習う世界史においては第三次世界大戦という戦争はありません。何故なのでしょう。それは武器を用いていないからなのです。武器を用いて殺し合うというような戦争を回避することができたからなのです。ですが、原理は第三次世界大戦は明確にあったと説明します。

第二次世界大戦後、アメリカを宗主国とする民主主義圏とソ連を宗主国とする共産圏が形成され、世界は真っ二つに分断され、冷戦が続いていたことは皆様もご存じだと思います。この冷戦状態のことを原理は第三次世界大戦であったと表現してるのではと私は思います。つまり、武器を取ることはありませんでしたが、軍拡を続け、思想的、理念的な戦いに向かうことで、大勢の人々が殺されるのを回避することができたというのです。もちろん、冷戦を終結させたキーパーソンは真の御父母様でした。

そのような意味において、人類は大きな惨事を回避することができたというのです。そのことを、この部分では紹介しています。

ですので、摂理史的に見れば、第三次世界大戦も実際にあったのであり、それは神様の側の勝利に終わっているというのです。このように世界大戦を三次にわたって経験して、神様の摂理は完成期に向かったというのがこの世界大戦の意義だと思います。

ですので、今の新しい時代は、民主主義世界も行き詰まり、共産主義世界も行き詰まり、真の御父母様を中心とする神主義が世界をリードする新しい時代を迎えているというのではないのでしょうか。その神主義の下に、物質は神様の形状から、精神は神様の性相からという二性性相の理念により、両者が統一されうることを主張する新しい文明がすでに始まっているというのです。

私たちはその先駆者なのです。皆様にはその自覚はありますでしょうか。

【御言】

復帰摂理から見た第三次世界大戦の結果

- ・神様は、復帰摂理の最終的摂理である三次の大戦に勝利することによって、
 - ① 三段階まで延長を繰り返してきた復帰路程の全体を蕩滅復帰なさろうとするのです。
 - ② 復帰摂理は、墮落人間が神様の命のみ言により、神様に対する心情を復帰して霊肉共に救いを受け、神様の血統を受け継いで完成されるのです。
- ・三次にわたる世界大戦における天の側の勝利は、復帰摂理のすべての基台を完全に蕩滅復帰して、悠久なる歴史の期間を通じて、神様が完成させようとしてきた創造本然の理想世界を実現

していくようになるのです。

【感想】

第三次世界大戦も必然的に起こっており、その結果は天の側の勝利に終わっています。もちろん、世界史はそのような戦争の事実を記していませんけど、原理的に見ると、武器を手を取ることはありませんでしたけど、思想面における世界を二分する闘争があったというのは皆様もご存知だと思います。

では、第三次の世界大戦が神様の側の勝利に終わることにより世界はどうなったのでしょうか。それが簡単に紹介されています。まず、復帰路程の完成期が蕩滅され、復帰路程全体が蕩滅されたということです。さらに、私たち墮落人間が神様から命の御言を賜り、神様に対する心情を復帰し、霊肉共に救いを受けて、神様の血統を受け継いで、完成されるようになるということなのです。

ここに簡単に信仰路程の内容が紹介されています。私たちは御父母様の御言を聞くだけではないのです。聞いた御言を通じて神様に対する心情を復帰しないといけないのです。ですので、原理を聞いた人は皆一様に神体験をするということです。そのような経験を通じて、徐々に御言を実践して実体化されるようになると、私たちは霊肉共に救われてくるということです。そして、最終的に祝福を受け、血統転換という過程を通過して、完成しなければならないということです。ですので、祝福を受けて血統転換をしたから終わるという訳ではありません。最後の、完成するという段階まで進まなければならないのです。

そのような路程が定着することで、三次の世界大戦はすべての基台を完全に蕩滅復帰して、過去の悠久なる歴史に終止符を打ち、創造本然の理想世界が始まる予定だったのです。

今の時代もそうだと思います。神様の直接主管圏の時代を迎え、過去の歴史の常識が通用しない時代が到来しており、新しい人類歴史において、神様の創造理想が顕現する時代を迎えているということです。それであるがゆえに、創造理想に反するあらゆる社会体制が行き詰まるようになるということです。

また、その行き詰まった社会の打開策も創造原理に全て記されているというのが、原理的視点だと思います。このように、第三次世界大戦後、人類は新しい歴史を迎えているのです。その歴史の中で私たちは生きている摂理の生き証人でもあるのです。

【御言】

第6章 再臨論

- ・マタイ福音書 16 章 27 節に、イエス様は再臨されるということを明確に言われました。しかし、その日とそのときは、だれも知らないと言われました(マタイ 24:36)。
- ・しかしながら、神様は預言者にその隠れた事実を示さないでは、何事もなされない(アモス 3:7)と言われたみ言を考えると、神様はイエス様の再臨に関する秘密を、必ず、ある預言者に知らせてから摂理されます。
- ・したがって、光の中にいるすべての信徒たちを通じて、必ず啓示してくださることは明らかです。

【感想】

イエス様が再臨されるということは明確に聖書でも預言されています。ただ、それがいつどこに再臨されるのかということは、聖書には明確に記述されていないということです。ですが、復帰路程においてもそうでしたが、神様は自らの予定を必ず地上人に知らせてから摂理をされますので、聖書のどこかにその記述はあるということです。

ただ、その記述が一般の人にはわからないように秘密のようにして記録されているということをここでは紹介しています。

原理はそのような秘密を解き明かしたものでもあります。ですので、再臨主がどこに再臨されるのかも明確に説明し、その上で真の御父母様が再臨のメシヤであるということを結論付けています。

キリスト教徒の方々は何千年という年月をかけて、再臨されるイエス様を待ち望んでこられました。ですが、その方が再臨されるや歓迎されるのではなく、異端として排斥したのです。

私たちが原理を知る機会が与えられているということは、この再臨論を通じて、イエス様がどのように再臨されるのかという啓示を受けているのと同じなのです。原理は神様から発せられた理論です。その内容を知らされるということは、神様の言葉を受ける、つまりは啓示を受けるに等しいことだと私は思います。

皆様はいかがでしょう。キリスト教が数千年かけて待ち望んできた人に出会える機会を与えられようとしているのです。

ただ、道端にいた自分にこのような恩恵を受けなければならなかった神様の心情は、やはり悲しい恨があると思います。それを思うと、用意されたクリスチャンの方々がいち早く再臨主の前に復帰されることを祈るばかりです。もちろん、神様の救いはクリスチャンだけではなく、万民の救済です。皆さんも躊躇することなく御父母様の前に出られることを祈っています。

【御言】

第1節 イエス様はいつ再臨されるか

① イエス様が再臨されるときのことを、終末といいます。ところで、現代が終末であるということは、既に人類歴史の終末論において明らかにしました。したがって、現代がとりもなおさず、イエス様が再臨されるときなのです。

② 摂理的な同時性時代の対照表を見れば、イエス様は、蕩滅復帰摂理時代(旧約時代)の2000年を経たのちに降臨されました。それゆえ、これを実体的な同時性をもって蕩滅復帰する再蕩滅復帰摂理時代(新約時代)の2000年が終わるころに、再臨されます。

③ 第一次世界大戦が終了したあから再臨期が始まりました。

【感想】

イエス様はいつ再臨されるのでしょうか。イエス様の再臨される時を終末と呼ぶことは、既に原理で学ばれていると思います。そこでは現代がまさに終末であると説明されていました。そうです。今が終末なのです。今の現代が終末なのです。

その理由をもう少し詳しく述べています。摂理的な同時性から見た観点からも、蕩滅復帰摂理時代と実体的な同時性をもって蕩滅復帰する再蕩滅復帰時代はイエス様の誕生された2000年後に終わります。第一次大戦が終了した時点から再臨期は始まっており、それが現代に至っているというのです。

ですので、真の御父母様は今の時代に、今現在、地上に降臨されているのです。真のお父様は聖和されましたが、真のお母様が地上に顕現されており、まさにメシヤを地上に迎えている時代が今なのです。

ですので、まさに今なのです。今、この瞬間に、イエス様は再臨されて摂理を進められているというのです。

ですので、イエス様を空を見上げて待っている時代ではないというのです。もう、イエス様は地上に誕生されているのです。そして、その再臨のイエス様に指導を受けて、救われているのが私たちなのです。その救いの輪はどんどんと広がっており、神様の版図は今も拡大されています。

真の御父母様はまさに原理原則通りに歩まれています。その原理がメシヤの誕生を現代だと宣言しているのです。皆様はこの言葉に耳を傾けますか。どんなに真の御父母様の外見的な言動を真似たとしても、結果として原理がその人を評価する基準になります。私たちも本物になるためには、原理を实践せずしては不可能だと思います。

メシヤは降臨されています。イエス様は現代に降臨されたのです。皆様は、この啓示を受け入れますか。

【御言】

第2節 イエス様はいかに再臨されるか

- ・聖書を解釈するに当たっては、その観点をどこにおくかということが、最も重要な問題であるといわなければなりません。
- ・イエス様が初臨のときにも、聖書的根拠によって、メシヤは雲に乗って来られるであろうと、信じていた信徒たちは少なくありませんでした(ダニエル 7:13、ヨハネⅡ 7～8)。
- ・しかしイエス様は、実際には地上に肉身をもって誕生されました。
- ・ゆえに、再臨なさるときにも、そのような立場から、聖書を詳しく調べてみなければなりません。

【感想】

イエス様が再臨されるとき、今のキリスト教徒が信じているように空から降りてこられるのでしょうか。そうして、自分が空に引き上げられてイエス様に会おうと信じている方が大勢いるということです。これは2000年前にメシヤが来られると信じていたユダヤ人においても起こったことなのです。

ですが、原理はそのようにイエス様は再臨されないと説明します。では、空に何か霊のような形でふわふわと現れるのでしょうか。いいえ、そのようなこともありません。イエス様は何度も啓示で現れたり、霊的に弟子たちの前に登場されたこともあるのです。ですので、それをもって再臨とは呼びません。

では、どのような再臨なのでしょうか。それが地上に肉身をもって誕生されるということなのです。つまり、女性の胎中から誕生されるということなのです。人間の墮落は地上で行われました。それであるが故に罪のあがないも地上で行う必要があります。それを考えると、イエス様は地上に誕生されなければならないということなのです。

では、空を見上げているクリスチャンに対して、イエス様が地上に肉身をもって、女性の胎中から誕生されたと伝えたとしたらどうでしょうか。かたくなに信じれば信じるほど、それは異端だと排斥せざるを得ないということです。

私は道端の人間ですので、イエス様が空から再臨されるという信仰を持っていませんでした。それであるがゆえに、メシヤが女性の胎中から誕生されたと聞かされても、人間なのだから当然だと思うのですが、これは異邦人であるが故の道理なのかもしれません。

今の時代、いくら空を見上げてもイエス様は再臨されません。もしかしたら、再臨のイエス様は飛行機に乗ってこられるということ、昔は飛行機も無かったので、そう表現せざるを得なかったのではと私は思っているのですけど、皆様はいかがですか。

【御言】

イエス様の再臨は地上誕生をもってなされる

- ・ルカ福音書 17 章 24 節から 25 節を見ると、イエス様は再臨されるときに、「多くの苦しみを受け、この時代の人々に捨てられねばならない」と言われました。
- ・もしイエス様が、雲に乗って、天から再臨されるとするならば、このようなイエス様を信奉しない人がいるであまりでしょうか。
- ・しかし、イエス様が地上から誕生された身をもって、現れるなら、異端者として追われ、苦しみを受けることが予想されたので、この時代の人々から捨てられなければならないと言われたのであります。
- ・したがって、この聖句はイエス様が肉身をもって再臨されることによるのみ、成就されるのです。

【感想】

真の御父母様が異端者としてクリスチャンから排斥されることも聖書の預言にはあるということです。ですが、予定論を理解されていると分かりますが、これはメシヤを迎える選民が責任分担を果たせなかったときの預言です。神様は人間の責任分担に関与できませんので、責任分担が果

たされた時と果たされなかった時の両面の預言をされます。

原理は、御父母様が女性の胎中から肉体をもって誕生されることを説明しますが、天から降臨されると信じているクリスチャンにおいては受け入れがたいことなのです。ですので、必然的にこの時代の人々に捨てられると聖書は預言しているのです。

そのような中、捨てられたと思われた世の中において、御父母様を受け入れたのが私たち食口なのです。

もし、御父母様が聖書の預言どおり、天から、静かに栄光の中に降りてこられたとしたら、誰が御父母様を再臨のメシヤだと信じないでしょうか。聖書の文字通りのことが起こったので、すべてのクリスチャンは躊躇なく受け入れるでしょう。ですが、そのようなことが決して起こらないので、この世から捨てられるという預言が成就されるというのです。

また、この預言があるという理由も、イエス様が肉体をもって再臨されることを明確に提示していると原理は説明します。

真の御父母様はこのようにこの世から捨てられ、孤独の中で歩まなければならなかった時期もあったというのです。では、皆様はいかがでしょうか。真の御父母様を異端者として排斥しますか。この御言を学ばれているということは、そうではなく、受け入れているということなのです。

私は、そのような天から再臨者が来られるということを信じていなかったという道端の人間でしたので、排斥するほどかたくなではありませんでしたが、無関心だったという部類の人間です。ですが、御父母様を受け入れると言うことが孤独の中で歩まれた御父母様においてどれほど慰められるのかということを知ったのもこの部分でした。皆様はいかがですか。

【御言】

マタイ7:22～23

・イエス様がマタイ福音書7章22節から23節にも、「その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言し、悪霊を追い出し、多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしは、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』と言われたみ言のあるのを見いだします。

・イエス様が再び地上に肉身をもって現れるならば、雲に乗って来られるものと信じている信徒たちは、必ず彼を排斥するに相違ないので、彼らは不法を行う者として、見捨てられざるを得ないであろうということを嘆かれたのでした。

・それゆえに、このみ言も、イエス様が雲に乗って再臨されるとすれば、このとおりのことが起こることとはあり得ません。

【感想】

ここでは何度もイエス様は雲に乗ってこられませんかと説明しています。なぜそのような説明が必要なのかというと、既成教会のクリスチャンの方々を救うためなのです。人類歴史を引っ張ってきた選民としてのキリスト教徒は再臨主である御父母様を排斥し、異端として迫害することによって、神様の前に不法を働いているというのです。かくも偉大な功労を築いてきたクリスチャンを神様は見捨てなければならないような立場にしてはいけなないと、御父母様は懸命に説かれたのだと思います。

私たち先入観のない凡人には、再臨主は肉体を持って誕生されたといわれても、はいそうですかで簡単にすまされる世界があるのです。かつての選民であるユダヤ民族にイエス様が排斥されたように、同時性をもって御父母様がクリスチャンに排斥されることは、神様は見るに堪えないということではないかと思います。

クリスチャンは御父母様を排斥し、自分はまっとうな信仰をやり遂げたと霊界に行った時、愕然とするというのです。ですので、皆様もしっかりと覚えておいて欲しいのです。再臨主は地上に肉身を持ってこられるのですよと。

海外に宣教に出かけられ、クリスチャンに話しかける時に、「なぜ、イエス様は雲に乗ってこられないのですか？」という質問は必ず出ます。皆様はいかがでしょう。その理由をちゃんと説明できますか。御父母様が肉身を持って誕生されているのだから現実を見れば良いというわけにはゆかないのです。しっかりと、原理的に、再臨主は雲に乗ってこられないと説明できるように、ここで紹介されている内容も理解しておきたいと思います。

【御言】

イエス様はなぜ雲に乗って再臨されると言われたのか

・ここには、二つの理由がありました。

① 第一には、偽キリストの惑わしを防ぐためでした。

② 第二には、険しい信仰の路程を歩いている信徒たちを激励するためでした。

・イエス様は、弟子たちが生きている間に、再臨されるかのように話されたので(ヨハネ 21:18～22、マタイ 16:28)、弟子たちはイエス様の再臨を熱望する一念から、ローマ帝国の圧政とユダヤ教の迫害の中にあっても、かえって聖霊の恩恵を受けて、初代教会を創設したのでした。

【感想】

イエス様は当時、なぜ再臨主が迫害されるかもしれないことを知りつつ、自分は雲に乗って再臨されると語られたのでしょうか。また、何ゆえに私はすぐに来ると語られたのでしょうか。そこには原理が示す2つの理由があったということです。

第一になぜ雲に乗ってこられると語られたのかということですが、もし、イエス様が再臨されるとき、自分は肉体を持って女性の胎中から生まれると語られたとしたら、誰もがわれこそはイエス様の再臨だと言うことが可能になるということです。つまり、偽キリストの問題を防ぐことができなくなるということです。それで、時が至り、イエス様の真意を理解する人物が現れるまでこの秘密を隠して置かれたということです。

次になぜイエス様はすぐに来ると語られたのでしょうか。それは苦難にあえぐクリスチャンに希望の光を灯すためであったということです。もし、イエス様の再臨が現実のように2000年後だと語ったとしたら、中世を生きてきたクリスチャンは自分の生きている間にはイエス様に会うことはできないと失望し、キリスト教の存在自体が危うくなるというようなことがあったということです。それであるがゆえに、イエス様は中世においても、2000年前においても、イエス様が再臨されるのは今であるという希望をクリスチャンに持たせるためにこのようにすぐ来ると語られたということです。

このようなことを解明したのは原理が初めてだと思います。そして、ここまで理由を明確に知らされているということは、真の御父母様はイエス様のことを誰よりも理解されており、知っておられたということではないでしょうか。

皆様はいかがですか。単に聖書の記述がおかしいと指摘するだけではなく、なぜおかしいように書かなければならなかったという理由までも説明する原理に間違いはないと私は思います。

【御言】

第3節 イエス様はどこに再臨されるか

イエス様はユダヤ民族の内に再臨されるか

・イエス様がユダヤ民族の内に再臨されるのだと信じている信徒たちが多いです(黙示録 7:4、マタイ 10:23、マタイ 16:28)。

・イエス様はユダヤ民族には再臨されないばかりでなく、その偉業までも再臨のために実を結ぶ他の国と民族に与えると、明らかに言われました(マタイ 21:33～43)。

・イエス様が十字架で亡くなられてからのちのイスラエル選民は、アブラハムの血統的な子孫をいうのではなく、アブラハムの信仰を継承した、キリスト教信徒たちです。

【感想】

皆様はイスラエル選民というのをご存じですか。ユダヤ民族の時代から神様はある特定の民族を摂理の中心民族として用いてこられたということを、摂理史のところで学ばれたと思います。聖書には、その歩みの歴史が刻まれているのですが、その聖書を根拠に再臨主はユダヤ民族の中に再臨されると信じている信徒も多いといえます。

ですが、イエス様はユダヤ民族には再臨されないと明確に原理は説明します。イエス様を迫害し、十字架にかけた段階でユダヤ民族は選民としての資格を失い、神様の摂理からは外されるようになります。そして、その信仰を継承したのは、イエス様を信じ、受け入れたクリスチャンだったということです。

この再臨期においても同じ事が言えるのです。神様の召命される選民とは、イエス様の信仰を継承したクリスチャンではなく、御父母様を信奉し、侍っている私たち食口の群れだということです。なぜでしょうか。クリスチャンは御父母様を受け入れることができず、排斥し迫害して、さまざまな心情の十字架にかけてしまったということです。その結果、クリスチャンは選民としての資格を失い、その使命は御父母様を信奉するものに受け継がれたということです。それが私たちだということです。

ですので、神様の用いられる選民とは血統的な子孫をいうのではなく、信仰を継承した民をいうのです。真のご家庭におかれても、血統的に子孫であるだけで、摂理を継承するとはいえないのです。御父母様の信仰を継承した御子女様だけが、摂理を継承した選民を率いるリーダーとなっていくのではないのでしょうか。そのことを原理はここで紹介しているのだと思います。

ですので、私たちも血統が転換されただけでは選民としての使命を果たすことはできないので、真の御父母様の心情を相続し、信仰を全うしなければ、かつてのクリスチャンのように摂理から外れて行くというようなことがいくらでもあるということです。皆様は大丈夫ですか。

【御言】

イエス様は東の国に再臨

- ・黙示録 7 章 2 節～3 節を見ると、日の出る方、すなわち東の方から天使が上ってきて、最後の審判において選ばれた者である 14 万 4 千の群れに印を押されると言われました。
- ・黙示録 14 章 1 節を見ると、再臨されるイエス様は、選ばれた 14 万 4 千の群れの額に、小羊と父の印を押されると言いました。
- ・しがって、神様の偉業を受け継いで、イエス様の再臨のための実を結ぶ国は東方にあるということが分かります。

【感想】

これからイエス様の再臨される場所をひもといて行きます。今回は、地域の限定にとどめます。具体的にどこの国に再臨されるのかは次回のブログになりますので、お待ち下さい。

まず、イエス様はユダヤ民族には再臨されないと前回のブログでも紹介しました。ですので、イエス様は中東には再臨されません。その地域を限定する言葉が聖書には記されています。それが、日出る方、つまり東方だということです。

つまり、イエス様の再臨の結実を見るのは東方の国にあるということです。この再臨論が明確になると自分がイエス様の再臨だと自称する人の問題点も明確になるのです。つまり、日本人にイエス様が再臨されるはずもないということです。

では、東方の国とはどこの国なのでしょう。世界情勢において、東方の国とはまさに東洋を指します。再臨のイエス様は東洋に来られるということが聖書で明確に預言されているのです。

この話を聞くと、西洋の敬虔なクリスチャンの方々は、何と不敬なと思われる方もいるかもしれませんが、原理は西洋にはイエス様は再臨されないと明確に説明します。クリスチャンの方々もまさかと思われるような国からイエス様の再臨の知らせは届きます。

ですので、イエス様の再臨に際しては盗人のように訪れることもあるので、意識を常に広く持ちな

さいと聖書が警告している部分もあります。

イエス様が再臨されるときには東洋人として登場される。そのことを原理は明確に説明しています。では、イエス様はどの国に再臨されるのでしょうか。それは次回のブログで紹介します。真の御父母様はどこの国に誕生されましたか。まさに東洋だということです。

【御言】

東方のその国は、すなわち韓国である

- ・古くから、東方の国とは韓国、日本、中国の東洋三国をいいます。
- ・日本は全体主義国家として、再臨期に当たっており、その当時、韓国のキリスト教を過酷に迫害した国であったので、サタン側の国家でした。
- ・中国は共産化した国であるため、サタン側の国家です。
- ・したがって、イエス様が再臨される東方のその国は、すなわち韓国です。
- ・メシヤが降臨される国は、次のような条件を備えなければなりません。

【感想】

まず東方の三国が紹介されています。韓国、日本、中国です。再臨主はこの三つの国のどこかに再臨されるということです。東方の国とはこの東洋の三つの国を指すということです。

ここから消去法になります。不適切な国家を除去してゆきます。まず日本ですが、イエス様が再臨されるときには、全体主義国家として過酷にキリスト教を迫害したのでサタン国家だということです。私たち日本人はそのような摂理的な事情をよく知らないことがあります。ですので、再臨主は日本に來られると述べているような人がいるかもしれませんが、再臨論を明確に理解できるとそのようなことはあり得ないということが明確になるのです。

中国は現在も共産主義を中心とする共産主義国家です。唯物論に立脚した共産主義はサタン側の思想であるために、中国も除去されます。

そこで残った国が韓国だということです。ここでは、消去法を用いて、不適切な国家を除外してゆくという方法をとりましたが、今後、韓国は神様によってどのように準備されたのかということを明確にしてゆきます。

イエス様は韓国人として再臨されます。皆様は分かっておられますか。単なる消去法だけではない韓国であるという理由があるのです。日本はサタン側だったのかと落胆することはありません。真の御父母様によって日本は神側の母の国になったのです。このギャップがあまりにも大きいために、日本の蕩滅は大変なものがあつたのです。

ですが、日本が勝利することで、間にある国家がすべて復帰されるのです。真の御父母様は韓国に誕生されます。決して日本でもアメリカでも西洋でもありません。皆様は再臨論が分かっておられますか。これが分かっているれば、日本人が再臨主になるなど考えることもできないということです。皆様は大丈夫ですか。

【御言】

40 日サタン分立基台

- ・韓国がメシヤを迎える国となるためには、原理的に見て、宇宙的なカナン復帰のための「40 日サタン分立の民族的な基台」を立てなければなりません。この基台の上に、イエス様が韓国に再臨されるならば、韓国民族は第三イスラエル選民となるのです。
- ・したがって、第三イスラエル選民は、宇宙的なカナン復帰路程を出発するための「40 日サタン分立基台」を立てるためには、サタン側のある国家で、40 数に該当する年数の苦役を受けなければなりません。
- ・このため、韓国民族は、日本帝国に属国とされ、1905 年の乙巳保護条約以後、1945 年に解放されるまで 40 年間、第一、第二イスラエル選民に劣らない迫害を受けたのです。

【感想】

韓国は40数に相当する期間、サタン側の国家だった日本によって多くの苦痛と迫害を受けたのです。ただ、この迫害は摂理的に必要であったということなのです。韓国の人にとって日帝時代とは暗い迫害の屈辱の期間かもしれませんが、御父母様を迎えるための第三イスラエルとして活躍するための、天が与えた試練だという側面をここでは紹介をしています。もし、この迫害を甘受することができなければ、民族的な蕩滅条件は立てられず、選民としての資格を失うことになるのかもしれない。

こうして、韓民族は40数の苦役期間を通じて、第三イスラエル選民となったのです。ですが、このとき、韓民族とはかつてのユダヤ民族と同じ過ちを犯します。来たるべき再臨主を心情の十字架にかけてしまったのです。真の御父母様を拒絶し、迫害することで、かつてのユダヤ民族のように、苦役によって立てられた選民としての地位を失います。

その結果、第三イスラエルが失敗する中、第四イスラエルとして立てられたのが、御父母様をメシヤとして信奉する私たちの教会の食口です。彼らの懸命の努力によって、真の御父母様は世界中で受け入れられ、そして、ついには世界をリードする指導者としても世界史に登場することになります。

韓国には特別な思いのある日帝時代だと思いますが、その摂理的な必然性というものを理解するようになると、神様も日本人を遣わして蕩滅条件を立てさせるように歴史を動かしたという見方もできるのです。

このように御父母様を受け入れ、摂理を担う人物には責任が伴います。私たちが御父母様に出会うために、家系においてさまざまな苦難を経験し、条件を整えた人物がいることは家系図を作ると明確になります。その意味で、私たちも導かれるのは偶然ではないということです。多くの苦難という準備の土台の上に、私たちは召されているのです。

【御言】

この国は神様の一線であると同時にサタンの一線でなければならない

・神様とサタンの対峙線において、勝敗を決する条件としておかれるものが供え物です。韓国民族は宇宙復帰のため、この一線におかれた民族的供え物であるがゆえに、あたかも、アブラハムが供え物を裂かなければならなかったように、民族的な供え物も38度線で裂き、「カイン」「アベル」の二つの型の民族に分けることによって、民主と共産の二つの世界として結実しました。

・それらが再び韓国を中心として、世界的な規模で衝突するようになりました。それゆえ、宗教と思想、政治と経済など、あらゆるものが、韓国において摩擦しあい、衝突して、世界へと波及していきます。

【感想】

世界の縮図が韓半島で繰り広げられているということです。民主主義世界と共産世界の対立、政治においても、経済においても世界情勢を反映するようなことが韓半島では起きています。あたかも神様の前に捧げられる民族的供え物のように韓民族は真っ二つに引き裂かれ、アベルとカインに別れてしまいました。

そのようにカインとアベルを一つにするためには、かつてヤコブ路程で学んだようにヤコブがエサウを愛で抱かなければなりません。そのことは原理的に明確でありながら、多くの韓国の方々はそのような重要な原理を未だに知らないという人も多いのです。

そして、このヤコブ家庭において、ヤコブを協助し、エサウとの一体化において重要な役割を果たしたのが母親のリベカだったということです。日本は母の国としてリベカの位置に立っているということです。ですので、韓国は日本の母子協力がなければ北朝鮮と和解できないようになっているということです。

原理が分かれば韓半島の統一は極めてシンプルなことが分かります。ただ、韓国において、この

原理を知らない人があまりにも多いため、暗中模索で南北統一を模索しているということもあると思います。

それであるがゆえに、韓国と日本がぎくしゃくしていても南北は統一できません。どれだけ国を動かす人が原理を理解しているのかということが、国家の発展につながっているということです。

ですので、韓半島が世界版図の縮図であるがゆえに、南北が統一されなければ世界は一つになれないという道理でもあるのです。ですので、私たちの教会でも韓半島の統一に向けて尽力しているのです。

つまり韓半島の国境線である38度線は神様とサタンが対峙する一線でもあるということです。そのような摂理的な視野に立って、真実の世界平和を唱えられたのが真の御父母様なのです。ですが、韓国の指導者において、世のような世界的なビジョンを持った人物がいるのか。韓国内における地位に固執し、自分の政党の利益しか見えていない器の小さい人物が国を動かしているとしたら、その人々は自分を指導できる人物と出会うことができなくなるということも起きると思います。

皆さんはどのような視野を持っておられますか。日本しか見えていないようなことはありませんか。真の御父母様には世界が視野に入っていたのです。そして、その世界摂理において、韓国がとても重要な位置を占めると摂理的に判断されているのです。皆様には見えていますか。世界という版図が。

【御言】

この国は神様の心情の対象とならなければならない

① 神様の心情の対象となるためには、まず、血と汗と涙の道を歩まなければなりません。悲しまれる父母の心情の対象となって、忠孝の道を歩んでいく子女が、安逸にその道を歩むことはできません。それゆえ、韓国民族が歩んできた悲惨な歴史路程は、神様の選民として歩まなければならない苦難の道でした。

② 神様の心情の対象となる民族は、善なる民族でなければなりません。韓国民族は単一血統の民族として、一度も他の国を侵略したことはありませんでした。

③ 韓国民族は先天的に宗教的天稟をもっていて、敬天思想が強く、古くから、忠・孝・烈を崇敬する民族性をもっています。

【感想】

神様の心情の対象になる。これは簡単なことではありません。なぜなら神様は人類歴史を摂理されながら、あまりにも多くの悲しみを経験されているからなのです。人間にたとえてみると、何の苦しみも苦労も経験してこなかったお嬢様が、人生において艱難辛苦を経験した貴方の相談相手になれると思いますか。何も知らないお嬢様に自分の苦労を話しても分かってもらえない、単なる同情でしか理解されないと思ってしまうことはありませんか。人間において、そうなのですから、神様においてはなおさらなのです。ですので、神様の悲しい心情を分かろうとすると、自分の人生も悲惨にならざるを得ないということです。ですが、その悲惨な人生を感謝するとき、神様は何も知らない子女よりも人生苦を経験した貴方をより一層愛されるようになるということです。なぜなら、神様の悲しみと苦労を知っているからなのです。

ですので、できる苦労は若いうちに買ってでもしておきなさいということです。何故なのでしょう。苦労を経験することで、同じような苦労を経験している人の相対になれるからなのです。そして、同志となり、友になれるからなのです。ですので、伝道で苦労することは一人の人間を復帰する苦労を神様と共に味わえる貴重な経験なのです。人のために多くの涙を流した人が本当に人との円滑な授受作用を可能にさせるのです。

そして、韓国民族は善なる民族だということです。これは全体的に見ればということです。韓国民族も個々人を見れば、犯罪者もいれば、御父母様のように聖人のような人もいます。ですので、個々人を見ればそこにはみながみな善とは限らないのですが、全体的に見ると悪よりは善の素養

が多いというのです。他国を侵略したことがないと書かれていますが、それでは竹島はどうかのだと日本の皆様は思われるかもしれません。ですが、これも長い歴史を全体的に見たときのことで、韓国はその悠久なる歴史において、他国を侵略したことはないというのです。

それから敬天思想がとても強いというのです。韓流の時代劇においては必ず神官という人が登場し、国家の行く末を占い、様々なアドバイスをしています。このような人々を単なる霊能者だと決めつけるのは理解が浅いことであって、韓国の国家運営において神官の影響力は本当に大きかったというのが韓流ドラマでも見ることができます。そして、韓国の代表的な文学書に沈清伝、春香伝があることは、明確に忠孝烈を重んじる文化であることを象徴していると思います。

私たちは韓国の様々な伝統を相続しようと韓国の人から多くのことを学んでいます。その学ぶべき内容がこの敬天思想であり、民族の善良性にあるというのは明白だと思います。日本の文化においては、この敬天思想が本当に希薄なことが、サタン側の国家として利用されてしまった背景にあると思います。

皆様はいかがですか。人の目よりも天の視線を重んじる敬天思想というものは生活に根付いていますでしょうか。

【御言】

この国は預言者の証拠がなければならない

- ① 韓国民族は、李朝 500 年以來、この地に義の王が現れて千年王国を建設し、世界万邦の朝貢を受けるようになるという、鄭鑑録信仰によるメシヤ思想をもっています。
- ② 韓国民族が信じている各宗教の開祖が、韓国に再臨するという啓示を受けています。
- ③ イエス様の韓国再臨に関する霊通人たちの神霊の働きが雨後の竹の子のように起こっています。
・それゆえ、主の韓国再臨に関する明確な啓示を受けています。

【感想】

神様は摂理を進めるにおいて、その多くのことを心ある人に伝えます。これは預言者を遣わされる聖書の歴史を見れば明確なのです。そのような有名な預言が韓国にはあるというのです。ノストラダムスの予言ではありません。未来を予知するという意味の予言ではなく、神様から言葉を預かるという意味での預言なのです。韓国には千年王国を建設する王が誕生するという預言があるのです。それこそが平和の王として推戴された真の御父母様ではないでしょうか。そして、天一国は千年以上続く王国になるという預言でもあるのです。

次に、韓国民族が信じる宗教として儒教、仏教、キリスト教などがありますが、真の御父母様は仏教で言えば弥勒様であり、キリスト教であれば再臨主と、あらゆる宗教の終末における救世主としての使命を持たれているのです。それであるがゆえに、私たちの教会はキリスト教の一宗派なのではなく、すべての宗教を統一してまとめる超宗教的な教理をもって歩む群れでもあるのです。

それから韓国には高い霊界に通じる人が大勢おり、それだけ韓国は霊界が明るいということなのですが、そのような人々がイエス様が韓国に再臨されるという啓示をたくさん受けられているというのです。そのような意味で、日本の霊界とは幽霊に象徴されるように、さまよえる霊が相対しやすく、天に通じるということが本当に難しい国でもあります。それは祈禱を実践されている方は実感されていると思います。

そのような韓国において、多くの預言が霊通人に啓示として与えられており、人々もそのような噂を耳にしているというのです。そのような国家であるがゆえに、イエス様は韓国に再臨されるということが明確なのです。韓国である理由はこのように様々です。皆様はどうして日本にイエス様は再臨されないのですかという質問に答えられますか。その解答を明確に提示しているのがこの再臨論でもあるのです。

【御言】

この国であらゆる文明が結実されなければならない

・有史以来、全世界にわたって発達してきた宗教と科学、すなわち、精神文明と物質文明が、韓国を中心として、みな一つの真理によって吸収融合され、神様の理想世界として結実されなければなりません。

- ① 陸地で発達した文明も韓国で結実する。
- ② 河川と海岸を中心とした文明も韓国が面する太平洋文明として結実しなければなりません。
- ③ 気候を中心とした文明もエデンの温帯文明として、韓国で結実しなければなりません。

【感想】

西洋で発達した物質文明は科学の発達をもたらし、アメリカを経由して、海から韓半島に流れて行きます。そのような海洋文明も韓半島で結実するのであり、中国大陸で発達した東洋文明も韓半島において結実するということです。

皆様の学んでいる統一原理は、単なる宗教の教理ではなく、物質文明の科学の最先端でもあるということです。このように科学と宗教を統一した課題として解決している統一原理が生み出す文明というのは、まさにここで紹介するように大陸文明と海洋文明の出会い結実体となるのです。

そのような心情文化というものを創出する私たちの運動は、まさに西洋文明を昇華させたものであり、東洋の精神文明の未解決の問題を解決した最終解答を提示するものであり、気候を中心として見れば、まさにエデンの園への回帰になっているということです。

ですので、原理は単なる教理に留まらず、この原理に立脚した統一運動は様々な文化活動を提示するようになり、その文化活動は文明を形成するようになるということです。何故に民主主義が行き詰まるのか、何故に共産主義が行き詰まるのか、その理由を明確にして、未来における理想的な文明を提示するのが統一運動なのです。

これから科学の未解決分野を原理が解明するようになるでしょう。宗教の未解決問題も原理が解答を提示することになるでしょう。そのような究極的な真理を私たちは学んでいるのです。

世界の新しい文明の発祥源に統一運動はなると思います。ただ、現状で未だに多くの人が知らないだけなのです。原理の凄さというものをです。ややもすると教会の食口と呼ばれる人も表面的にししか理解していないこともあります。原理と神様の真の愛の力には文明を創建する力があります。それを私たちは伝えようとしているだけなのです。ですので、一国家で収まる運動ではないということです。そのような文明の先駆けとしての歩みをしているという自覚を皆様はお持ちでしょうか。これこそ、まさに時代の最先端を歩んでいるのですよ。

【御言】

第5節 言語混乱の原因とその統一の必然性

- ・人間が墮落しないで完成し、神様をかしらに頂き、一つの体のような大家族の世界をつくったならば、この地球上で互いに通じ合わない言語が生ずるはずはなかったのです。
- ・神様の前で罪を犯したノアの次子ハムの子孫であるカナン族が、サタンの目的を遂げようとしてバベルの塔を高く築きあげました。
- ・ところが、天の側にいたセムとヤペテの種族たちも、この工事に協助していたため、互いに意思を通ずることができないようにし、サタンの仕事に協力できないようにさせるために、神様は彼らの言語を混乱させてしまわれたのです。

【感想】

世界中には多種多様な言語があります。日本においても日本人だけに通用する日本語というのがあります。韓国においても同じです。何ゆえにこのように多くの言語が生じるようになったのでしょうか。世界の公用語は英語だと言いますが、英語を話せる人は世界でどれくらいになるので

しょうか。この言語がいくつも生じ、人類が混乱した原因がかつてのバベルの塔にあったと聖書は記録しています。つまり、神様は悪の目的を成そうとするのを妨げるために、人間の言葉を乱されたというのです。

物事の発展は授受作用によってなされます。悪の発展においてもこの原則は適用されます。悪霊人といくら相対基準が合ったとしても言葉が通じなければ、円滑な授受作用はできません。いくら悪人が地上に多くても、言葉が通じなければ悪の繁殖を抑えることができるというのです。

ですので、そのような言語の問題もあり、サタン世界は国家基準を超えることができないようになっているのです。このように、なぜ、外国語が存在するのかという理由も原理は明確に説明しているのです。それは悪の授受作用を妨げるためにあるというのです。ですが、再臨主が降臨され、神様の善の版図を拡大するにおいては、このような言葉の問題も克服しなければならないというのです。つまり、円滑な授受作用をするためには言葉の壁を突破しないといけないということなのです。

真の御父母様は韓国に降臨されます。当然、韓国人として韓国語を話されるでしょう。そのような御父母様と円滑な授受作用をするためにはやはり韓国語の習得は必須になります。

悪の授受作用を妨げるために言葉は乱れました。ですが、本然の天国が復帰されるためには、この乱れた言葉を再度統一しなければならないという摂理があるのです。皆様はいかがですか。韓国語を勉強されていますか。

【御言】

- 一つの父母のもとにある同じ子孫として、同一の感情をもっていながら、これを表現する言語が異なるために、互いに通じあうことができないということほど不幸なことはいないでしょう。
- 再臨の主を父母として頂く、大家族による理想世界は、当然言語は統一されなければなりません。
- イエス様が韓国に再臨されることが事実であるならば、韓国語はすなわち、祖国語となり、あらゆる民族は使用せざるを得なくなるでしょう。
- このようにして、すべての人類は、一つの言語を用いる一つの民族となって、一つの世界をつくりあげるようになるのです。

【感想】

再臨のイエス様が韓国に再臨されます。そうすると再臨主は当然、韓国語を話されます。真の御父母様は韓国人であるが故に多くの御言を韓国語で語られています。私たちは日本人です。では、真の御父母様に日本語を話してもらうことを求めますか。そうではありません。私たちも韓国語を学ぶべきなのです。真の御父母様の御言も日本語に翻訳されたものを読んでいるとしても、日本語に訳しきれない表現というのがあるのです。それに翻訳する段階で翻訳者の意志が介入されるために、誤訳という可能性も当然あるのです。そのように、真の御父母様と授受作用をするのにおいて、通訳を介してするというのであれば、これは円滑とはとてもゆかないでしょう。それであるがゆえに、韓国語を通訳なしで扱える韓国人がある意味、選民であるという理由もここにあると思います。

さらに、世界中の食口が韓国語をマスターすることで、韓国語が世界共通語として存在するようになるのです。欧米の人も食口であれば韓国語で話が通じますし、アフリカの人も、アジアの人も、食口であればみんな韓国語が分かるので話が通じるという世界が出来上がるのです。ですので、食口の世界共通語が韓国語になるということがここでも語られています。

韓国語で御言を読み進める中で、やはり韓国語でなければ感じ取れない部分があります。心情のひだを感じ取るにはやはり韓国語で原文を読む必要が出てくると思います。皆様はいかがですか。韓流ドラマで韓国語で心情のひだを感じたときの感動を覚えておられる方もいると思います。御父母様の心情を直で受け取るには、やはり通訳を介することなく、ハングルで理解することは必要になると思います。日本語訳された御言とは翻訳者と編集者の様々な思惑が反映していること

を皆様はご存じですか。原文と読み比べてみて、初めてこの点に気づく人もいます。

いずれ私たちが信仰の道を究めようとすればするほど、韓国語は必須になると思います。皆様は韓国語の御父母様の御言を手にしたことはありますか。そして、読んでみたことはありますか。日本語とは別次元の感覚があることを私は感じたことがあります。原理講論においても韓国語版を読んでみてください。新しい発見が必ずあると思います。